

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書38

— 多古町大塚台遺跡(1)～(3) —

令和3年3月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書38

た こ まちおおつかだい いせき
— 多古町大塚台遺跡(1)～(3) —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として、昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第784集として、首都圏中央連絡自動車道建設に伴って実施した香取郡多古町大塚台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、後期旧石器時代前半期の環状のブロック群、古墳時代から奈良・平安時代の集落が確認され、この地域に暮らした人々との歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、本書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

令和3年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 稲 葉 泰

凡　例

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道（大栄～横芝）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡多古町喜多字並木321-2の一部ほかに所在する大塚台遺跡(1)～(3)(遺跡コード347-018)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の委託を受け、公益財團法人千葉県教育振興財團が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の期間、担当者などについては第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、第1・2章、第4章第1節と石器・石製品を文化財主事 山岡磨由子、第3章第1節を主任上席文化財主事 渡邊修一、第3章第2・3節、第4章第2節を主任上席文化財主事 萩原恭一が執筆し、編集は渡邊・山岡が行った。
- 6 黒曜石の産地同定については、明治大学黒曜石研究センターの池谷信之氏に分析を依頼した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、多古町教育委員会、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は以下のとおりである。掲載にあたっては一部縮尺を変更した。
第3・4・7図 多古町発行 1/2500地形図「IX-KF 93-4」「IX-LF 03-2」(昭和54年測量・平成10年修正)および国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所作成現況図
第5図 参謀本部陸軍部測量局 1/20,000迅速測図「大里村」・「芝山村」・「多古町」・「八日市場村」(明治20年～22年版)
第6図 国土地理院発行 1/25,000地形図「新東京国際空港」(NI-54-19-10-1) (平成4年発行)
「多古」(NI-54-19-10-2) (平成4年発行)
- 9 国版1の航空写真は、国土地理院空中写真CKT793-C19B-25(昭和54年12月撮影)を使用した。
- 10 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標(国家標準直角座標第Ⅸ系)で、図面の方位はすべて座標北である。
- 11 遺構名は、各遺構番号の前に調査次数を付記した(例えば第1次調査の第1号住居跡は(1)SI001とする)。
- 12 石器ブロックの大きさは(南北)m×(東西)mと表記したが、例外的に長短、直径で示した箇所がある。
- 13 遺構図および遺物実測図の凡例は、下記のとおりで、これ以外は各図に示した。

遺構

 焼土  カマド構築材  硬化範囲 • 土器 ▪ 土製品 ▲ 石器・石製品 ★ 金属製品

遺物

 赤彩  黒色処理  軸  白軸  掲軸  緑軸
 油煙煤・煤  転用砕使用痕  (断面) 繊維を含む織文土器

本文目次

序 文

凡 例

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査の方法と概要	2
第2節 遺跡の位置と環境	5
1 周辺の地形	5
2 周辺の遺跡	5
第2章 旧石器時代	12
第1節 遺構の概要	12
1 文化層	12
2 報告の体裁	12
3 基本層序	15
第2節 石器ブロックと遺物	16
1 第1文化層	16
2 第1～11ブロック	18
3 第12ブロック	52
4 単独出土石器	54
第3節 大塚台遺跡出土石器の黒曜石原産地推定結果報告	62
1 分析対象資料	62
2 分析方法	62
3 分析結果について	63
第3章 縄文時代以降	66
第1節 縄文時代	66
1 概要	66
2 遺構	66
3 遺物	66
第2節 古墳時代	74
1 概要	74
2 壓穴建物跡 遺構・遺物	74
第3節 奈良・平安時代	78
1 概要	78
2 壓穴建物跡 遺構・遺物	78
3 火葬墓 遺構・遺物	98
4 遺構外出土遺物	102
5 時期・性格不明のその他の土坑	103
第4章 まとめ	110
第1節 旧石器時代	110
1 局部磨製石斧の石材	110
2 台形様石器に類する石器	112
3 黒曜石の原産地、特に仙台秋保産の黒曜石について	114
4 大塚台遺跡環状ブロック群の位置づけ	116
第2節 奈良・平安時代	118
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1章はじめ		第3章縄文時代以降	
第1図 大塚台道路位置概略図	1	第44図 縄文時代遺構	67
第2図 グリッド呼称例	2	第45図 縄文土器①	69
第3図 周辺地形と遺構位置図	3	第46図 縄文土器②	70
第4図 3次調査上層遺構位置図	4	第47図 縄文土器③	71
第5図 大塚台道路と周辺道路(迅速測図)	7	第48図 縄文土器④	72
第6図 大塚台道路と周辺道路(現況図)	8	第49図 縄文時代石器	74
第2章旧石器時代		第50図 (2)SI001	75
第7図 下層本調査範囲と確認グリッド・ブロック位置図	13	第51図 (2)SI001出土遺物	75
第8図 基本層序	15	第52図 (2)SI002	77
第9図 第1~11ブロック器種別分布	16	第53図 (2)SI002出土遺物	77
第10図 第1~11ブロック石材別分布	17	第54図 (3)SI001	79
第11図 第1ブロック遺物分布	18	第55図 (3)SI001出土遺物	79
第12図 第2ブロック遺物分布	19	第56図 (3)SI002a・b, SK001	81
第13図 第3ブロック遺物分布	20	第57図 (3)SI002a・b出土遺物	81
第14図 第4ブロック遺物分布	21	第58図 (3)SI003	82
第15図 第5ブロック遺物分布	22	第59図 (3)SI003出土遺物	82
第16図 第6ブロック遺物分布	23	第60図 (3)SI004	84
第17図 第7・8ブロック遺物分布	24	第61図 (3)SI004出土遺物①	84
第18図 第9ブロック遺物分布	25	第62図 (3)SI004出土遺物②	85
第19図 第10ブロック遺物分布	26	第63図 (3)SI005	86
第20図 第11ブロック遺物分布	27	第64図 (3)SI005出土遺物	86
第21図 第1~11ブロック単独出土石器分布	28	第65図 (3)SI006	88
第22図 第1~11ブロック器種分布状況(1)	30	第66図 (3)SI006出土遺物①	88
第23図 第1~11ブロック器種分布状況(2)	31	第67図 (3)SI006出土遺物②	89
第24図 第1~11ブロック出土石器(1)	32	第68図 (3)SI006出土遺物③	90
第25図 第1~11ブロック出土石器(2)	34	第69図 (3)SI007	93
第26図 第1~11ブロック出土石器(3)	36	第70図 (3)SI007出土遺物①	93
第27図 第1~11ブロック出土石器(4)	38	第71図 (3)SI007出土遺物②	95
第28図 第1~11ブロック出土石器(5)	40	第72図 (3)SI008	96
第29図 第1~11ブロック出土石器(6)	41	第73図 (3)SI008出土遺物①	96
第30図 第1~11ブロック出土石器(7)	43	第74図 (3)SI008出土遺物②	97
第31図 第1~11ブロック出土石器(8)	44	第75図 (3)SX001	99
第32図 第1~11ブロック出土石器(9)	45	第76図 (3)SX001出土遺物	99
第33図 第1~11ブロック母岩別分布	47	第77図 (3)SX002	99
第34図 第1~11ブロック母岩分布状況(1)	48	第78図 (3)SX002出土遺物	99
第35図 第1~11ブロック母岩分布状況(2)	49	第79図 (3)SX003	101
第36図 第1~11ブロック母岩分布状況(3)	50	第80図 (3)SX003出土遺物	101
第37図 第1~11ブロック母岩分布状況(4)	51	第81図 (3)SX004	101
第38図 第12ブロック遺物分布	53	第82図 (3)SX004出土遺物	101
第39図 第12ブロック出土石器	54	第83図 (3)遺構外出土遺物	102
第40図 単独出土石器分布	55	第84図 時期・性格不明のその他の土坑①	104
第41図 単独出土石器	55	第85図 時期・性格不明のその他の土坑②	105
第42図 大塚台道路黒曜石原産地推定判別図	65	第4章まとめ	
第43図 大塚台道路における仙台灰岩原産地と箱根畠宿原産地の判別	65	第86図 大塚台道路主要石器	111
	65	第87図 台形様石器関連の分布	113

第88図 台形様石器と台形様石器に類する石器	113	第90図 大塚台遺跡と環状ブロック群類例	117
第89図 大塚台遺跡と主要な石材の推定産地	115		

表 目 次

第1章 はじめに	
第1表 発掘調査一覧	2
第2表 大塚台遺跡と周辺遺跡一覧	9
第2章 旧石器時代	
第3表 旧石器ブロック別器種・母岩組成表	14
第4表 第1ブロック組成表	18
第5表 第2ブロック組成表	19
第6表 第3ブロック組成表	20
第7表 第4ブロック組成表	21
第8表 第5ブロック組成表	22
第9表 第6ブロック組成表	23
第10表 第7ブロック組成表	24
第11表 第8ブロック組成表	24
第12表 第9ブロック組成表	25
第13表 第10ブロック組成表	26
第14表 第11ブロック組成表	28
第15表 第12ブロック組成表	53
第16表 母岩観察表	56
第17表 石器属性表	58
第18表 大塚台遺跡黒曜石原産地推定結果	64
第19表 大塚台遺跡黒曜石原産地推定集計表(旧石器時代のみ)	65
第3章 縄文時代以降	
第20表 縄文時代石器観察表	74
第21表 古墳時代遺物観察表	78
第22表 奈良・平安時代遺物観察表	106

図 版 目 次

図版1 大塚台遺跡周辺航空写真	
図版2 (1) 調査風景及び遺構	
図版3 (2) 旧石器時代遺物出土状況1	
図版4 (2) 旧石器時代遺物出土状況2	
図版5 (2) 遺構	
図版6 (3) 調査区全景	
図版7 (3) 遺構1	
図版8 (3) 遺構2	
図版9 (3) 遺構3	
図版10 (3) 遺構4	
図版11 (3) 遺構5	
図版12 (3) 遺構6	
図版13 (3) 遺構7	
図版14 旧石器時代石器1	
図版15 旧石器時代石器2	
図版16 旧石器時代石器3	
図版17 旧石器時代石器4	
図版18 縄文土器1	
図版19 縄文土器2	
図版20 縄文土器3	
図版21 縄文時代石器、下層出土黒曜石	
図版22 (2) 壁穴建物跡出土遺物	
図版23 (3) 壁穴建物跡出土遺物1	
図版24 (3) 壁穴建物跡出土遺物2	
図版25 (3) 壁穴建物跡出土遺物3	
図版26 (3) 壁穴建物跡出土遺物4	
図版27 (3) 壁穴建物跡出土遺物5	
図版28 (3) 壁穴建物跡出土遺物6	
図版29 (3) 壁穴建物跡出土遺物7	
図版30 (3) 火葬墓・遺構外出土遺物	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過（第1図、第1表）

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、首都圏の道路交通の円滑化・環境改善・沿線都市間の連絡強化などを目的として都心から半径40km～60kmの範囲に国土交通省が計画した、総延長約300kmの環状の高規格幹線道路である。西方から神奈川県・東京都・埼玉県・茨城県の主要な沿線都市を通って千葉県へ至る。千葉県内の区間は平成4年度から事業化され、これまでに神崎IC～大栄JCT（常総国道事務所）、東金IC～茂原・長南ICおよび茂原・長南IC～木更津IC間（千葉国道事務所及び東日本高速道路株式会社）の工事は終了し開通している。当財団ではこれらに伴う埋蔵文化財発掘調査の結果、平成29年3月までに33冊の報告書を刊行した¹⁾。

大栄～横芝間の18.5kmに関しては、千葉国道事務所が平成26年3月に事業地における埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県教育委員会へ協議を依頼した。その結果、同年3月以降、埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関で協議を重ねたが、事業計画の変更が不可能としてやむをえず記録保存の措置を講じることとし、調査を公益財団法人千葉県教育振興財団が実施することになった。

なお、発掘調査委託契約は、平成26年度～平成29年度が国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所、平成30年度からは東日本高速道路株式会社との間で締結され、平成26年度に開始された発掘調査は現在も継続中である。

本書では、平成28年度～平成30年度に実施した圏央道（大栄～横芝）区間のはば中央部に位置する多古町大塚台遺跡第1～3次調査について報告する。発掘調査・整理作業の期間、担当者等は下記のとおりである。

整理作業

平成31年度（令和元年度）

文化財センター長 島立 桂

調査第一課長 田島 新

担当職員 主任上席文化財主事 萩原恭一

文化財主事 山岡磨由子

内 容 水洗・注記、記録整理～実測・トレースの一部



第1図 大塚台遺跡位置概略図

令和2年度

文化財センター長 福田 誠

調査第一課長 田島 新

担当職員 主任上席文化財主事 渡邊修一、文化財主事 山岡磨由子

内 容 実測・トレースの一部～報告書刊行

第1表 発掘調査一覧

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査 (m ²)		本調査 (m ²)		調査期間	担当者	調査課長 調査第一課長		文化財センター長
			上層	下層	上層	下層			蜂屋 孝之	上守 秀明	
平成28	(1)	1,267	134	20	0	0	28.11.17～28.12.9	沖 松 信 雄	蜂屋 孝之	上守 秀明	
平成29	(2)	12,670	1,532	488	490	576	29.9.19～29.12.26	田 島 新 哲	蜂屋 孝之	上守 秀明	
平成30	(3)	1,014	106	40	650	0	30.8.27～30.11.2	麻 生 正 信	蜂屋 孝之	島 立 桂	

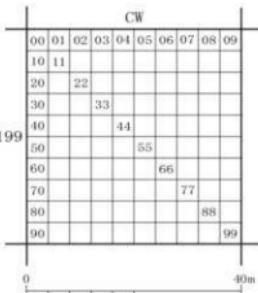
2 調査の方法と概要（第2～6図、第1表）

園央道（大栄～横芝）建設予定地内に所在する遺跡群の調査は、世界測地系（平面直角座標第IX系）に基づく方眼網で覆い、40m×40mの区画を大グリッドとした。成田市大栄J C T付近の起点（1A-00）をX=-20,920,000m・Y=+50,520,000mに置き、この点から40mごとに南へ1・2・3…を、東へA・B・C…・Z・AA・AB…を割り当て、両者を組み合わせて、「199CW」などを大グリッドの呼称とした。また、大グリッド内を一辺4mの正方形区画で100分割して小グリッドを設定した。小グリッドの呼称は北西隅を00とし、東へ01・02…、南へ10・20…と割り振り、南東隅が99となるようにした。これを大グリッドの名称と組み合わせ「199CW-55」のように表記し、調査時に検出した遺構や遺物の位置を、この方眼網を基準に測定し記録した（第2図）。

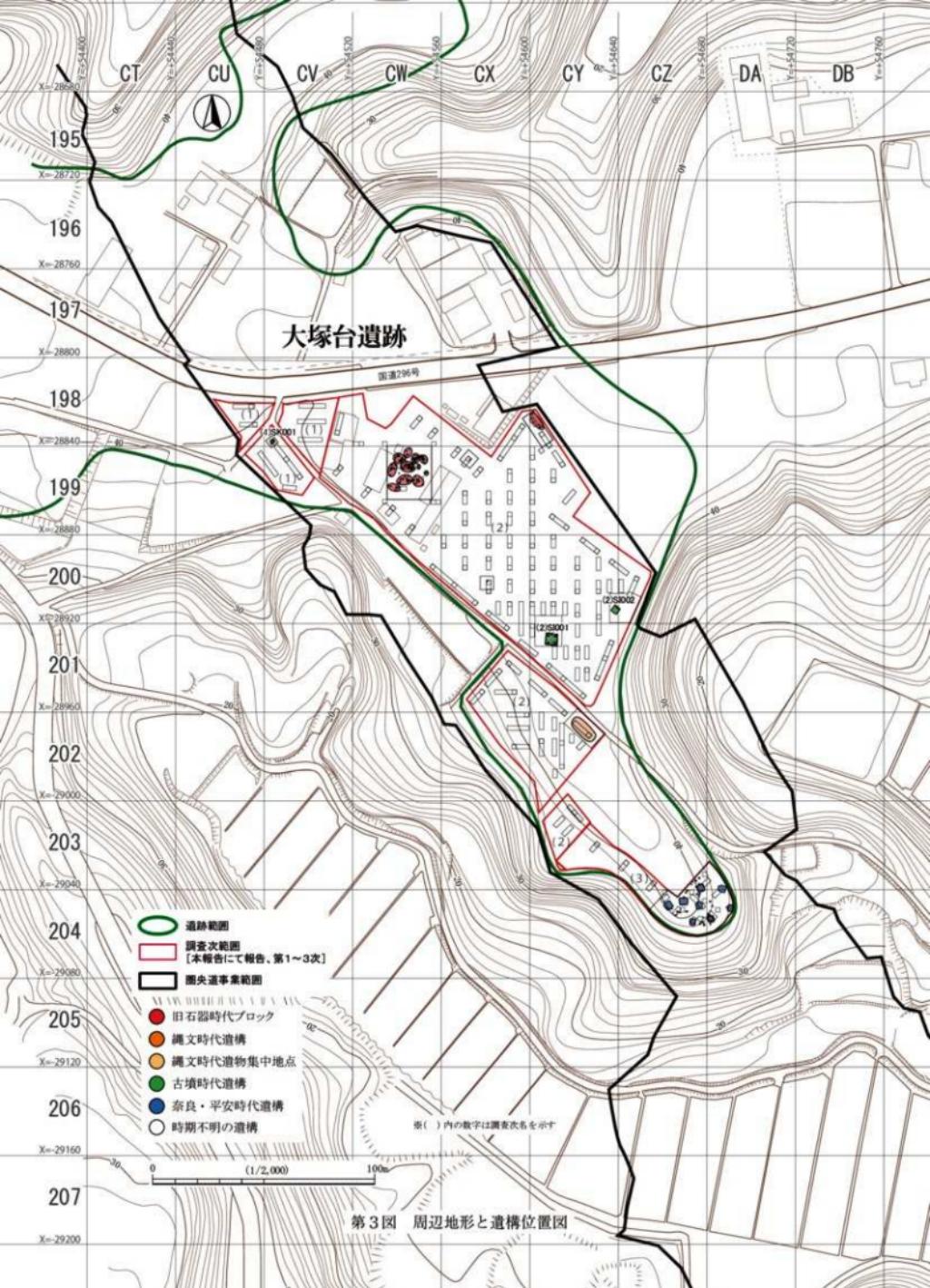
また、遺構・遺物の記録時に用いた標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの海拔高である。調査前には測量業者に基準点測量を委託し、基準杭を設定した。

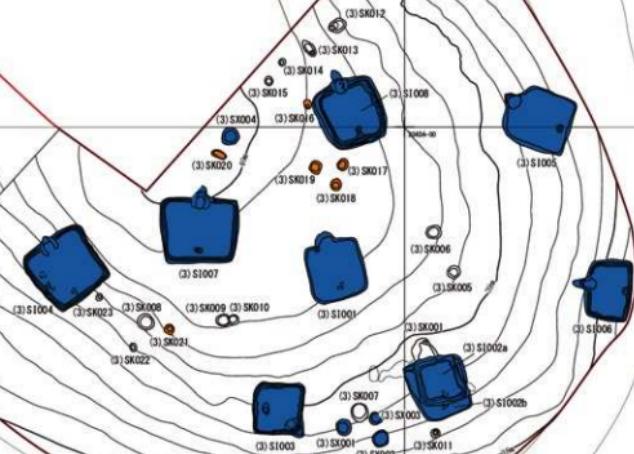
上層確認調査は、幅2m・長さ6mのトレッセを基本とし、重機及び人力により、1,772m²（約12%）の表土を除去・清掃した結果、計1,140m²の上層本調査範囲を決定した。また、下層確認調査は、立川ローム層が堆積していない斜面部以外を対象に、上層本調査地点終了後に2m四方のグリッドを137か所設定して、548m²を人力により掘り下げた。この結果、第2次調査で石器分布を検出し、576m²の本調査を行った。遺構名については、基本的には調査時の記号を踏襲しているが、検討の末、新番号を付したものもある。

調査の結果、旧石器時代の環状ブロック群1基と同時期のブロック1か所、縄文時代竪穴1基・炉穴6基・遺物集中地点1か所、古墳時代竪穴建物跡2棟、奈良・平安時代竪穴建物跡9棟・火葬墓4基（うち1基は不確定）・土坑13基を検出した。遺物は、旧石器時代では局部磨製石斧とその調整剥片、台形様



第2図 グリッド呼称例





● 聖文時代遺構
● 奈良・平安時代遺構
○ 時期不明の遺構

0 (1:250) 10m

第4図 3次調査上層遺構位置図

石器・楔形石器・削器などが出土し、縄文時代では早期から晩期に至る土器・石器、古墳時代は土師器・土製品、奈良・平安時代は土師器・三彩獸脚・藏骨器・鉄製品などが出土した。特に、旧石器時代の環状ブロック群から出土した仙台秋保産と推定される黒曜石や、透閃石岩製の局部磨製石斧、テラス状に張り出した台地の突端に立地する奈良・平安時代の堅穴建物跡や火葬墓、複数の三彩獸脚が注目される。

第2節 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形（第3～6図、図版1）

大塚台遺跡は千葉県香取郡多古町喜多字並木321-2の一部ほかに所在し、千葉県北部に広がる下総台地に立地している。下総台地東部は北総台地と呼ばれ、ちょうど新東京国際空港地域を分水嶺として、北は利根川に流入する大小の河川の開析により支谷が複雑に入り込む地形を呈し、南は九十九里浜に注ぎ込む幾筋もの河川が同じ方向に流れるため、幅の狭い樹枝状の台地が歯の歯状に延びる。大塚台遺跡の東側には栗山川の支流の多古橋川、西には高谷川が流れ、南側は多古橋川へ流入する小河川が台地を刻む。遺跡周辺の標高は40m～41m前後で、奈良・平安時代の集落を載せる南東に張り出したテラス状の台地と谷津水田面との比高は27m～28m、遺跡北西に位置する旧石器時代の環状ブロック群の立地面と北、東、南側の谷との比高は20mを下らない。

2 周辺の遺跡（第1・5・6図、第2表）

第5・6図は、県遺跡分布地図^{2・3)}に基づき、周辺の主な遺跡の位置・範囲と圏央道の計画位置を示したものである。大塚台遺跡は、圏央道（大栄～横芝）区间事業地内⁴⁾では西を高谷川、東を多古橋川に挟まれた中央域にあたり、多古町と芝町にまたがって立地する。遺跡番号は、圏央道（大栄～横芝）事業に伴う遺跡を1～15とし、16以降は圏央道事業関連以外の遺跡に北西から南東方向に番号を振ったものである。遺跡の概要は第2表に記したとおりである。大塚台遺跡では、主に後期旧石器時代前葉と奈良・平安時代の遺構が検出されており、これらの時期に着目しつつ周辺遺跡の様相を記載する。

旧石器時代

大塚台遺跡から高谷川と多古橋川の間を南南東へ約2km行くと林小原子台遺跡(93)、棗根遺跡(94)、土持台遺跡(95)、林中ノ台遺跡(96)、吹入台遺跡(97)を包含する多古工業団地内遺跡群⁵⁾がある。これらの5遺跡からは旧石器時代の石器群が検出され、本遺跡と同じIX層下部の石器群として土持台遺跡A・Bブロックが挙げられる。Aブロックの直径は約13mと小型ながら環状ブロック群を呈し、西側にBブロックが付帯する。Aブロックでは局部磨製石斧1点、削器1点、石核2点、礫2点、測片107点が出土した。棗根遺跡ではA・D・E・F・HブロックがIX層を中心とした石器集中域である。なお、多古工業団地内遺跡群の調査報告後6年を経て層序区分の統一的な細分案が提示された⁶⁾ため、本章では修正後の層位に基づいて記載している。

大塚台遺跡より新しい時期であるが、吹入台遺跡(97)の南西に隣接する千田台遺跡(105)ではVI・VII層中心に27地点が検出された。新田浩三氏による「下総型石刃再生技法」の提唱、矢本節朗氏の「千田台技法」が発現された標式遺跡⁷⁾であり、東北地方から持ち込まれた硬質頁岩製石刃を可能な限り利用した痕跡が石器に残されている。

なお、圏央道事業（大栄～横芝）⁴⁾では、北から大安場遺跡、夜番遺跡、大ヨロ遺跡、間倉遺跡(3)、

加茂台遺跡(5)、一つ塚遺跡(6)、千田の台遺跡(11)、遠山天ノ作遺跡、四ツ塚遺跡のローム層中からIX層下部～Ⅲ層上部に亘る石器群が検出されており、いくつかの遺跡では既存の石器集中域の広がりが確認、あるいは予想される。首都圏中央自動車道埋蔵文化財調査報告書34⁸⁾では夜番Ⅱ遺跡IX層上部で2か所の重層状ブロック群、同36⁹⁾では夜番Ⅰ遺跡で細石刃石器群が報告され、「遠山技法」による楔形石器の標式遺跡である遠山天ノ作遺跡では既報告と同様の石器群が検出された。遠山天ノ作遺跡に隣接する四ツ塚遺跡は、IX層中部で検出された複数の環状ブロック群がつとに知られているが、今回の調査においてもそれらに関連する石器群を確認した。また、未報告であるが、大塚台遺跡の北に隣接する一つ塚遺跡では東北産の硬質頁岩を用いた「北方系細石器」石器群が確認されたほか、平成28年度に調査が行われた大安場Ⅱ遺跡では「本ノ木型尖頭器」が製品の状態で15点出土している。これらは旧石器時代終末期から縄文時代への移行期にかけての貴重な資料であり、当該期における房総半島への人々の往来や遺物の搬入経路を知る手がかりともなる。

縄文時代

縄文時代の遺跡は高谷川流域・多古橋川流域の両岸に点在するが、中央の十余三台地、現在の多古工業団地周辺には早・前期の遺跡が多数分布している⁵⁾。

大塚台遺跡から多古橋川を挟んだ対岸に位置する多古台遺跡(119)では、堅穴建物跡6棟と早・前期主体の土器が出土した。芝山町境貝塚(62)では、前期～後・晩期の遺物がまとまりをもって出土している。なお、多古町高谷川低地遺跡(15)では縄文時代後・晩期の丸木舟や木製品が多数出土した。このほか芝山町内堀遺跡(28)、庄作遺跡(72)、小原子大谷遺跡(71)、多古町林小原子台遺跡(93)、巣根遺跡(94)等で縄文時代の遺物が出土している。

弥生時代

多古台遺跡(119)で後期の堅穴建物跡3棟が検出された。

古墳時代

古墳・集落は、高谷川流域では山田・宝馬古墳群(52)などに点在し、多古橋川流域では北部、特に多古工業団地周辺に密集する。芝山町遠野台・長津遺跡(34)、上吹入遺跡(67)、折戸遺跡(58)等では中期の集落がみられる。

圓央道事業の発掘調査では大塚台遺跡のほか、加茂台遺跡(5)・一つ塚遺跡(6)で円墳が調査されている。多古工業団地の調査では、土持台遺跡(95)で5世紀代4棟、6世紀代5棟、7世紀代5棟で構成される集落が検出され、林中ノ台遺跡(96)では後期の堅穴建物跡2棟と円墳2基が検出された。多古台遺跡(119)では、前・中期堅穴建物跡18棟、古墳25基が調査されている。

五反田清水沢遺跡(8)、上吹入遺跡(67)、下吹入東台遺跡(66)、林遺跡(74)、土持台遺跡(95)の5世紀代の堅穴建物跡、多古台遺跡(119)の5世紀代の古墳等から滑石製模造品が出土しており、高谷川と多古橋川に挟まれた当地域では、規模は小さいながら石製模造品製作遺構が数多く確認されている。

奈良・平安時代

多古工業団地の調査では、吹入台遺跡(97)でまとまった集落が検出されたほか、林小原子台遺跡から藏骨器を埋納した土坑が2基確認され、そのうち1基からは墓誌の可能性がある鉄製品が伴っていた。多古工業団地全体では方形周溝構造10基、藏骨器埋納構造が計6地点で検出されている。その南側に近接する千田台遺跡(105)や千田の台遺跡(11)でも8世紀～9世紀に營まれた集落がまとまって検出された。近年



第5図 大塚台遺跡と周辺遺跡(迅速測図)



第6図 大塚台遺跡と周辺遺跡(現況図)

第2表 大塚台遺跡と周辺遺跡一覧(1)

「主な遺構」のブロックは石器部品ブロック。ブロック・住居・古墳の數については明確にわかるものののみ記載。住居は壁跡群に統一。)

番号	地名別 施設番 号	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺構・遺物等	調査歴等
1 27		大塚台遺跡	多古町喜多、東佐野 芝山町大里	旧石器、縄文、古墳、奈・平	環状土器・陶器・土師器、奈良・和銅	昭和38年、大塚台古墳群含む。 是山町No.150、発達道38
2 198		かや田遺跡	多古町閑倉	縄文、古墳	プロトクル・土師器、縄文土器、土師器	昭和36 昭和36 昭和36、閑倉古墳群含む。
3 4		間倉遺跡	多古町閑倉	旧石器、古墳、奈・平	プロトクル、円筒埴・土師器	是山町No.13 昭和36 是山町No.19
4 195		宮台遺跡	多古町閑倉	縄文、古墳	円筒埴、石棺・縄文土器、奈刀	昭和36 昭和36、閑倉古墳群含む。
5 169		加茂台遺跡	多古町閑倉・振原	旧石器、縄文(前)、古墳	プロトクル、円筒埴・埴輪・土師器	昭和36 昭和36、閑倉古墳群含む。
6 22		一つ山遺跡	多古町喜多・大原	旧石器、縄文、古墳、奈・平	プロトクル・円筒埴・縄文石器群、縄文土器、土師器	昭和36 昭和36 昭和36
7		五反田原遺跡	多古町五反田	縄文	土棺・土器	昭和39
8		五反田原水沢尻遺跡	多古町林	縄文(前)、古墳(中)、奈	堅穴建物跡・縄文土器、土師器、滑石	昭和35 昭和35
9 94		長者原遺跡	多古町林	縄文(後)、古墳、奈・平、中・近世	円筒埴、埴輪・縄文土器、土師器、須恵器	長者原敷地、上人屋遺跡、上人 保古墳群、長谷台古跡群含む
10		水戸屋・後1号屋、 2号屋	多古町水戸	奈・平、中・近世	堅穴建物跡、壁	
11 88		千田の台遺跡	多古町千田	縄文(早・盛)、古墳(後)、奈・平、中・近世	仰窓、堅穴建物跡、土坑、埴輪・縄文土器(夏目)、草木、黒陶、浮泡、加曾利B、平行1・2・3)、土師器、須恵器、鐵器	昭和52年調査、一部消滅、 但曾良環、猪食跡含む。 是山町No.99、園先通37
12		猿谷寺跡	芝山町庵	中世		
13		猿谷台遺跡	芝山町庵	縄文、古墳、奈・平、中・近世	円筒埴、埴輪、土坑、竪穴、堅穴建物跡、新粘土探掘	一部消滅、 昭和15-16年調査 是山町古跡群含む。
14 129		殿町田古墳群	芝山町殿町	縄文、古墳、近世	圓窓、堅穴建物跡、土坑、埴輪・縄文土器、埴輪(刀劍)、人物、動物、土師器、須恵器	昭和48-812-13年調査
15 140		高谷川低地遺跡	芝山町中平・喜多・名古 芝茂尾下り・中平・中平	縄文(後)、古墳、奈・平、中・近世	縄文土器(加曾利B、安行1・2、前浦)、本製品(丸木 舟)、漆器、唐津竹器、鐵杖形木製品)、土師器、須恵器	昭和52年調査
16 7		山木遺跡	芝山町山木	奈・平	土師器	
17 143		根折台遺跡	芝山町山木	縄文(前)、古墳(後)、奈・平、中・近世	古墳時代大型堅穴建物跡53m、陷穴、埴輪・縄文土器(前)、 第六、前房門形土器、須恵器、土師器、輪郭器	昭和5-6年調査
18 9		野中遺跡	芝山町山木	奈・平、中・近世	土師器	
19 17		池ヶ谷遺跡	芝山町山木	奈・平	土師器	
20 18		谷台遺跡	芝山町山木	中・近世	馬士手、槽形、土壠	山田町馬山地群、昭和52-81年調査 馬山地群調査
21		金牟古墳群	芝山町山木	縄文、古墳	円筒埴・縄文土器	多古町No.195
22 27		大鷦鷯古墳群	芝山町山木	奈・平	土師器	
23 28		大鷦鷯古墳群	芝山町山木	古墳、奈・中・近世	前方後円墳、円筒埴1、壁2	
24 13		上東谷遺跡	多古町閑倉	奈・平	土師器	昭和52年調査、多古町No.4
25 24		大黒田辺古墳群	芝山町大黒	古墳、奈・中・近世	円筒埴(3)、方墳(1)、壁16	昭和50年調査
26 33		小堀遺跡	芝山町大黒	奈・平	土師器	
27 31		宿遺跡	芝山町大黒	縄文(前)、古墳(後)、奈・平	縄文土器(安行)、土師器、埴輪	昭和60年調査
28 33		御室遺跡	芝山町大黒	縄文(中)、奈・平	縄文土器(安行)、土師器、輪郭器	
29 32		中室越遺跡	芝山町大黒	古墳、奈・中・近世	堅穴建物跡、土坑、須恵器、輪郭器、羽口、 輪郭器、堅穴(3)、刀子	昭和52年調査
30		坂志岡遺跡	芝山町大黒	紀・古墳(中)、後、奈	土師器、縄文土器(田子下掘)、加曾利B、壁1内、 土師器、須恵器、刀子、石質軋壓器、管玉、鑿玉	昭和32-4年調査
31 59		長寿町白石遺跡	芝山町大黒	縄文(前)、奈・平	縄文土器(浮出)	
32 60		大谷遺跡	芝山町大黒	縄文(前)、古墳(中)、奈・平	縄文土器(安行)、土師器、埴輪	昭和60年調査
33		大黒古墳群	芝山町大黒	古墳	縄文土器(中)、奈・平	
34 151		遠野町・長瀬遺跡	芝山町大黒	古墳(中)、奈・平、中・近世	石器、縄文(中)、奈・平、中・近世、土師器、須恵器、 堅穴建物跡、土坑、輪郭器、輪郭器(阿仁台)、奈生 土器、土師器、土玉、土鉢、輪郭器、須恵器	昭和56年調査、多古町No.27
35 49		浅見遺跡	芝山町岩山	奈・平	土師器	昭和56年調査
36 50		平野遺跡	芝山町岩山	縄文(中)、奈・平	縄文土器(加曾利B)、土師器	多古町No.27
37 51		浅川遺跡	芝山町岩山	縄文(中)、奈・平	縄文土器(安行)	
38 52		涌葉森遺跡	芝山町岩山	縄文(後)	縄文土器(加曾利B)、土師器	
39 53		飯坂城跡	芝山町飯坂	中世	多軒造清・中國製磁器(染付、白磁)、南朝付着器カワ タ、国、陶器(天目釉)、灰陶、白陶、白磁、青白磁、白釉、青白磁、 土器、土器、須恵器、刀子、石質軋壓器、管玉、鑿玉	昭和51年調査
40 74		牛連遺跡	芝山町山田	縄文(前)	縄文土器(諸説)	
41 155		石井遺跡	芝山町山田	古墳	土師器	
42 75		作尻遺跡	芝山町山田	奈・平	土師器	
43 79		向山遺跡	芝山町山田	奈・平	土師器	
44 157		上細子遺跡	芝山町天石	中世	堅穴、輪郭、輪郭器	
45 158		宝永作遺跡	芝山町天石	古石器、縄文(早・中)、奈・平、中・近世	石器、刀石、削片、縄文土器、石製品、土師器、須恵器、 堅穴建物跡、土坑、輪郭器	昭和53年調査
46 159		中ノ台遺跡	芝山町天石	古墳、奈・平、中・近世	土師器、土器、須恵器、土脚、輪郭器、勾玉、 土玉、管玉、石器、刀子、網繩	昭和62-63年調査
47 85		大台城跡	芝山町天石	中・近世	馬、馬頭、馬頭、土師器、須恵器、土脚、輪郭器、勾玉、 土玉、管玉、刀子、土器	
48 165		稻荷作遺跡	芝山町天石	奈・平、中・近世	堅穴、土器	昭和53年調査
49 166		荒生遺跡	芝山町天石	奈・平、中・近世	堅穴、土器	昭和53年調査
50 167		下在波故跡	芝山町天石	中・近世	土器、管	
51 89		寺の内遺跡	芝山町天石	縄文(中)、奈・平、古墳(後)、奈・平	縄文土器(茅山・加曾利B)、土師器、須恵器、 堅穴建物跡、土坑、輪郭器、輪郭器	
52 70		山面・宝馬古墳群	山面・宝馬	旧石器、縄文、古墳	堅穴、土器、須恵器、土脚、輪郭器、勾玉、 土玉、管玉、刀子、網繩	昭和53-56、H8-10+14-15+16-17+ 18-19+20-23+27年調査
53 113		田向城跡	芝山町小池	縄文(前)、中・後)、古墳(後)、 中・近世	堅穴、土器、須恵器、土脚、輪郭器、勾玉、 土玉、管玉、刀子、網繩	昭和52-5年調査
54 114		谷津古墳群	芝山町小池	古墳	堅穴、土器、須恵器、土脚、輪郭器、勾玉、 土玉、管玉、刀子、網繩	
55 117		井田城遺跡	芝山町小池	奈・平	土器	
56 138		山中城跡	芝山町山中谷	中世	土器、空器、瓶、虎口	
57 171		殿町田城跡	芝山町殿町	中・近世	堅穴	
58 128		折戸遺跡	芝山町高谷	縄文(後)、古墳(中)、奈・平	堅穴建物跡4、堅穴柱建物跡、土坑、廣 圓窓、堅穴、土器、須恵器、土脚、輪郭器、須恵器	昭和58年調査
59 164		賢ノ宮遺跡	芝山町庵	縄文、古墳	堅穴、土器	昭和58年調査
60 99		龜谷遺跡	芝山町庵	縄文(前)、奈・平	縄文土器(黑土)、土師器	多古町No.88
61		山ノ台遺跡	芝山町庵	縄文、古墳、奈・平	堅穴建物跡、堅・廣、土坑、黏土保成坑・縄文土器、 土師器、須恵器、鉢	昭和54-55年調査

第2表 大坂台遺跡と周辺遺跡一覧(2)

(遺跡名の太字は発掘調査歴及び予定あり。1~1回2回発掘(大坂~櫛ヶ原)間隔。「主な時代」の京・平は奈良・平安時代。
「主な遺構」のブロックは瓦石器ブロック。ブロック・住居・古墳の数値については明確にわかるもののみ記載。住居跡は建物跡に統一。)

番号	組分番 組番号	遺跡名	所在地	主な時代	主な遺跡・遺構等	調査歴等
62	98	魔具塚	芝山町魔具 多古町牛田	圓文(前、中、後)、古墳	圓文時代六角土器類、堆積貝殻、土坑、隕穴、鐵芯立刀座 御刀、土器破片、圓文土器(黑色、阿三台、加曾利、 称号名、加曾利B、安行、箕山、南浦、千歲、花瀬)、 圓文石器、火鉢、須恵器、燒造物、鐵製品、陶器器 無穴火鉢跡、鐵製土器、鐵製刀、土器、瓦生口器、土器芯、須恵器	H13.17~18・19年調査 多古町N165
63	162	宮崎上野台遺跡	芝山町吉崎	弥生、古墳	土器、瓶	81年調査
64	163	吉崎古跡	芝山町吉崎	半・近世	土器	半代人5津道遺跡を含む、H61~63年調査
65	160	宮前遺跡	芝山町吉谷作	圓文、中・近世	罐H16	81年調査
66	161	吹入八重台遺跡	芝山町上吹人	弥生(後)、古墳(前、後)	/土器H22、須恵器、滑石模造品、玻璃、ガラス瓦、瓦、铁製 土器	H61~調査
67	97	上吹八重台	芝山町上吹人	古墳(中)	土器	S52年調査
68	156	上吹八重台	芝山町上吹人	世紀	土器、鐵芯立刀、土器器、陶器(瀬戸・常滑) 円筒	B8年調査
69	96	上吹人・林吉原群	芝山町上吹人	古墳	鐵芯立刀、土器、土器器、瓦生口器、土器芯、須恵器	81年調査
70	61	谷塚・上安楽遺跡	芝山町小原子	圓文(前)、古墳、奈・平、中世	鐵芯立刀、土器、土器器、瓦生口器、土器芯、須恵器、器蓋土器、 輪孔、勾爪、管瓦、瓦石、鐵製品(刀子)、箭頭等	81年調査
71	63	小原子・八重塚跡	芝山町小原子	圓文(中)、古墳(後)、奈・平	圓文(中)、土器、瓦生口器、加曾利A、土器器	81年調査
72	152	庄作遺跡	多古町五反田	圓文(中)、古墳(後)、奈・平	圓文(中)、吉原(芝山・阿玉台)、器蓋土器、土器器、須恵器、 土質器、石器、石製品(舟、鍬、鋤、牛軒、刀子、盤)	H60~61年調査、多古町N35
73	95	復台遺跡	多古町林	圓文(後)	圓文土器(加曾利B)	多古町N37
74	37	林遺跡	多古町林	白石器、圓文(中)、後、古墳	前方後円墳、円墳2・植先形尖頭器、圓文土器	S52~55年調査、消滅、 芝山町N63~95
75	256	間倉翁跡	多古町間倉	中・近世	鋤跡	81年調査
76	197	松本古跡	多古町間倉	圓文	圓文土器	一部消滅
77	199	南野の森遺跡	多古町間倉	圓文(草)、奈・平	圓文(草)、易鳥、稻荷背台、土器器	81年調査
78	14	北道遺跡	多古町瓶井	圓文	圓文土器	81年調査
79	200	通谷遺跡	多古町瓶井	奈・平	土器器	81年調査
80	39	馬廻遺跡	多古町瓶井	古墳	土器器	81年調査
81	40	庄屋古台遺跡	多古町瓶井	奈・平	円墳3	一部消滅
82	6	飼田山1遺跡	多古町瓶井	圓文、古墳、奈・平	土器器	但馬古台古墳む
83	7	飼田山2遺跡	多古町瓶井	圓文(草)	圓文(草)、易鳥、稻荷台、土器器	81年調査
84	248	大窓遺跡	多古町瓶井	圓文(草)	圓文(草)、易鳥、稻荷台、土器器	81年調査
85	24	倭田台遺跡	多古町蒲佐	古墳、奈・平	円墳2、方墳2、施作式滑造品、各式石棺、土器器、器蓋土器、 須恵器、鏡片	S53年調査、倭田古台古墳群、 天保古墳群含む
86	28	蒙山谷遺跡	多古町蒲佐	古墳	圓文(草)、土器器、土器器、須恵器	一部消滅
87	30	北の内遺跡	多古町蒲佐	古墳、奈・平、中世	圓文(草)、土器器、須恵器	天原城跡含む
88	264	東台城跡	多古町蒲佐	中世	圓文	81年調査
89	31	向台遺跡	多古町蒲佐	圓文(草)、古墳、奈・平	円墳2、土器器(黑色)、土器器、須恵器、器蓋土器	新田遺跡、大谷台古台古墳む
90	168	大原遺跡	多古町蒲佐	石器、古墳、奈・平	圓文(草)、古墳、奈・平	S57年調査
91	32	木戸川遺跡	多古町五反田	古墳	円墳2、土器器	源流河、木戸川古墳含む
92	2	千疊井跡	多古町五反田	圓文(中)、古墳、奈・平	圓文(草)、奈(阿玉台、柳坂)、土器器、須恵器	延政院、芝山町N162
93	260	林小原子台遺跡	多古町水戸	白石器、圓文(草)、中	石器中段2、施作式滑造品、各式石棺、土器器、須恵器	多古T・東渠地遺跡S56~57年調査
94	258	黒桜遺跡	多古町水戸	白石器、圓文(草)、平安	石器群、方彌形圓底長持瓶、各式石器、土器、隕穴、須 土坑、ナチュラル形石臼、割石、土器器、須恵器	S56~57年調査、消滅
95	262	土持台遺跡	多古町水戸	白石器、圓文(草)、中	石器底部削除跡、穴尖頭器、他上、隕穴、圓底造跡、土器 方形圓底長持瓶、土器器、須恵器	S56~58年調査、消滅
96	263	林中ノ台遺跡	多古町水戸	白石器、圓文(草)、中	石器底部削除跡、土器器、須恵器	S56~57年調査、消滅
97	259	吹入台遺跡	多古町水戸	白石器、圓文、古墳、平安	石器底部削除跡、土器器、須恵器	S56~57年調査、消滅、 芝山町N97
98	99	城ノ台遺跡	多古町水戸	古墳、奈・平	円墳2、土器器	源流河、木戸川古墳含む
99	257	初田翁跡	多古町水戸	中・近世	圓文(草)、土器器、土器器、須恵器	延政院、芝山町N162
100	104	中ノ谷・猪群跡	多古町水戸	古墳	圓文(草)、土器器、須恵器	多古T・東渠地遺跡S56~57年調査
101	105	下里塙遺跡	多古町船越	古墳、奈・平	円墳1、土器器、須恵器(草部)、土器器	石器群、方彌形圓底長持瓶、各式石器、土器、隕穴、須 土坑、ナチュラル形石臼、割石、土器器、須恵器
102	108	谷谷道遺跡	多古町船越	古墳、奈・平	圓文(草)、古墳、奈・平	S56~57年調査、消滅
103	103	大島塙跡	多古町船越	中・近世	圓文(草)、土器器、須恵器	一部消滅、下里塙古台古墳む
104	91	桔梗地遺跡	多古町船越	古墳、奈・平	圓文(草)、土器器、須恵器	石器底部削除跡、土器器、須恵器
105	165	千面台遺跡	多古町牛尾	石器、圓文(草)、後、古墳、 奈・平、中・近世	圓文(草)、土器器、須恵器	S56~57~58年調査、 源流河、木戸川、土器、片削、圓文土器(夏高)
106	163	戸上台遺跡	多古町牛尾	圓文(草)	土器器、須恵器、土器器	石底立刀、圓土器(茅原)
107	41	瓶根隈遺跡	多古町牛尾	近世	土器器、須恵器	土器器、瓶根隈
108	212	西四角山遺跡	多古町船越	古墳	圓文、奈・平	圓文(草)、土器器
109	246	打手道跡	多古町船越	古墳	土器器	土器器
110	42	向右台遺跡	多古町船越	圓文(草)、中・古墳、奈・平	前方後円墳2、円墳1・圓文(草)、土器器、須恵器	S53~55年調査、消滅
111	45	三重寺・猪群跡	多古町船越	古墳	前方後円墳2、円墳2~4・圓文(草)、刀子	西ノ下古墳・千田貝塙む S56~57年調査、 芝山町N98
112	104	高津原山遺跡	多古町高津原	古墳	刀子13	土器器、須恵器
113	109	上人冢遺跡	多古町井戸山	圓文(草)、中・古墳、奈・平、 中・近世	土器器、圓文土器(加曾利)、土器器、須恵器、陶器・礎器	81年調査
114	183	八三遺跡	多古町多古	圓文、古墳、奈・平	堅穴火鉢跡、ビット・土坑、錐立柱埋物跡、圓文土器、 土器器、須恵器	S56年調査
115	182	八田翁移穴群	多古町多古	古墳	鍋穴、須恵器	一部消滅
116	175	与食台遺跡	多古町多古	古墳、奈・平	土器器、須恵器	81年調査
117	176	鶴每當移跡	多古町多古	古墳、奈・平	銅鏡、土器器	消滅
118	178	傍尔白翁跡	多古町多古	古墳	圓文(草)、奈・平	圓文(草)、土器器(加曾利)、土器器、須恵器、陶器・礎器
119	109	多古台遺跡	多古町多古	圓文(草)、奈・古墳、草・奈・ 中・近世	堅穴火鉢跡、ビット・土坑、錐立柱埋物跡、圓文土器、 土器器、須恵器	81年調査
120	113	松平丘陵跡	多古町多古	近世	貝殻、古墳・尖頭器、有舌尖頭器、圓文土器(加曾利)、 土器器、須恵器	一部消滅、中京製鐵・辰谷貢販、 辰谷作業員含む
121	112	多古町出城跡	多古町多古	中・近世	隕穴、石器	多古城跡、辰谷販
122	46	桜宮遺跡	多古町桜宮	古墳、奈・平	堅穴火鉢跡、土器器	一部消滅
123	177	岩坂遺跡	多古町岩坂	古墳、奈・平	堅穴火鉢跡、土器器	81年調査、一部消滅
124	173	人太舟内遺跡	多古町染井	古墳、奈・平	土器器	81年調査
125	171	宮台遺跡	多古町染井	圓文、奈・平	圓文土器、土器器、須恵器	81年調査

の成果としては、本遺跡(1)から出土した藏骨器や奈良三彩の獸脚といった遺物に加えて、テラス状に張り出した台地の突端に営まれた遺跡立地は特筆に値すると思われる。

中・近世

台地整形区画や地下式坑群が検出された千田の台遺跡(11)の周辺は、中世の莊園、「千田庄」の役所の跡地と目され¹⁰⁾、土坑の中には牛や馬が埋葬されているものがある¹¹⁾。

河川に挟まれた台地の突出部分には多くの城館や砦が築かれており、遺構の一部は今も残る。

圏央道（大栄～横芝）事業での近世の塚は、水戸塚ノ後1号塚・2号塚(10)で調査されている。

註

- 1 (財)千葉県文化財センター、(財・公財)千葉県教育振興財団 2004～2016『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書』1～33
- 2 (財)千葉県文化財センター 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)－香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)－』
- 3 千葉県ホームページしば情報マップ「ふさの国文化財ナビゲーション」(<http://map.pref.chiba.lg.jp>)
- 4 圏央道（大栄～横芝）区间事業地の38遺跡を北から順に記載する。大安場I遺跡・辰巳ヶ入遺跡・大安場II遺跡・大安場III遺跡・大安場IV遺跡・大安場V遺跡・水ノ上I遺跡・一坪田入I遺跡・一坪田入II遺跡・夜番II遺跡・夜番I遺跡・旧矢作牧野馬除土手（3地点あり）・大ヨロI遺跡・かや田遺跡・間倉遺跡・宮台遺跡・加茂台遺跡・一つ塚遺跡・大塚台遺跡・五反田栗島遺跡・五反田清水沢遺跡・長者屋敷遺跡・水戸塚ノ後1号塚・水戸塚ノ後2号塚・千田の台遺跡・境堀跡・儘田台遺跡・殿部田古墳群・高谷川低地遺跡・向田城跡・木戸台遺跡・吹場遺跡・大山遺跡・山武姥山遺跡・遠山天ノ作遺跡・四ツ塚遺跡
- 5 古内 茂・三浦和信ほか 1986『多古工業団地遺跡群発掘調査報告書－林小原子台・果根・土持台・林中ノ台・吹入台－』(財)千葉県文化財センター
- 6 島立 桂・新田浩三・渡辺修一 1992『下総台地における立川ローム層の層序区分』『研究連絡誌』35 (財)千葉県文化財センター
- 7 矢本節朗・渡辺高広 1996『多古町千田台遺跡－BR／W南側NDB用地(無線施設)埋蔵文化財調査報告書－』(財)千葉県文化財センター
- 8 新田浩三ほか 2019『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書34－成田市大安場I遺跡・辰巳ヶ入遺跡・大安場IV遺跡・大安場V遺跡・水の上I遺跡・一坪田入II遺跡・夜番II遺跡・夜番I遺跡－』(公財)千葉県教育振興財団
- 9 新田浩三 2020『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書36－成田市夜番I遺跡・横芝光町遠山天ノ作遺跡・横芝光町四ツ塚遺跡・山武市四ツ塚遺跡－』(公財)千葉県教育振興財団
- 10 多古町 1985『多古町史 上巻』『多古町史 下巻』
- 11 山口典子ほか 2020『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書37－多古町千田の台遺跡(1)－』(公財)千葉県教育振興財団

第2章 旧石器時代

第1節 遺構の概要

1 文化層

旧石器時代の調査は、調査面積の約4%について下層確認グリッドを設定し、石器包含層と遺構の確認された周囲を精査することによって、石器集中地点の広がりと遺構の全体像を把握した。

石器は標高約40mの台地上にまとまりをもって分布しており、これらの石器集中地点は、西は高谷川、東は多古橋川に注ぐ2条の小河川に刻まれた分水嶺に立地する。出土層位はX層から第2黒色帶下部のIX層にかけての第1文化層とした1枚のみで、12か所の石器集中地点（以下ブロック）が確認された。

第1文化層には第1ブロックから第12ブロック、単独出土2点が帰属し、このうち第11ブロックまでが一つのブロック群を構成する。このブロック群は調査区北西側に位置し、台地縁辺からはやや離れた平坦地に立地している。10か所の環状部と1か所の環央部で構成され、東側に石器分布のまばらな開口部をもつものの、いわゆる「環状ブロック群」に相当すると考えられる。出土層位はX層～IX層であり、IX層に集中する。第1文化層からは台形様石器・ナイフ形石器・削器・楔形石器・局部磨製石斧・局部磨製石斧調整剥片・磨石類・敲石類・台石・石核・剥片・碎片・原石など、計176点の遺物が出土した。複数の局部磨製石斧からは剥片類が多く作出されており、石斧本来の形状を留める完形品はない。また、この時期に特に特有だが比較的出土例の少ない砂岩製の台石や、玉髓・黒曜石・ガラス質黒色安山岩製の台形様石器など、多様な石材で作られた形に富む石器が出土した。

なお、大塚台遺跡の黒曜石には栃木県の高原山甘湯沢産と、さらに北方の宮城県の仙台秋保産が含まれていることが理化学的な分析によって推定された。当時の人々の活動領域を考えるうえで、新しい知見が加えられたことを報告する。

2 報告の体裁

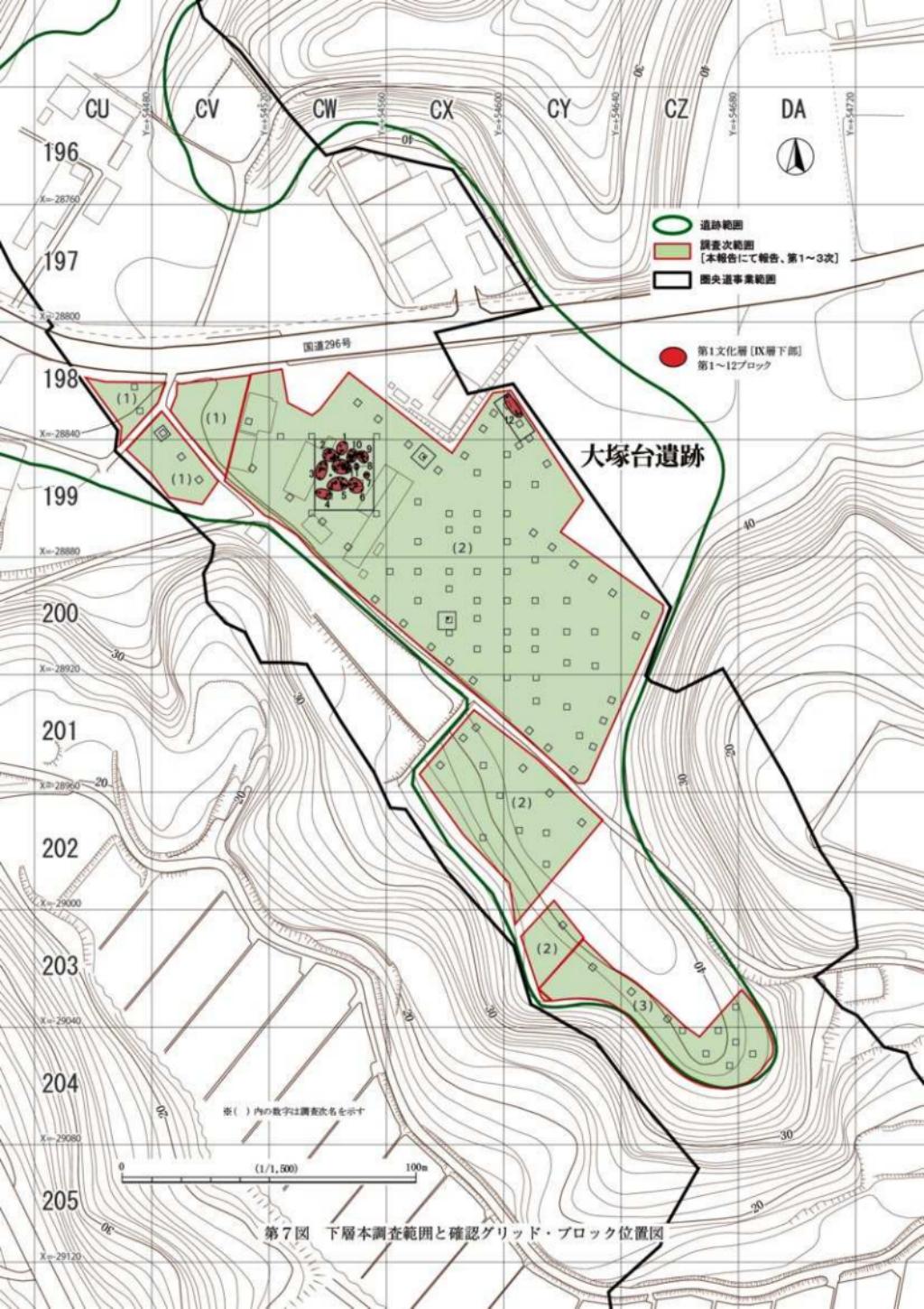
第1ブロックから第12ブロックでは全体の石器分布状況を器種別、石材別のドットで示し、器種ごとの実測図を提示した。また、母岩の消費状況を重視した石材分布も併せて図示した。特徴的な器種や石材に関しては本文中に説明の項を設け、さらにまとめの第4章に記載した。

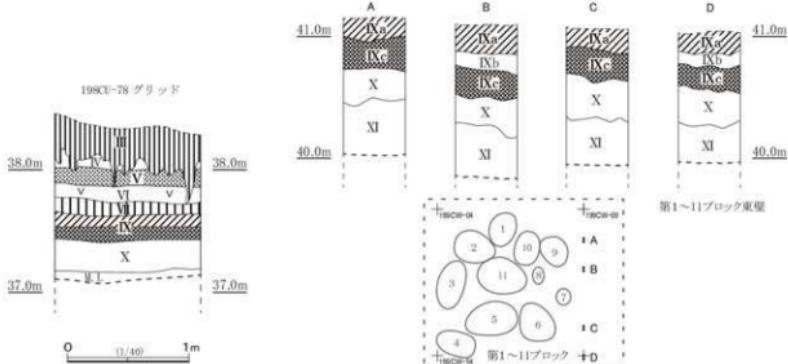
石器実測図：縮尺2/3を基本とする。大型石器については任意とし、該当する石器にスケールを明示した。主要な器種の次に接合資料を掲載し、挿図番号は第1～11ブロックまでの環状ブロック群、第12ブロックの順にそれぞれ1から付した。石器実測図の注記は上から挿図番号、遺物番号、器種名、母岩名+母岩番号、重量、ブロック番号である。実測図と図版の挿図番号は統一した。

出土状況図：個々のブロック図は縮尺1/80を基本とし、器種別と母岩別の2種を作成した。器種のマークは統一されているが、母岩のマークは図によって異なるため、挿図ごとに凡例を示した。当遺跡の環状ブロック群は起伏のない平坦面に立地するため、東側に南北を縦断する土層断面を設定した（第3図参照）。

組成表：全石器の器種・石材一覧表と、ブロックごとの器種・母岩の組成表を作成した。

母岩観察表：第1文化層で出土した石器を母岩別に分け、自然面・節理面・剥離面・ガジリなどの色情報を土色帖をもとに記号と色名で記載した。特徴的な資料については備考欄、石器事実記載の項でも触れた。





第8図 基本層序

3 基本層序（第8図、図版2・3）

大塚台遺跡の基本層序は第8図のとおりである。旧石器時代の遺物が出土した一帯は、表土以下Ⅲ層上部が既に削平されており、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層を細分できない地点も多くみられた。特に第1～11ブロック（環状ブロック群）が立地する地点では、IX層にまで搅乱が及んでいた。なお、土層の特徴は調査時の所見によるもので、以下のとおりである。記載にあたっては研究連絡誌第35号の標準土層^[1]を参照した。

Ⅲ層 明黄褐色ローム土。立川ローム最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。下部に向かってソフト化が進行している。赤色スコリアを少量含む。

IV層 明褐色ローム土。硬質のローム層でいわゆる「ハードローム層」である。2mm～3mm大の赤色スコリアを多く含み、全体に赤みを帯びて明色である。

V層 黄褐色ローム土。第1黒色帯に相当する。IV層に比べて赤色スコリアの量が少なく、全体に黒ずんでいる。IV層とV層とを明確に区分できる地点は少なかった。

VI層 明黄褐色ローム土。AT（始良丹沢火山灰）がブロック状に含まれる。

VII層 褐色ローム土。第2黒色帯上部に相当する。全体に黒ずんでいる。1mm～2mm大の黄色スコリアと1mm大の赤色スコリアが少量含まれる。

IXa層 暗褐色ローム土。第2黒色帯下部の上半である。地点によりIX層の細分が可能である。V層よりも黒ずんでいる。2mm～3mm大の赤色スコリアが多く含まれる。

IXb層 暗褐色ローム土。第2黒色帯下部の間層である。B、D地点で確認できた。

IXc層 暗褐色ローム土。第2黒色帯下部の下半である。2mm大の赤色スコリアが微量含まれる。

X層 暗黄褐色～黄褐色ローム土。スコリア粒がほとんど含まれない。粘性がある。立川ローム最下層。

XI層 灰褐色ローム土。武藏野ローム最上層である。粘性を帯びている。

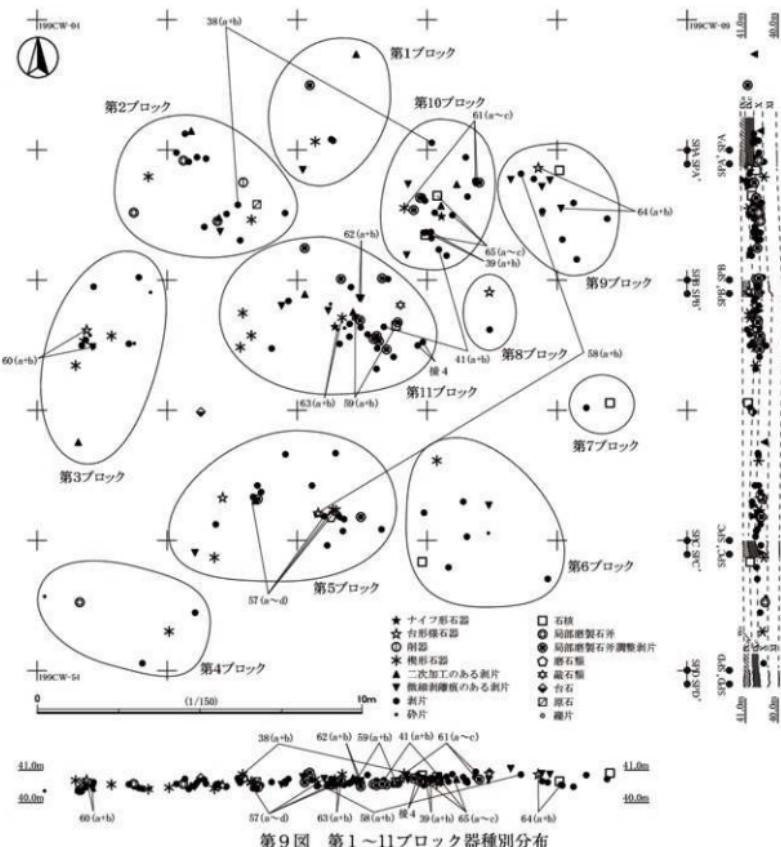
注 烏立 桂・新田浩三・渡辺修一 1992「下総台地における立川ローム層の層序区分－平成2・3年度職員研修会から－」『研究連絡誌』第35号（財）千葉県文化財センター

第2節 石器ブロックと遺物

1 第1文化層（第7・9・10図、第3表、図版3）

第1文化層では11か所のブロックが円環部と環央部を形作るブロック群と、約60m東に小規模のブロック1か所が検出された。第1～11ブロックは共通の母岩を有し接合関係が認められるが、第12ブロックには共通母岩はなく、個々の石器は単体で搬入されている。第1ブロックからそれぞれ分布の状況を分布図と組成表を用いて順に述べ、のちに石器の説明を器種別に加える。なお、石器図には挿図番号・遺物番号・母岩番号・重量・出土したブロックを記載し、接合資料には接合番号を加えた。

第1～11ブロックで構成されるブロック群の規模は南北190m、東西175mを測り、石器169点は直径21mの円内に分布する。11か所のブロックのうち10か所が環状に廻り、1か所は中央部北側で環央部を形成す

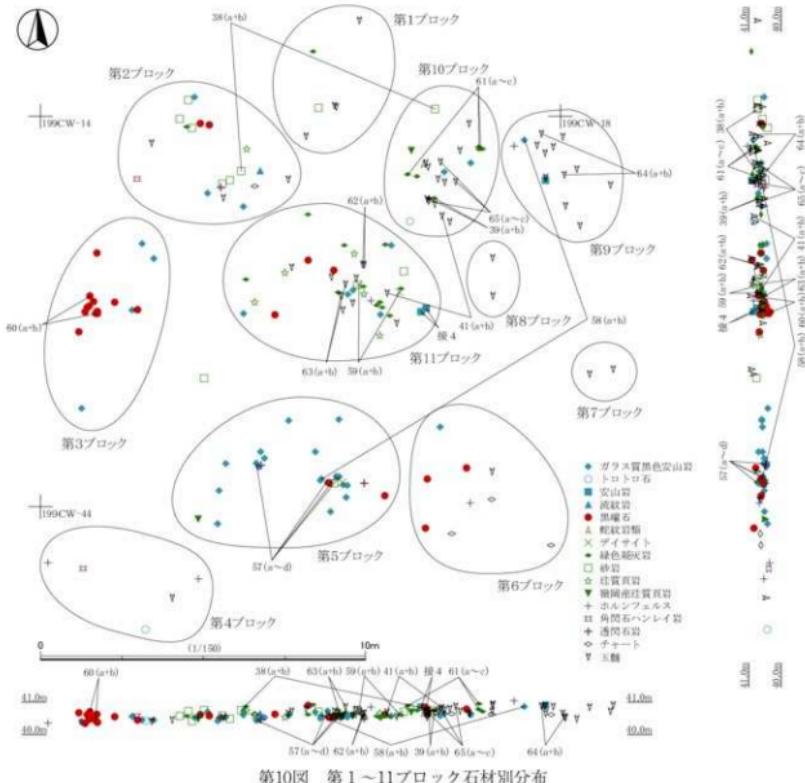


第9図 第1～11ブロック器種別分布

る。ブロックの規模は最小で直径1m、最大で6mであり、石器数量は2点から42点と各ブロックで粗密がある。台形様石器や楔形石器、局部磨製石斧といった器種や接合資料などが示す同時性、円形に配置されたブロック群の形状から、いわゆる「環状ブロック群」に相当すると考えられる。

このブロック群の立地だが、南西側に向かって緩やかに傾斜しており、18mで70cmほど下降する。石器が出土した標高の平均値は40.639mである。最も上部から出土したのは北東に位置するホルンフェルス1の微細剥離痕のある剥片で41.037m、南西端に位置するホルンフェルス2の碎片は40.358mであり、この差は前述のとおり0.697mで70cmに満たない。勾配はごく緩やかで、安定した平坦地に當まれたブロック群といえる。

また、このブロック群の中心にある第11ブロックから東に約60m離れた第12ブロックでは、石器が出土した標高の平均は40.126mであり、東へ向かってもごく緩やかに下降する地形が捉えられよう。



第10図 第1～11ブロック石材別分布

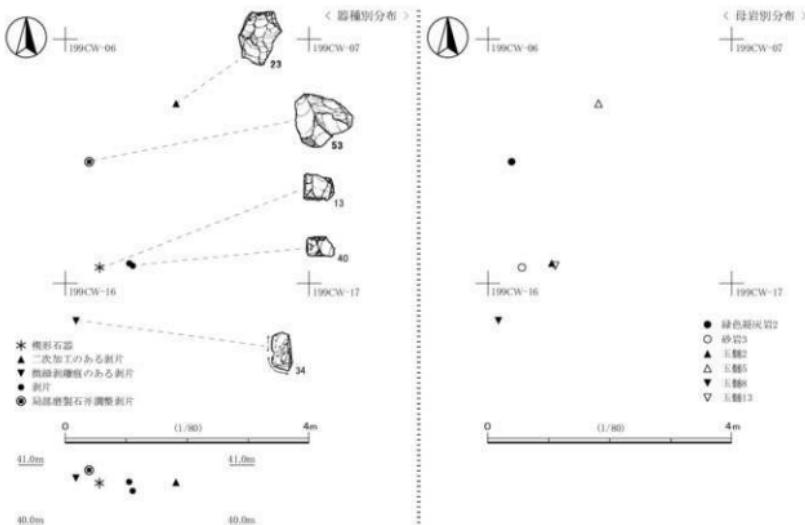
12か所のブロックと単独出土を合わせた石器数は遺跡全体で176点、石材は18種類である。最も出土点数が多い石材は玉髓の49点で、ガラス質黒色安山岩36点がこれに続く。以下、黒曜石22点、緑色凝灰岩21点、砂岩12点、珪質頁岩・チャート各6点、ホルンフェルス5点、デイサイト・安山岩・透閃石岩各3点、トロトロ石・嶺岡産珪質頁岩・角閃石ハントレイ岩各2点、ドレライト・流紋岩・蛇紋岩類・頁岩各1点である。数量・面積ともに規模の小さなブロック群にも関わらず、石斧とその調整剥片、楔形石器や台形様石器を数多く保有する。各ブロックの立地、検出状況は第7図、石器分布状況は器種別・母岩別に組成表を加えて第9・10図、第3表で示した。

2 第1~11ブロック

(1) ブロック別石器分布状況(第9~21図、第3~14表、図版3・4)

第1ブロック(第11図、第4表、図版3)

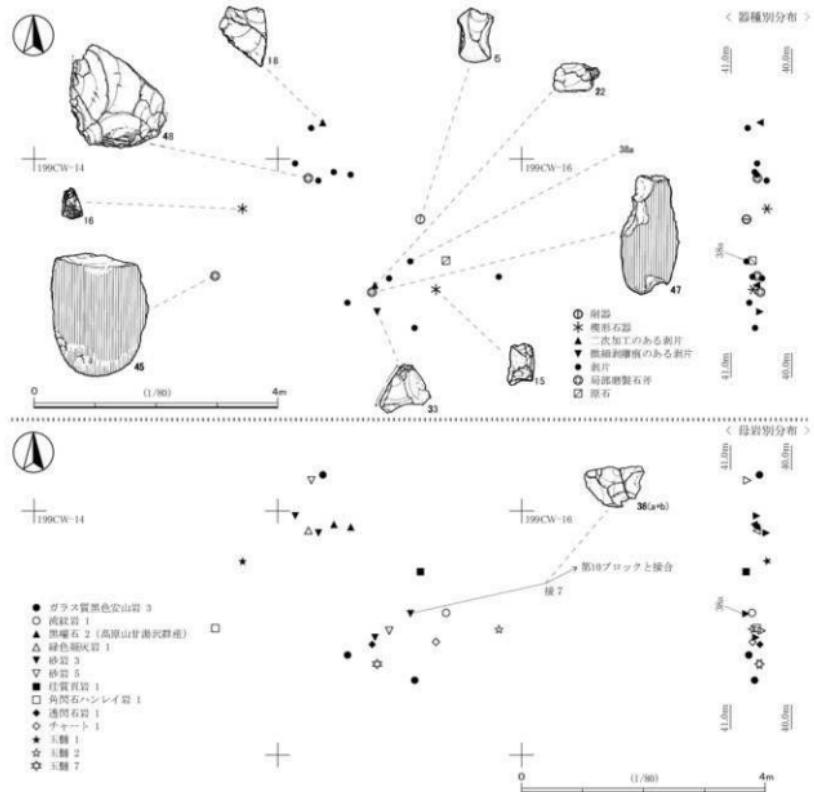
第1ブロックは北部中央に位置する。南北3.6m、東西1.0mの範囲に北から順に二次加工のある剥片、



第11図 第1ブロック遺物分布

第4表 第1ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剥離痕のある剥片	剥片	局部磨製石斧調整剥片	点数合計	点数比(%)	重量合計(g)	重量比(%)	
緑色凝灰岩	2							1	16.67	9.83	51.86	
玉髓	3		1					1	16.67	1.52	7.90	
玉髓	2					1		1	16.67	0.64	3.32	
	5				1			1	16.67	4.79	24.88	
	8					1		1	16.67	1.68	8.73	
	13						1	1	16.67	0.79	4.10	
玉髓	小計			1	1	2		4	66.67	7.90	41.04	
合計	計			1	1	1	2	1	6	100.00	19.25	100.00



第12図 第2ブロック遺物分布

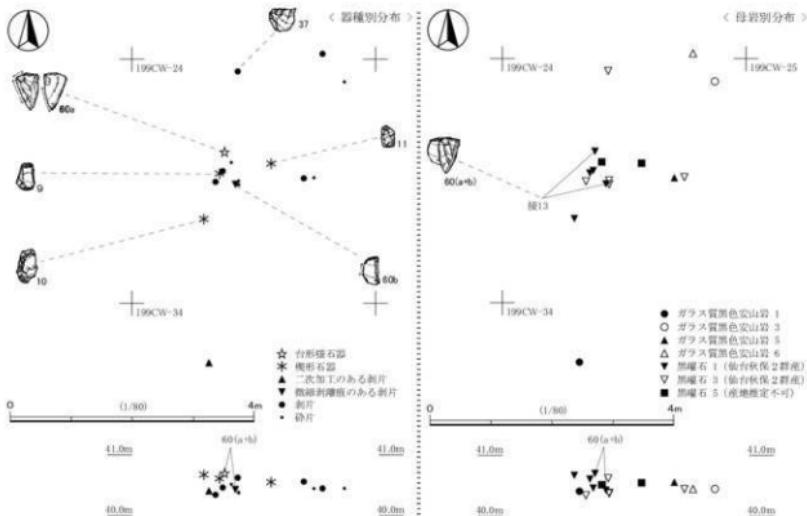
第5表 第2ブロック組成表

母岩	器種	母岩 番号	黒曜石 検定場所	削器	複形石器	二次加工 のある片	精細削離痕 のある片	剥片	局部磨製石片	原石	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)	
ガラス質黒色安山岩	3					1		2			3	15.00	8.52	3.24	
流紋岩	岩 1									1	1	5.00	5.57	2.12	
黒	曜	石 2	高原山甘瀬沢群					2			2	10.00	0.68	0.26	
緑色凝灰岩	1									1	1	5.00	69.31	26.32	
砂	質	岩 3				1		3			4	20.00	11.02	4.19	
		5						2			2	10.00	3.34	1.27	
砂	岩	小計				1		5			6	30.00	14.36	5.45	
珪質質	岩 1										1	5.00	6.68	2.54	
角閃石ハニレイ岩	1									1	1	5.00	117.44	44.60	
透閃石	岩 1									1	1	5.00	28.38	10.78	
チート	1					1					1	5.00	2.48	0.94	
玉	髓 1										1	5.00	2.35	0.89	
		2									1	5.00	4.14	1.57	
玉	髓 7							1			1	5.00	3.41	1.30	
玉	髓 小計					1		1			3	15.00	9.90	3.76	
合	計					1	2	2	1	10	3	20	100.00	263.32	100.00

局部磨製石斧調整剥片、楔形石器と剥片、微細剝離痕のある剥片が出土した。剥片が2点出土したほかは各1点ずつ、計6点の出土である。石材は3種類だが母岩はすべて異なり、緑色凝灰岩2、砂岩3、玉髓2・5・8・13である。接合関係はみられない。

第2ブロック（第12図、第5表、図版3・4）

第2ブロックは北西に位置し、南北3.4m、東西4.7mの範囲に20点が分布する。石器のまとめりは空白帯を挟んで北西部と南東部に分かれれる。器種点数は削器1点、楔形石器2点、二次加工のある剥片2点、微細剝離痕のある剥片1点、剥片10点、局部磨製石斧3点に原石1点が加わる。半数が剥片だが、この剥片のなかに石斧と同一母岩の局部磨製石斧調整剥片は含まれない。石材は10種類、母岩は13あり、砂岩3が4点、ガラス質黒色安山岩3が3点、黒曜石2と砂岩5が2点出土したほかは第6表のとおり、各1点ずつ出土した。砂岩3の剥片が第10ブロックの剥片と折面で接合する。



第13図 第3ブロック遺物分布

第6表 第3ブロック組成表

母岩	器種	母岩 基盤岩質判定地	台形様石器	楔形石器	二次加工のある剥片	微細剝離痕のある剥片	剥片	碎片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)	
ガラス質黒色安山岩									1	6.25	6.61	35.46	
	1								1	6.25	0.07	0.38	
	3								1	6.25	3.74	20.06	
	5								1	6.25	0.18	0.97	
	6								1	6.25	0.00	0.00	
	小計				1		2	1	4	25.00	10.60	56.87	
黒曜石	1	仙台秋保2群				1	1		5	31.25	6.00	32.51	
	3	仙台秋保2群					2	3	5	31.25	1.45	7.78	
	5	鹿地原定不可				1		1	2	12.50	0.53	2.84	
	小計				1	3	1	3	4	75.00	8.04	43.13	
合	計				1	3	1	1	5	16	100.00	18.64	100.00

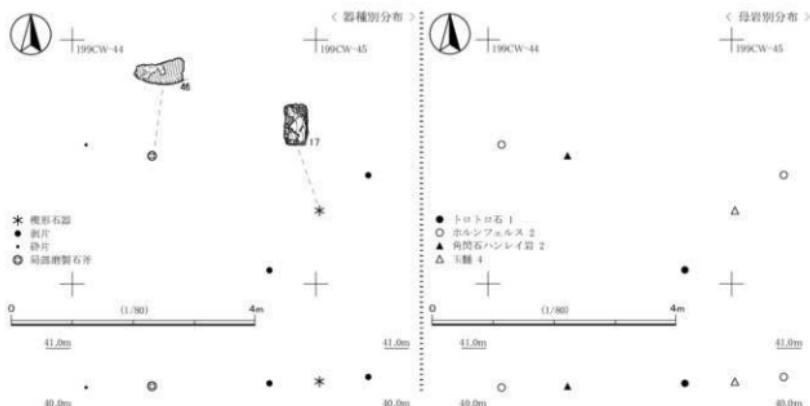
第3ブロック（第13図、第6表、図版3）

第3ブロックは西側中央に位置し、南北5.0m、東西2.2mの範囲に16点が分布する。分布の中心に12点がまとまり、北に3点、南に1点が散在する。中心部を構成するのは3点の楔形石器と1点の台形様石器、微細剥離痕のある調片、剥片・碎片で、ブロック群全体から出土した碎片12点のうち、5点が第3ブロックに分布する。楔形石器と複数の碎片の出土はブロック内で両極剥離が行われたことを示唆する。

石材はガラス質黒色安山岩と黒曜石の2種類のみで、それぞれ4母岩、3母岩に分けられる。特に注目されるのは黒曜石で、成分分析の結果、黒曜石1と3が仙台秋保2群産と同定された。この黒曜石1には台形様石器と剥片の接合資料が含まれる。仙台秋保産と同定された資料を含む黒曜石1・3、推定産地不明の黒曜石5は第3ブロックにのみ分布し、高原山産とは共伴しない。

第4ブロック（第14図、第7表、図版3）

第4ブロックはブロック群の円環に付帯するように南西端に位置し、南北2.2m、東西4.8mの範囲に5点がまばらに分布する。器種は楔形石器、剥片、碎片、局部磨製石斧であり、剥片2点のほかは1点ずつの出土である。母岩はトロトロ石1、ホルンフェルス2、角閃石ハンレイ岩2、玉髓4であり、すべてこのブロックのみに帰属し、他ブロックには分布しない。角閃石ハンレイ岩の石斧は第4ブロックの西端に分布しており、ブロック群全体の中でも南西の端に位置する。



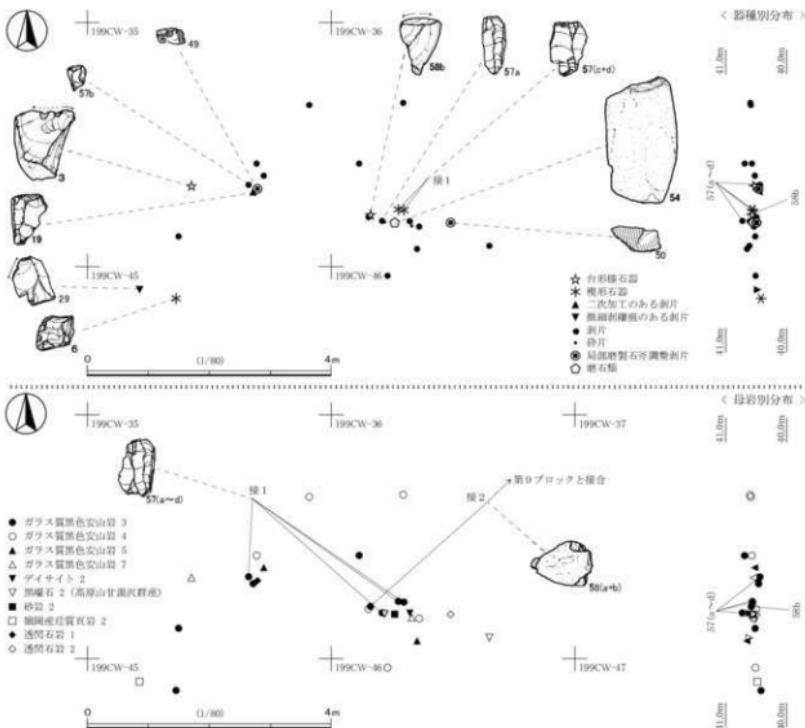
第14図 第4ブロック遺物分布

第7表 第4ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号					点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)	
			楔形石器	剥片	碎片	局部磨製石斧					
トロトロ石	1			1			1	20.00	1.31	17.37	
ホルンフェルス	2			1	1		2	40.00	1.02	13.53	
角閃石ハンレイ岩	2					1	1	20.00	2.76	36.60	
玉髓	4		1				1	20.00	2.45	32.49	
合	計			1	2	1	1	5	100.00	7.54	100.00

第5ブロック（第15図、第8表、図版3・4）

第5ブロックは南側中央部に位置する。26点が逆U字状に並ぶが、磨石類を中心に東側にまとまる傾向がある。8器種、6石材10母岩を組成し、接合資料2個体を確認した。ガラス質黒色安山岩4点はプロック内で接合し、1個体は12m離れた第9ブロックと接合した。特徴的な器種としては台形様石器、楔形石器、局部磨製石斧調整剥片が各2点と砂岩の磨石類1点が挙げられる。



第15図 第5ブロック遺物分布

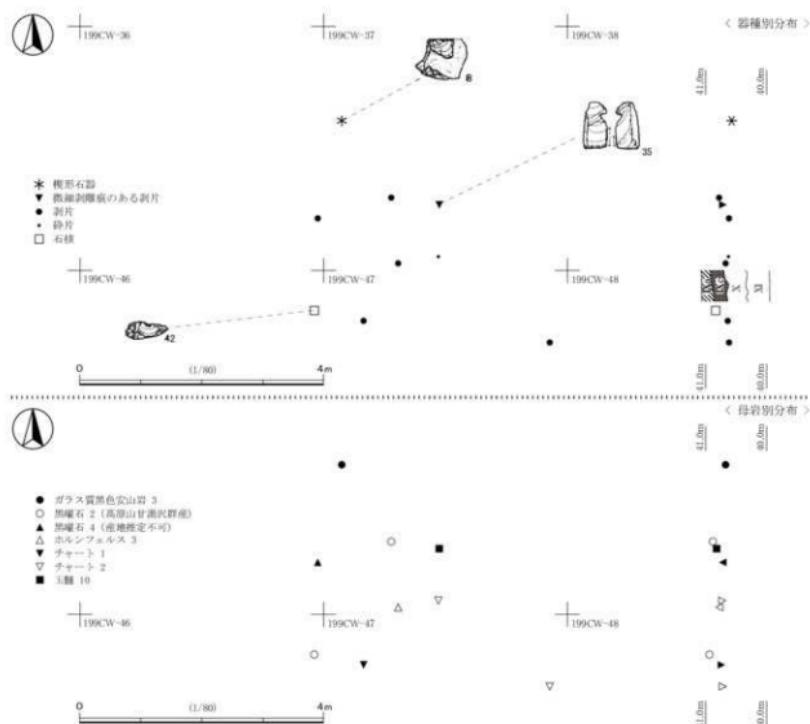
第8表 第5ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	黒曜石推定产地	台形様石器	楔形石器	二次加工のある剝片 もしくは研磨板のある剝片	剥片	砂片	局部磨製石斧調整剥片	磨石類	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)	
ガラス質黒色安山岩	3			1	2(3)	1	4			8(9)	34.62	23.01	6.61		
	4						6			6	23.08	5.03	1.44		
	5						2			2	7.69	2.37	0.68		
	7			1			1			2	7.69	26.19	7.52		
ガラス質黒色安山岩 小計		2	2(3)	1		12	1			18(19)	73.08	56.60	16.25		
ディイサイ上	2						1			1	3.85	1.10	0.32		
黒曜石	2	高原山サ通穴群				1	1			2	7.69	1.35	0.39		
砂岩	2								1	1	3.85	281.71	80.76		
緑田産珪質頁岩	2					3				1	3.85	5.94	1.71		
透閃石岩	1								1	1	3.85	0.43	0.12		
	2								1	1	3.85	1.58	0.45		
透閃石岩 小計								2	2	7.69	2.01	0.58			
合計				2	2(3)	1	1	14	2	2	1	25(26)	100.00	348.21	100.00

* () は出土点数

第6ブロック（第16図、第9表、図版3）

第6ブロックは南東端に位置し、4m四方に9点が散在する。器種分布としては北に楔形石器、南に石核、東側中央に微細剥離痕のある剥片が、剥片・碎片を囲むように分布する。母岩はガラス質黒色安山岩3、黒曜石2（高原山甘湯沢産）・4、ホルンフェルス3、チャート1・2、玉髓10の7種を確認した。チャートはブロック群内で4点出土した中の3点が第6ブロックに分布する。



第16図 第6ブロック遺物分布

第9表 第6ブロック組成表

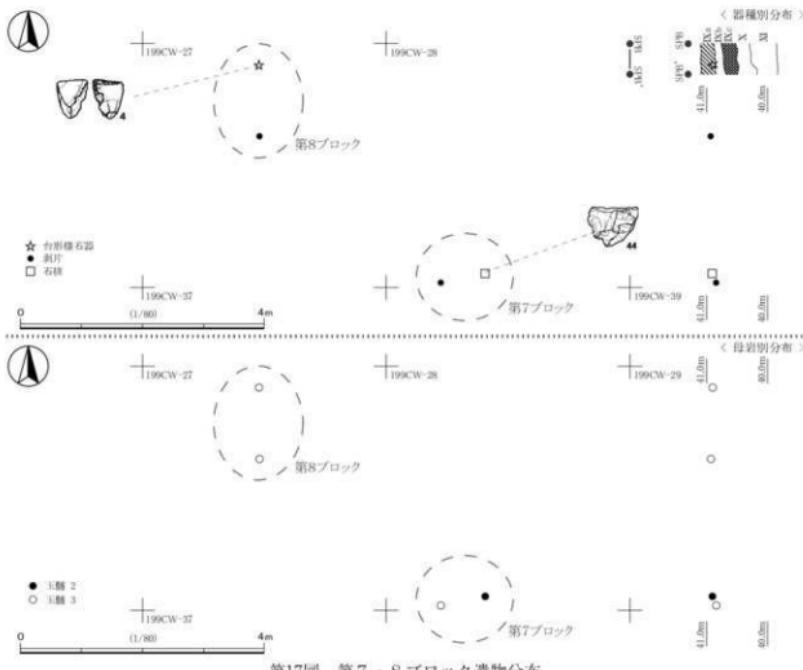
母岩	器種	母岩番号	基底石推定地	楔形石器	微細剥離痕のある剥片	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	3			1					1	11.11	11.20	59.80
黒曜石	2	高原山甘湯沢産			1			1	2	22.22	2.70	13.99
	4	產地推定不可			1			1	11.11	0.22	1.17	
黒曜石 小計					2			1	3	33.33	2.92	15.59
ホルンフェルス	3					1			1	11.11	1.38	7.37
チャート	1					1			1	11.11	0.49	2.62
	2					1	1		2	22.22	0.68	3.63
チャート 小計						2	1		3	33.33	1.17	6.25
玉髓	10				1				1	11.11	2.06	11.00
合計					1	1	5	1	9	100.00	18.73	100.00

第7ブロック・第8ブロック (第17図、第10・11表、図版3)

第7、第8ブロックは東側中央部に位置し、約4m離れてそれぞれに玉髓2点が分布する。両ブロックの石材は玉髓のみで、3点が玉髓3、1点は玉髓2を母岩とする。ブロック群最東端から玉髓2の石核、北側では玉髓3の台形様石器が分布する。接合資料はない。

第9ブロック (第18図、第12表、図版3)

第9ブロックはブロック群北東の南北3.0m、東西3.2mの範囲に14点が分布する。台形様石器、微細剥離痕のある剥片、石核は第9ブロックの北側に集中し、剥片、礫片は南側に散在する傾向がみられる。石材はガラス質黒色安山岩・安山岩・ホルンフェルス・玉髓の4種だが、玉髓はさらに4母岩に分けられ、このうちの玉髓1は石核1点と剥片4点が分布する。玉髓9は台形様石器と剥片の接合資料であり、ガラス質黒色安山岩3の剥片は第5ブロックの剥片と折面で接合する。



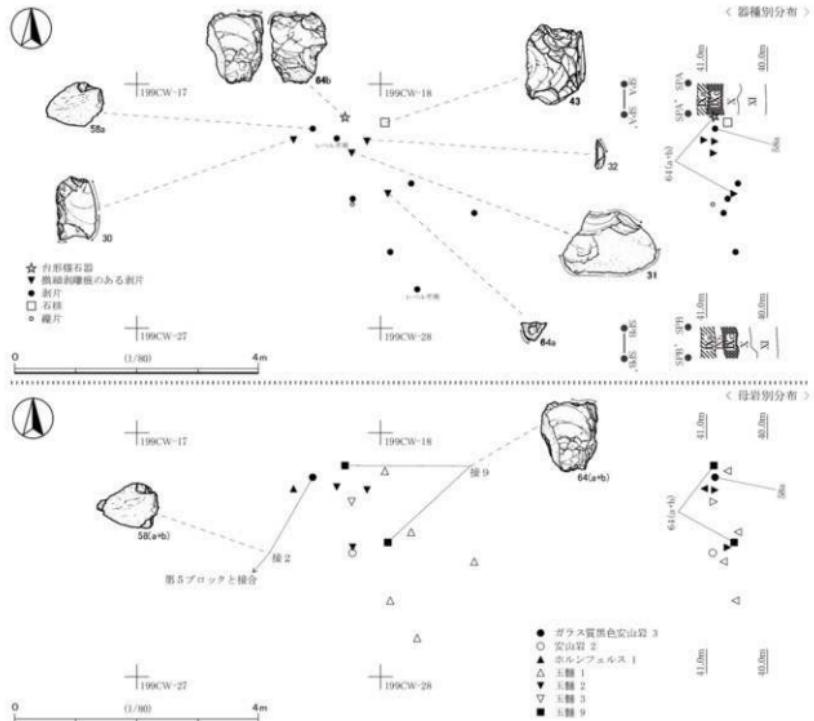
第17図 第7・8ブロック遺物分布

第10表 第7ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	剥片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
玉 髓	玉 髓	2		1	1	50.00	22.85	96.13
	玉 髓	3		1	1	50.00	0.92	3.87
合	計				2	100.00	23.77	100.00

第11表 第8ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	石核	剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
玉 髓	玉 髓	2		1	1	100.00	8.09	100.00
	玉 髓	3		1	2	100.00	8.09	100.00
合	計				1	100.00	8.09	100.00



第18図 第9ブロック遺物分布

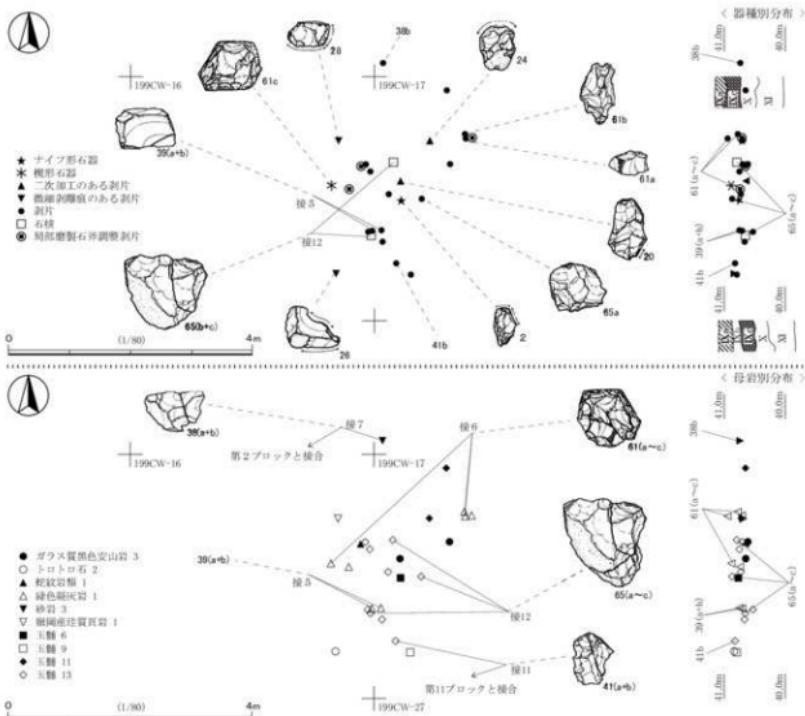
第12表 第9ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	台形様石器	微細剥離痕のある剥片	剥片	石核	破片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	3				1			1	7.14	4.25	3.67
安山岩	2							1	7.14	2.41	2.08
ホルンフェルス	1							1	7.14	10.44	9.01
玉	1							5	35.71	41.89	36.17
	2				4	2		3	21.43	7.14	6.16
	3				1			1	7.14	25.47	21.99
	9			1	1			2	14.29	24.23	20.92
玉	小計			1	3	6	1	11	78.57	98.73	85.24
合	計			1	4	7	1	14	100.00	115.83	100.00

第10ブロック（第19図、第13表、図版3）

第10ブロックは環央部の第11ブロックと北東端部の第9ブロックの間にあり、南北3.5m、東西2.5mの範囲に26点がまとめて分布する。主要な器種はナイフ形石器と楔形石器各1点、二次加工のある剥片2点であり、微細剥離痕のある剥片2点、2片で1点の石核、局部磨製石斧調整剥片が3点、剥片は15点である。石材はガラス質黒色安山岩・トロトロ石・蛇紋岩類・緑色凝灰岩・砂岩・嶺岡産珪質頁岩・玉髓の

7種であり、第9ブロックと同様、玉髓が複数の母岩をもつ。特に玉髓13は9点と数が多く、ブロック内外に接合資料がみられる。なお、接合した5資料のうち2資料はブロック間接合であり、第2ブロック、第11ブロックと接合関係がみられる。



第19図 第10ブロック遺物分布

第13表 第10ブロック組成表

母岩	器種	母岩 番号	ナイフ形 石器	楔形石器	二次加工の ある剥片	微細剥離痕 のある剥片	剥片	石核	局部磨製石斧 調整剥片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質 黒色 安山岩	3				1		1			2	7.69	6.93	6.23
トロトロ石	2					1				1	3.85	4.12	3.71
蛇紋岩類	1								1	1	3.85	0.46	0.41
緑色凝灰岩	1			1					2	6(7)	26.92	23.19	20.86
砂岩	3					3(4)				☆ 0(1)			
雅岡産 貨質頁岩	1						1			1	3.85	0.85	0.76
玉 髓	6	1								1	3.85	1.94	1.74
	9									1	3.85	1.42	1.28
	11						1			1	3.85	0.48	0.43
	13						1			2	7.69	4.23	3.80
玉 髓	小 計		1	1	1		9	1(2)		8(9)	34.62	67.56	60.77
合	計		1	1	2	2	13(15)	1(2)	3	23(26)	100.00	111.18	100.00

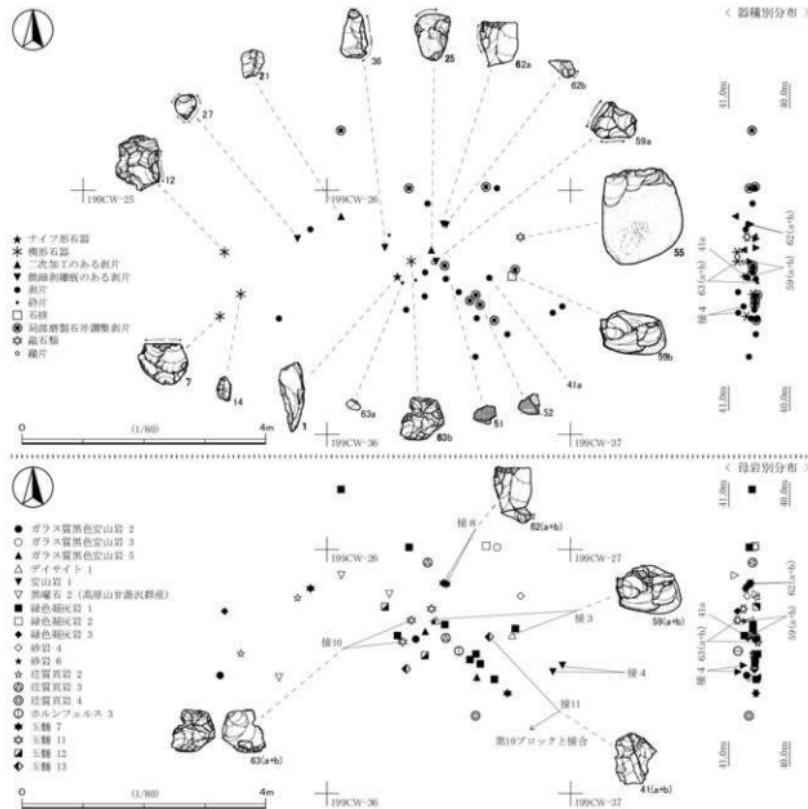
※ ()は出土点数

☆ ブロック間で接合(第2ブロック+第10ブロック)した2片で1点の剥片を含む

第11ブロック（第20図、第14表、図版3・4）

環央部の南北3.8m、東西5.8mの範囲に42点が分布する。西側に比べ、敲石類が出土した東側に集中する傾向がある。10器種、9石材で母岩は19種あり、器種、母岩の種類はブロック群最多である。楔形石器4点はガラス質黒色安山岩2、緑色凝灰岩3、珪質頁岩2、玉髓11とすべて別母岩が用いられ、分布密度が比較的まばらな西側に3点、中央に1点分布する。砂岩4の敲石類とデイサイト1の石核は東側で近接し、北部中央から南東側は緑色凝灰岩1のナイフ形石器・局部磨製石斧調整剥片9点が集中域を形成する。第11ブロックの接合資料は5個体9点で、1個体は第10ブロックの剥片とブロック間で接合する。

西側に製品類、東側に敲石類や局部磨製石斧調整剥片などの剥片類が分布する。第11ブロックで剥離作業が行われた可能性もあるが、緑色凝灰岩1を除く18母岩は4点以下で構成されることから、周縁部で剥離された様々な石材からなる製品や剥片類が持ち寄られたものとみられ、多様な器種・石材が集積している。



第20図 第11ブロック遺物分布

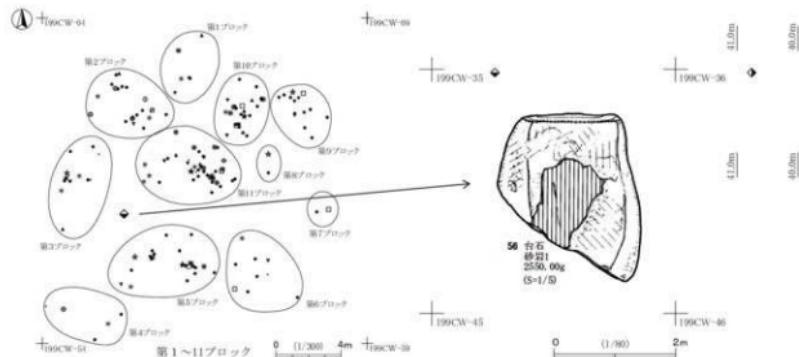
第14表 第11ブロック組成表

母岩	器種	母岩 番号	黒曜石 推定産地	ナイフ 形石器	規形 石器	二次加工の ある剥片	微細剥離面 のある剥片	剥片	碎片	石核	奥那摩製石斧 調整剥片	磨石類	標片	点数合計 (%)	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)	
ガラス質黒色安山岩		2			1				1						2	4.76	10.72	2.98
		3						1							1	2.38	0.12	0.03
		5						2							2	4.76	0.83	0.23
ガラス質黒色安山岩	小計			1				3	1					5	11.90	11.67	3.24	
デイサイト		1					1		1					2	4.76	37.93	10.54	
安山岩		1						2						2	4.76	1.97	0.55	
黒曜石	2 遠原山古墳群				1		1	1						3	7.14	1.93	0.54	
緑色凝灰岩		1		1							8			9	21.43	15.10	4.20	
	2										1			1	2.38	0.09	0.03	
	3			1							1			1	2.38	6.49	1.80	
緑色凝灰岩	小計			1	1						9			11	26.19	21.68	6.03	
砂岩		4									1			1	2.38	243.12	67.57	
	6													1	2.38	6.60	1.83	
砂岩	小計													1	2.38	249.72	69.40	
珪質頁岩		2		1		1								2	4.76	1.49	0.41	
	3						2							2	4.76	0.53	0.15	
	4						1							1	2.38	0.51	0.14	
珪質頁岩	小計			1		1	3							5	11.90	2.53	0.70	
ホルンフェルス		3						1						1	2.38	1.27	0.35	
玉髓		7						2	2					4	9.52	7.55	2.10	
	11			1	1				1					3	7.14	7.94	2.21	
	12							1	1					2	4.76	2.89	0.80	
	13								1(2)					1(2)	4.76	12.74	3.54	
玉髓	小計			1			3	4(5)	1					10(11)	26.19	31.12	8.65	
合	計		1	4	2	5	14(15)	3	1	9	1	1	1	41(42)	100.00	359.82	100.00	

※()は出土点数

ブロック群中の単独分布（第21図、図版3・4）

第1～11ブロックをひとまとまりとするブロック群内で出土したが、それぞれのブロックに含まれない石器は砂岩製の台石1点であり、この台石を中心とした半径24mの範囲は石器の空白域である。空白域の外側では、台石から北に6.7m離れた第2ブロックに3点、南に約7mの第4ブロックには1点の局部磨製石斧が分布しており、これらから剥離されたと推定される局部磨製石斧調整剥片は環央の第11ブロックに集中する。また、両極打撃による楔形石器はこの台石の周囲、半径4.4m～9.0mの範囲に分布するが、13m離れた北東端の第9ブロックには皆無である。台石の特徴については器種分布の項で記載した。



第21図 第1～11ブロック単独出土石器分布

(2) 器種分布 (第22・23図、第3表)

第1～11ブロックで出土した器種は16種類であり、内訳は第3表のとおりである。点数の順に羅列する
と剥片74(77)点、微細剥離痕のある剥片16点、楔形石器15(16)点、局部磨製石斧調整剥片15点、碎片12点、
二次加工のある剥片9点、石核5(6)点、台形様石器5点、局部磨製石斧4点、ナイフ形石器2点、礫片
2点、削器・磨石類・敲石類・原石・台石各1点である。

特徴的な分布を示す器種について述べる。台形様石器は西から北東へ「し」の字状に分布するが環央部
には分布しない。楔形石器は東側の第7～9ブロックを除いた8か所のブロックに1～4点が分布する。
剥片はすべてのブロックに分布し、碎片が3点以上出土する第3ブロック、第11ブロックには楔形石器が
複数出土する。石核は東、敲石類は環央、磨石類は南で出土し、それらの周辺には剥片が多く分布する。
台石は環状ブロック群の内側に1点分布するが、その周囲半径2.4m内に石器は分布しない。

第23図で示したとおり、局部磨製石斧が分布する第2・4ブロックには局部磨製石斧調整剥片の出土は
なく、局部磨製石斧とその調整剥片は接合しない。また、剥離面から想定される大きさの剥片が出土して
いないことから、製作された剥片は遺跡の外へ持ち出された可能性が高い。刃部のみ遺存する局部磨製石
斧本体の修復や再生が行われたのではなく、本来の役目を終えた局部磨製石斧が剥片作出のための石核と
して活用されたと考えられる。

(3) 第1～11ブロック出土石器 (第24～32図、図版14～16)

ナイフ形石器 (1・2)

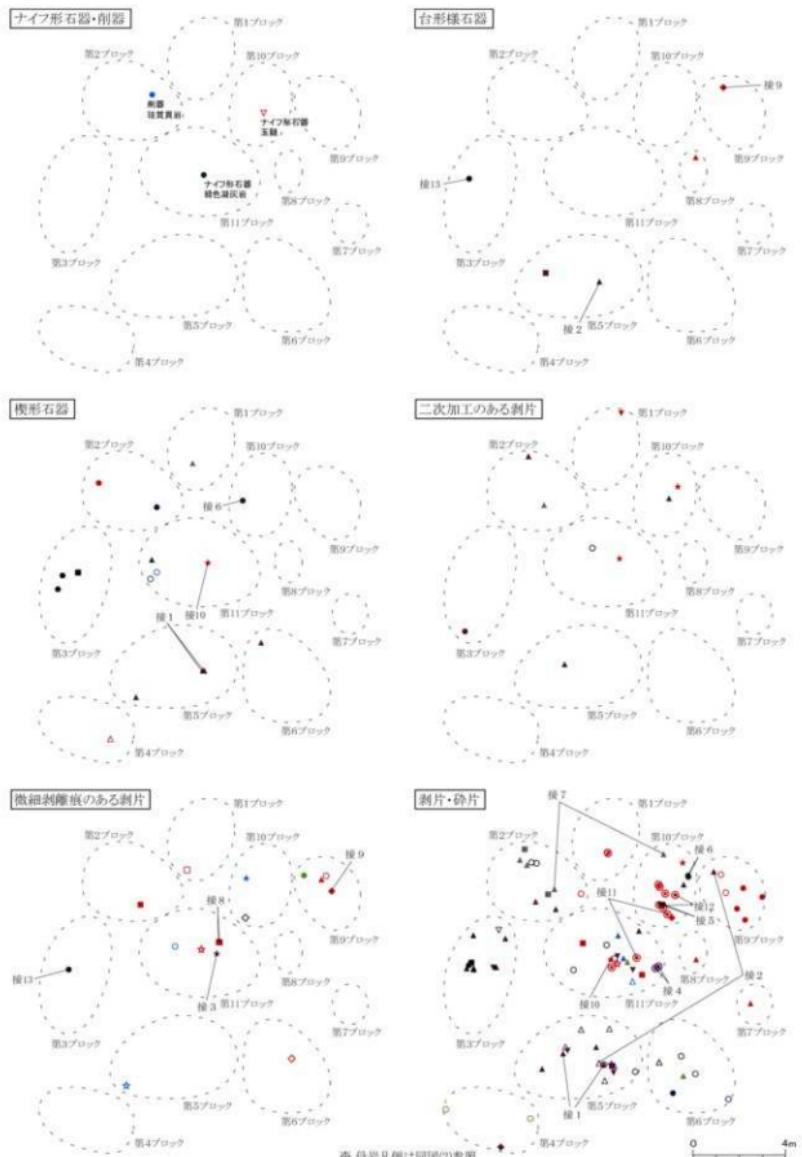
ナイフ形石器は剥片の鋭利な縁辺を刃部とし、他の部位に腹面側から急角度の整形剥離を施し、一端を
尖らせた剥片石器である（ナイフ形石器・台形様石器の定義は旧石器考古学辞典三訂版を参照した）。

1(第11ブロック 緑色凝灰岩1)は、石斧の基部から作出された横長剥片の末端部分が素材であり、28°
の鋭い縁辺を刃部とする。右側縁は階段状に収束した末端縁辺のバリ（はみ出し）を除去するような加工が
施され、左側縁は裏面からの簡単な加工で基部が作出される。2(第10ブロック 玉髓6)は両極剥離によ
り作出された剥片を素材とする。左面は下方から器体を縱に切断するように加撃され、両平坦面とはほぼ
直角をなす。この切断面をナイフ形石器としての基部とみなした。連続する小剥離痕により本来の先端が
失われ、刃部の一部は直線状となっている。

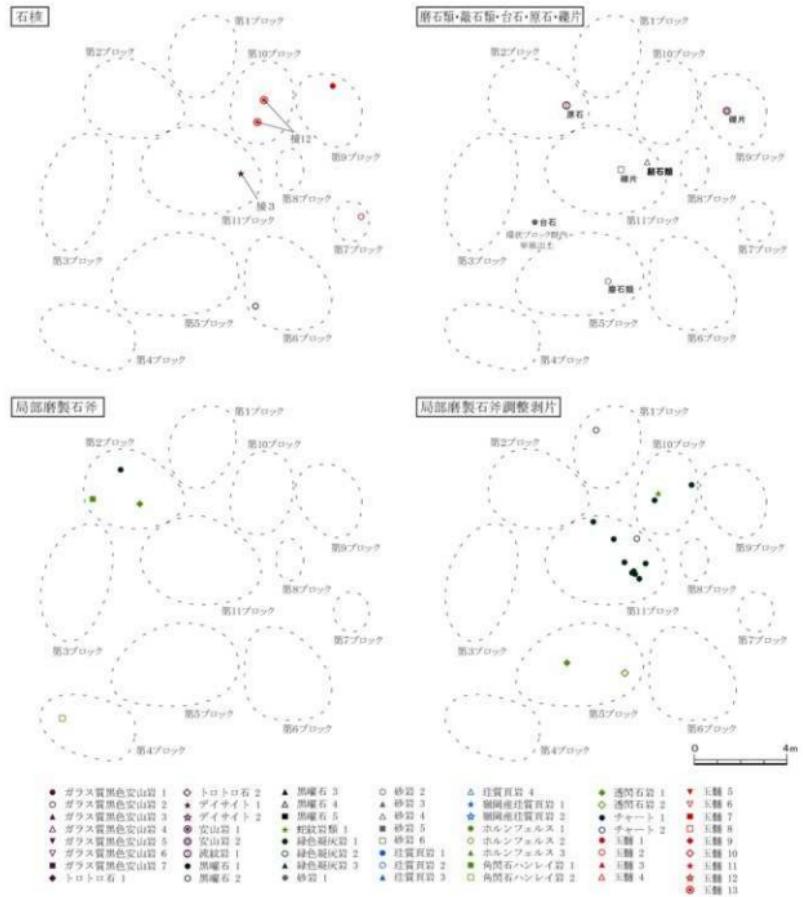
台形様石器 (3・4・58b・60a・64b ※57以降の番号は接合資料に含まれる。以下、同様)

台形様石器は平面形が逆台形や逆三角形を呈し、刃部は第一次剥離によって得られた素材剥片の鋭い縁
辺があてられる。求心状剥離や打面を頻繁に転移して得られた寸詰まりの剥片が用いられることが多く、
二次加工は折断や折断面からの平坦剥離が施される。

3(第5ブロック ガラス質黒色安山岩7)は、自然面打面から剥離された、厚みのある剥片上部を素材
とする台形様石器である。鋭利な縁辺を刃部に、厚みのある対縁は基部に据えられ、この基部の厚みを除去する
ような2枚の剥離痕で成形される。上部の縁辺には刃こぼれ状の微細剥離が観察されるが、2か所の
小剥離痕によって寸断される。全体の形状は第9ブロック出土の64bに近似する。剥離面の石基は黄褐色で、明黄褐色のローム粒が部分的に入りこんでおり、 $\phi 0.2\text{mm}$ ほどのガラス質の斑晶が $2\sim 3/\text{cm}^2$ 混じる。形状が近似する県外の資料には、栃木県上林遺跡の台形状石器（出居 博 2004『上林遺跡』佐野
市埋蔵文化財調査報告書30 第98図1105 チャート）が挙げられる。4(第8ブロック 玉髓3)は逆三角形状



第22図 第1～11ブロック 器種分布状況(1)

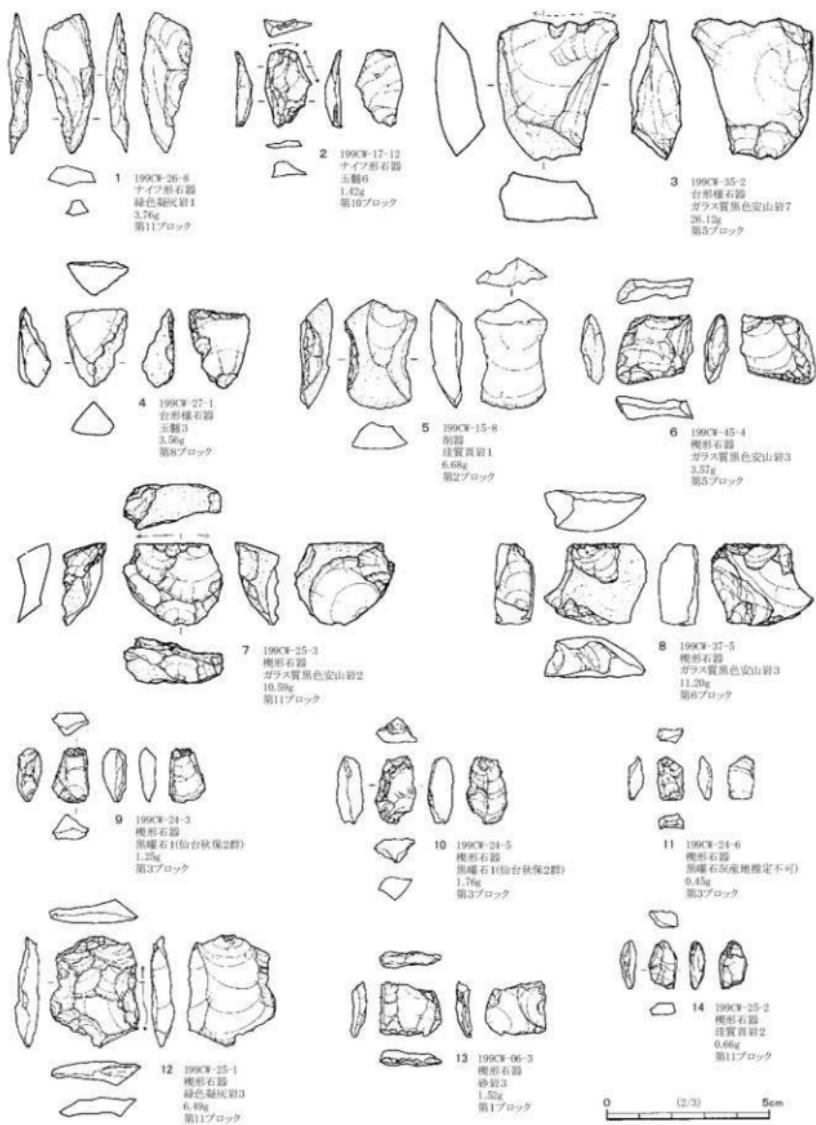


第23図 第1~11ブロック器種分布状況(2)

で、左側面の棱は摩耗して丸みを帯びる。二次加工はすべて裏面側に施され、刃部と片側面に連続した小剥離痕が並ぶ。打痕は横方向から除去されている。60a(黒曜石1)と同様の形態であり、類例には酒々井町墨古沢南I遺跡Bユニット41ブロック-1(黒曜石)、柏市大割遺跡28W-A1ブロック-21(玉髓)が挙げられる。58b・60a・64bは接合資料の項にて後述する。

削器 (5)

5(第2ブロック 硅質頁岩1)は小型の円錐素材で、背面に自然面を1/2弱残す。左側縁は主要剥離面側から緩く抉られ、縁辺に小さな剥離痕が並ぶ。母岩である硅質頁岩1の剥離面は滑らかな明黄褐色で微光



0 (2/3) 5cm

第24図 第1～11ブロック出土石器(1)

沢があり、同色の自然面はさらに光沢が強い。

楔形石器（6～17、57c+d、61c、63b）

16点のうち15点を図化した。実測した石器以外にも両端から同時に加撃された痕跡が残る資料は複数あり、本遺跡において両極剥離が多用されたことを示す。ただし、小型偏平礫素材の四角形状を呈する資料は少ない（6・15）。出土した楔形石器は中央から西側に偏在し、台石を開むかのような分布状態を示す。

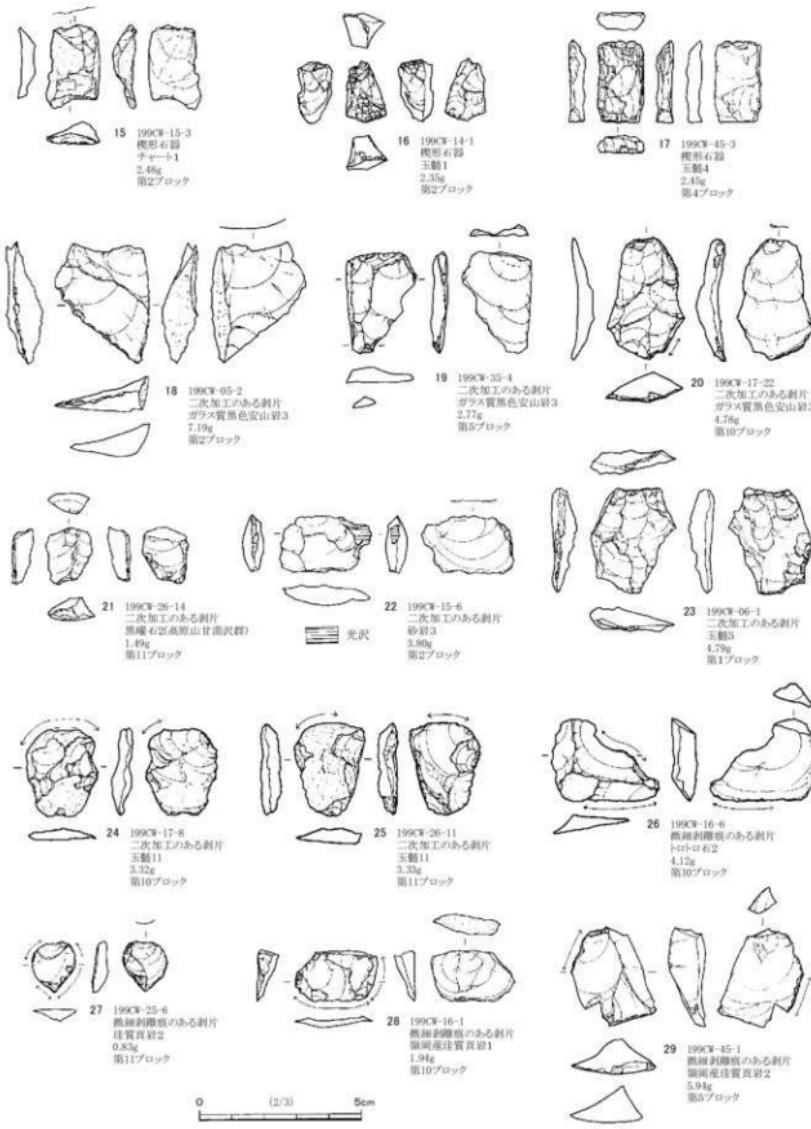
6（第5ブロック ガラス質黒色安山岩3）は上下縁辺に剥離痕が並び、左側面に自然面がみられる。7（第11ブロック ガラス質黒色安山岩2）は小型の円礫が素材である。挟み割りにより、上下縁辺から貝殻状の剥片が剥離される。一側縁は直線状に整えられ、最も鋭角なところでは53°を測る。この直線状の縁辺と弧状の縁辺の間（正面図左上部）には抉入部があり、同様の加工が64b（玉髓9の台形様石器）にもみられる。

8（第6ブロック ガラス質黒色安山岩3）の裏面に残る斜軸の剥離痕からは、作業が常に一端を台石などに据えた状態で行われていたことがみてとれる。右上角部は連続する小剥離痕によって丸みを帯びる。9（第3ブロック 黒曜石1（仙台秋保2群））は小型で柱状、正面左側に自然面を残す。剥離の方向は上下二方向に限られる。上縁には擦り潰したような細かな剥離痕が連なる。10（第3ブロック 黒曜石1（仙台秋保2群））は9同様に挟み割りで作出され、小型柱状である。9・10は仙台秋保産と推定された。11（第3ブロック 黒曜石5（産地推定不可））の背面では両極からの剥離痕がせめぎ合う。剥離面は濃灰色のスリガラス状、ガジリは光沢のある黒色である。12（第11ブロック 緑色凝灰岩3）に向かい合う上下、左右の縁辺に剥離痕が並ぶ。縁辺は凸、凹、直線状を呈し、直線状の右側縁には微細剥離痕がみられる。自然面・剥離面とも緑褐色で、稜の一部に微光沢がある。単独母岩である環央の第11ブロックの西側に楔形石器7、14とともに分布する。13（第1ブロック 砂岩3）は対向する上下、左右でリングがせめぎ合う。右側縁と下縁には潰れ状の小剥離が連続する。黒みの強い粗粒の石材である。14（第11ブロック 珪質頁岩2）には両極から同時に加えられた力によって、背腹両面に上下方向の剥離痕が残る。右上端部に小剥離痕の連なりのようなものがみられるが、丸みが強く、人為的なものか否か判じ難い。珪質頁岩2は27と本資料14の2点のみの出土で、約1.3mと至近距離にあるが接合しない。15（第2ブロック チャート1）は板状の長方形だが、上下方向の剥離痕が交わる正面中央部では高まりが残る。小円礫が挟み割りされて作出された石器であり、打面は砕け、下面是折損する。同一母岩の小剥片が第6ブロックに分布するが接合関係はない。チャート1の自然面は褐色で光沢があり、剥離面は濃緑灰色で微光沢をもつ。16（第2ブロック 玉髓1）は両極から加撃され、上・下部縁辺に錯行する小剥離痕が並ぶ。玉髓1は6点あり、6点の中では16が最も西に分布している。17（第4ブロック 玉髓4）は整った長方形で、上縁・左側縁に二次加工が連続する。素材打面は裏面上部にわずかに残る。オレンジ色の濃淡、波状の光沢面と非光沢面の存在は剥離後に被熱した可能性を示すものと思われる。

二次加工のある剥片（18～25）

二次加工のある剥片9点はブロック群の北側から西側に分布しており、楔形石器の分布域とは重なる。9点のうち、加工の明確な8点を図化した。

18（第2ブロック ガラス質黒色安山岩3）の打点は遺存せず、主要剥離面では上下双方向のリングがせめぎ合う。打点対縁は斜位に直線状だが、押し引きの際の刃こぼれと粗い二次加工痕がみられる。19（第5ブロック ガラス質黒色安山岩3）は同一打面から連続して剥離されたうちの1片である。左側面を自然面として記載したが、風化した剥離面の可能性も否めない。末端部に二次加工痕がみられる。20（第10ブ



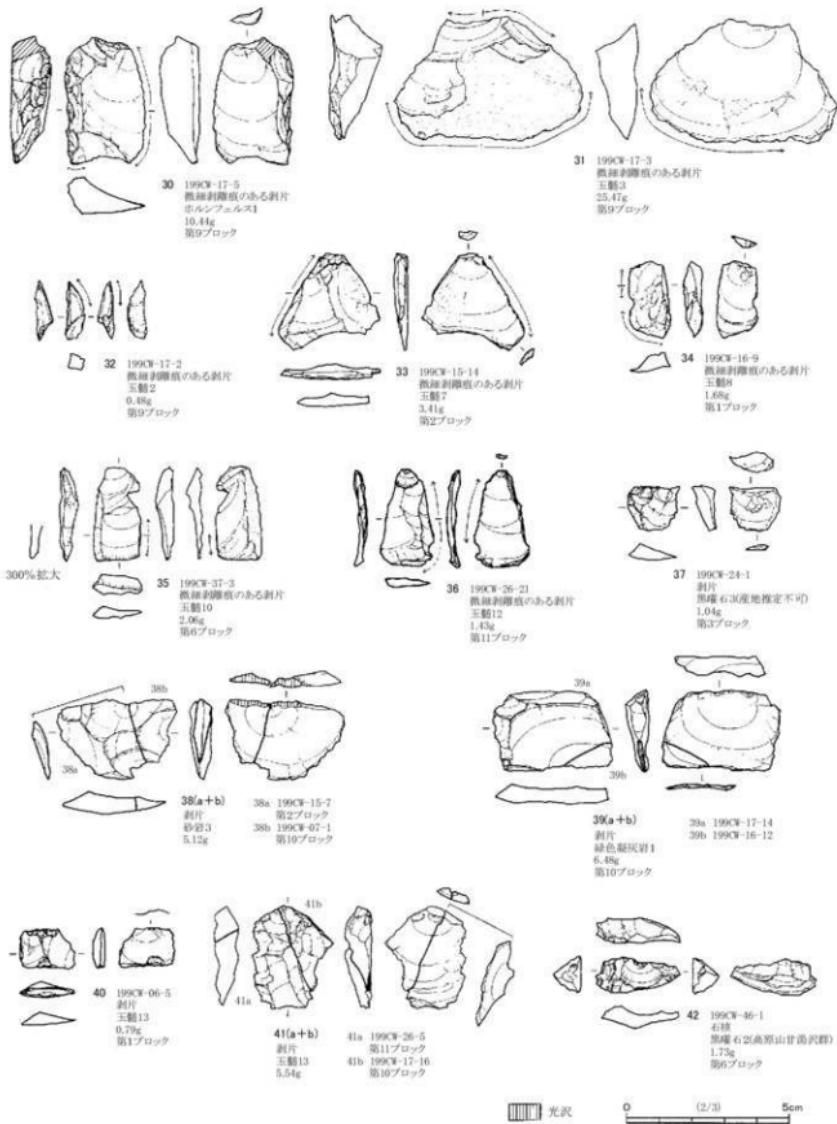
第25図 第1~11ブロック出土石器(2)

ロック ガラス質黒色安山岩3)は縦長剥片を素材とする。背面に残る剥離方向の大部分は主要剥離面と同一だが、2面は対向する。末端はわずかに背面側に回りこんでいるが部分的に欠けており、意図的に角部が除去された可能性がある。18~20の原石は斑晶の少ない、拳大ほどのガラス質黒色安山岩である。21(第11ブロック 黒曜石2(高原山甘湯沢群))の上部は折れて欠損し、主要剥離面左側に平坦剥離が連なる。22(第2ブロック 砂岩3)の素材は石斧調整剥片である。本資料の右端に石斧時の刃部と推定される扇面を有し、左側縁には二次加工が直線状に施される。また、磨面を両方向から抉るような加工は、30にもみられる。砂岩3はブロック群の北側から7点出土しており、22は砂岩3が集中する第2ブロックに分布する。23(第1ブロック 玉髓5)は右側縁を除く3縁辺に二次加工痕がみられる。下縁辺の小剥離痕の連なりは折れによって断絶する。上縁辺は背面・主要剥離面両面に向けての連続した剥離痕によって、直線的な刃部状となる。両極剥離によって作出された素材が用いられており、楔形石器にも捉えられよう。24(第10ブロック 玉髓11)・25(第11ブロック 玉髓11)は大きさ、形状が近似し、ともに重さ33gである。側縁と末端には二次加工痕がみられ、微細剥離痕の部位も線状打面の付近であり、両者の加工・使用痕の部位も共通する。風化・節理、あるいは被熱により器面が劣化しているため、人為的なものか否かは定かではないが、台形様石器の加工痕にみられる器厚を減ずるような剥離痕跡も両資料からうかがえる。24は第10ブロック、25は中央ブロックの密集域から出土し、2点間は5.1mである。接合関係はない。

微細剥離痕のある剥片(26~36、59a・60b・62a・62b・64a)

微細剥離痕のある剥片16点は北側を中心に出土しており、南ではまばらである。楔形石器、二次加工のある剥片の分布と概ね重なる。

26(第10ブロック トロトロ石2)の二側縁に微細剥離痕がみられる。左側縁はガジリにより欠損するが、他の縁辺と同様の使用痕が連なっていたと推定される。風化と石材の特徴が相まってか稜線は不明瞭である。27(第11ブロック 珪質頁岩2)は同一方向から連続して剥離されたうちの1片である。線状打面であり、打面を除くほぼ全周に微細剥離痕がみられる。滑らかな光沢をもつ乳白色の珪質頁岩2を母岩とする。28(第10ブロック 嶺岡産珪質頁岩1)は自然面打面から穿たれた厚みの少ない横長剥片である。打面と左側面を除いた縁辺に使用痕がめぐる。剥離面は緑色を帯びた明褐灰色で、濃灰色の斑紋をもつ。29(第5ブロック 嶺岡産珪質頁岩2)は石核をこまめに回転させながら剥離されており、一面一剥離の様相である。左側縁に微細剥離痕がみられる。28同様、珪質な嶺岡産珪質頁岩が使用されるが光沢は少ない。30(第9ブロック ホルンフェルス1)は局部磨製石斧の刃部を素材とし、右側縁が刃器として使用される。右側縁には主要剥離面側の著しいフィッシャーにより波打つような凹凸がみられるが、凸部に押し引きした際の光沢が確認できた。主要剥離面の右上部に鏡のような磨面が残る。磨かれた刃部を敲打と剥離によって調整し、再度利用したあとに横方向からの加撃で作出了るものであり、この際に磨面を削ぐように打面が作られる。堆積岩起源のホルンフェルスであり、剥離面の点状痕は疎らで浅い。濃灰色を呈し、自然面はない。31(第9ブロック 玉髓3)は剥離工程の初期段階の剥片で、広い縁辺のはとんどに著しい刃こぼれがめぐる。明確な打点は残っていないが、線状となった上縁辺には光沢がみられ、何らかの使用痕と推定される。32(第9ブロック 玉髓2)は両極から加えられた打撃によって作出された剥片である。先端は四つ目錐状で、微細剥離痕がみられる。わずかに橙色を帯びた半透明の玉髓2が母岩である。33(第2ブロック 玉髓7)は厚みの少ない板状の剥片で、正面形は角のとれた三角形状である。直線状の左縁辺に微細な剥離痕が間断なく並び、この裏面縁辺には8倍ルーペにて微光沢が観察された。34(第1ブロック 玉髓8)



第26図 第1~11ブロック出土石器(3)

は、素材剥片の側面を加撃することで小型縦長の剥片を作出している。打角は124°と鈍角である。厚みのある右側面を除く三線辺に微細剥離痕が連なるが、中ほどの欠けにより寸断される。35(第6ブロック 玉髓10)は厚みの少ない長方形状で、末端縁辺に強い光沢がみられる。末端の正面側は丸みを帯びるが、裏面では1mm×13mm、横幅いっぱいに面的な磨りが施されているようである。打点は遺存しない。楔形石器あるいはノミのような道具として用いられたものと形状から推測される。母岩はうっすらと橙色を帯びた白色半透明の玉髓10である。第4章では台形様石器の亜種と捉え、研磨痕ある資料として掲載した。36(第11ブロック 玉髓12)は厚みの少ない二等辺三角形状である。23°の鋭利な右側縁には微細剥離痕が連なり、左側縁は折取りにより整形される。背面端部に残る自然面は炭化し、末端縁辺の欠けた部分には油脂状の光沢がみられる。

剥片・碎片 (37~41、57a・57b・58a・61a・61b・63a・65a)

剥片(77点)はすべてのブロックに広く分布する。碎片(12点)は石材によって疎密があり、複数の碎片を組成するガラス質黒色安山岩と黒曜石では、楔形石器や二次加工・微細剥離痕のある剥片とともに出土する。

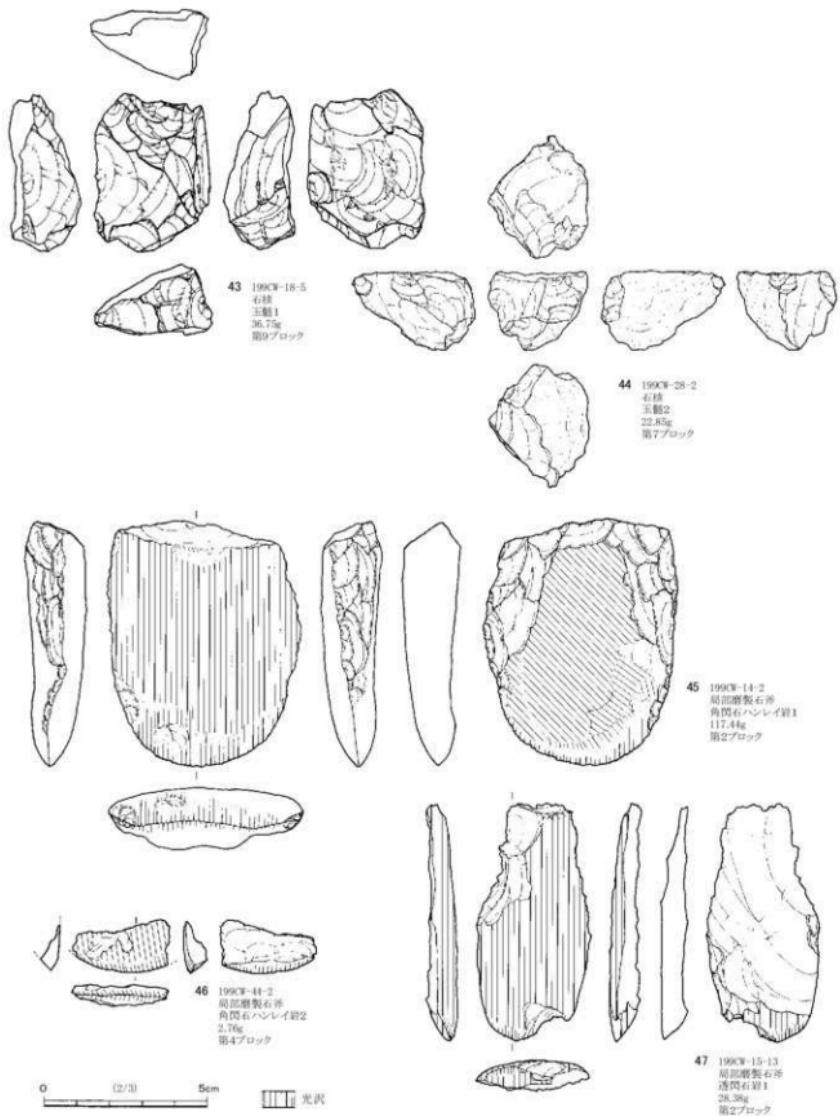
37(第3ブロック 黒曜石3(产地推定不可))は平坦打面から剥離された貝殻状の剥片であり、器厚の薄さからか下端部はわずかに欠ける。主要剥離面右部は新矢である。黒色～濃灰褐色の縞状で、不透明である。分析では推定产地は不明という結果であったが、同一母岩に分類した中には仙台秋保2群産が含まれる。38(a+b)(第2+10ブロック 砂岩3)は背面に多方向の剥離痕をもち、打面に石斧時の磨面がみられる。石斧調整剥片を素材とした打面直下折れの2点だが、38a(第2ブロック)と38b(第10ブロック)間は約62m離れている。折れた後に加工・使用された痕跡はない。39(a+b)(第10ブロック 緑色凝灰岩1)の平面形は平行四辺形で厚みは均一である。39aと39bは至近距離にある。61とは連続した工程上の所産と推定されるが、薄い剥片1枚分ほどの間隙があり接合に至らない。40(第1ブロック 玉髓13)は下部折れの小型の剥片で、玉髓13の中では良質な部分といえる。背面上部に小さな剥離痕が連なるが、剥片剥離時の衝撃による弾けと思われる。41(a+b)(第10+11ブロック 玉髓13)は打点直下折れの2点が接合し、1点の剥片として図化した。二次加工や微細剥離痕はみられない。石材は脆弱で、内包されたヒビや風化により、敲打の情報が捉えがたい。41aは環央の第11ブロック、41bは北北東の第10ブロックから出土し、2点間は約2.9mである。

石核 (42~44、59b・65b+c)

大塚台遺跡(2)の黒曜石には長幅厚とも30mmを超える石器はなく一様に小型である。42(第6ブロック 黒曜石2(高原山甘湯沢群))の最大値は幅にあり、長軸方向の挟み割りの後、横位に設置し、小片の作出、あるいは錐などの石器製作を意図したものと推測される。平坦打面からの加撃により、正面中央に小型の剥片が作出された痕跡が残っているが、接合する資料は出土していない。43(第9ブロック 玉髓1)は厚みのある剥片が素材である。作業面は正面と下面であり、正面に残る剥離工程は左方向から横長の剥片を剥離したのちに上・下方向から剥離作業が行われ、5点以上の貝殻状剥片が作出される。こののち下面を作業面とし、一端を固定させた状態で右方向から加撃される。44(第7ブロック 玉髓2)は厚みのある剥片(分割礫)の主要剥離面を打面とし、正面、左面が作業面となる。玉髓2は6点出土しているが、接合関係はない。ブロック群の最東端に分布する。

局部磨製石斧 (45~48)

45(第2ブロック 角閃石ハニレイ岩1)は両面とも磨かれているが、刃部の磨耗光沢は特に強い。上部



第27図 第1～11ブロック出土石器(4)

は斜めに折れた鋭角の縁から器厚を削ぐような表皮の剥離が施される。両側縁も同様の加工が行われるが、剥離後の擦りはみられない。刃部は両面から調整されているため外形と稜線、刃先部分を下面図で示した。母岩は緑色を帯びた白色の部分と黒い角閃石粒からなる角閃石ハントレイ岩1であり、他に同一母岩はない。比重は2.97(2.966153)で、強い磁性がある。46(第4ブロック 角閃石ハントレイ岩2)は片刃の局部磨製石斧が対象物に打ち付けられた際に弾けた石片であり、線状の刃部から剥がれた印象を受ける。母岩の特徴は角閃石ハントレイ岩1と同様だが、異なる資料の局部磨製石斧刃部であるため別母岩とした。47(第2ブロック 透閃石岩1)は偏平な長梢円形状で、裏面はスライスされて遺存しない。だが、裏面の刃部付近は剥離を免れており、丁寧に調整された片刃の刃部形状をみることができる。正面側の丸みはごくわずかで平坦な印象だが、裏面刃部はシャープに仕上げられており、刃部角は57°を測る。磁性はない。比重は3.07(3.067027)である。なお、石材の「透閃石岩」とは蛇紋岩が変形・変性したもので、アクチノ閃石(緑閃石)と透閃石を含む。千葉県立中央博物館地学研究部の高橋直樹氏に鑑定していただき、47にはアクチノ閃石が多く含まれることを確認した。このため、石材名を「アクチノ閃石岩」、「緑閃石岩」とすべきであろうが、明治大学黒耀石研究センター(元野尻湖ナウマンゾウ博物館)の中村由克氏の前例に倣い、両鉱物で構成される岩石をまとめて「透閃石岩」と報告する。48(第2ブロック 緑色凝灰岩1)は局部磨製石斧の刃部で、研磨面は剥離されて遺存部位はごく少ない。うす皮をめくるように削がれており、光沢をもつ研磨面が意図的に除去された可能性がある。全体の形状は第12ブロック5と同様の三角形状で、側縁は鋭角で直線的である。剥片作出に余力を残した石核、あるいは手持ちの刃器として利用された可能性がある。

局部磨製石斧調整剥片(49~53)

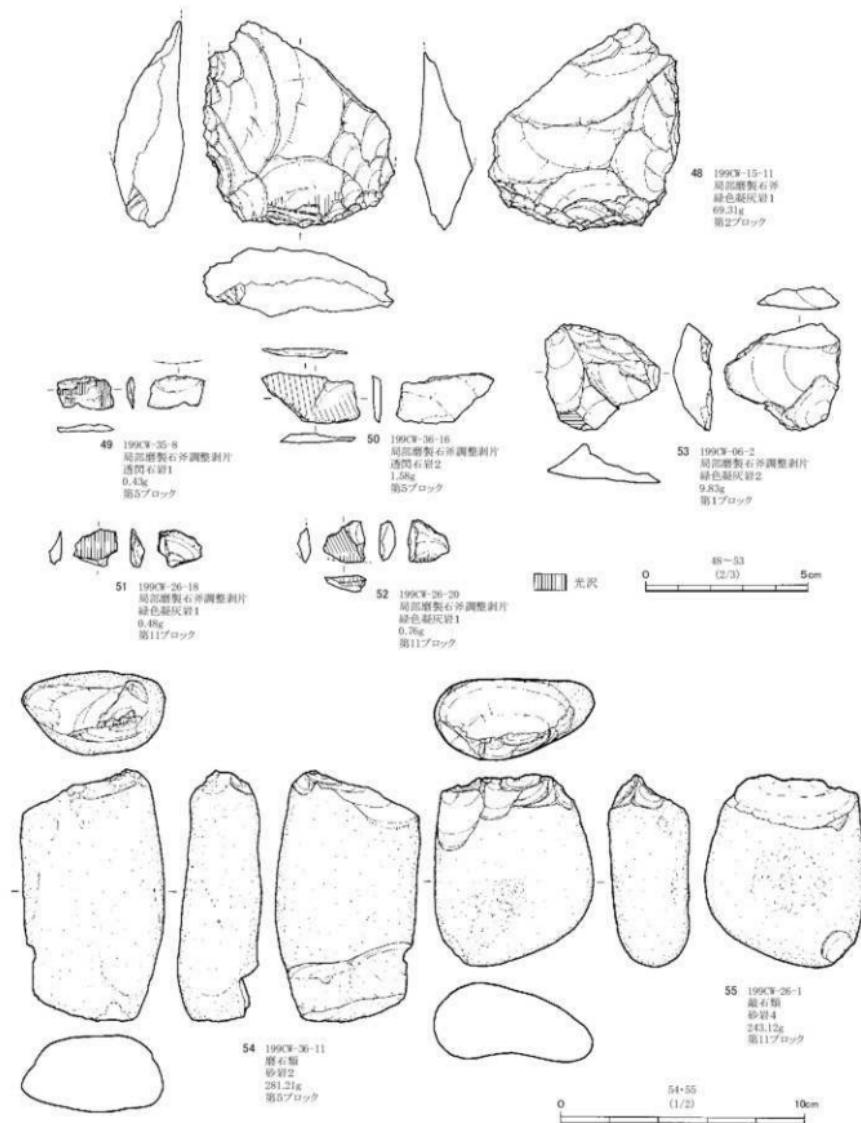
本来は石斧を成・整形するための「石斧調整剥片」だが、ここでは素材石核としての局部磨製石斧から剥離された剥片も含めて、局部磨製石斧調整剥片と呼称した。

49(第5ブロック 透閃石岩1)は横長剥片であり、打面は線状である。光沢のある表皮は一部剥落する。50(第5ブロック 透閃石岩2)は刃先に向かうに従い、角度が変化する局部磨製石斧端部を素材とする。刃先はゆるやかな弧状か。下部左縁辺の磨痕を刃こぼれ状の微細剥離痕が切っており、直線的な縁辺が作り出されている。刃器として使用された可能性がある。透閃石岩1と同じ特徴を有するが、色調はやや明るめで磁性はなく、比重は3.10である。51・52は第11ブロックから出土した緑色凝灰岩1の局部磨製石斧の刃部片である。線状の刃先から派生した折れが側面に及び、全体的に不規則なリングの流れがみられる。51の磨面が正面のみにみられるのに対し、52の下端部には両面に刃部の光沢が残る。53(第1ブロック 緑色凝灰岩2)は下端部に石斧時の光沢面が残る剥片で、縁辺全体が摩耗して丸みを帯びる。裏面の左上部に背面側からの剥離痕が並ぶが、人為的な加工か風化によるものかの判断が困難である。緑色凝灰岩2は2点あり、53は第1ブロック、ほかの1点は第11ブロックに分布する。局部磨製石斧48の緑色凝灰岩1よりも粗粒である。

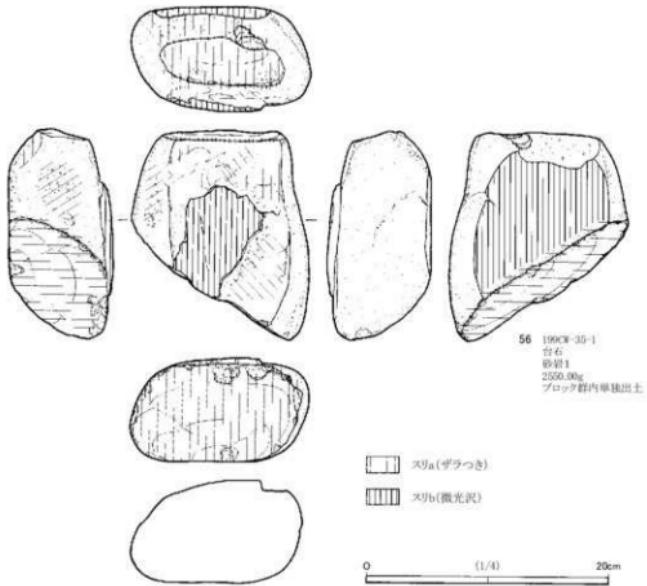
磨石類(54)

54(第5ブロック 砂岩2)の両端部は欠損し中部のみ遺存する。上部の右側面に敲打による潰れ痕がみられるが、器形を変える程ではない。また、裏面の稜の一部には摩耗による丸みがみられる。平坦面にも光沢とかすかな擦痕が部分的にみられる。淡黄褐色の軟質砂岩で、わずかに緑色を帯びる。

敲石類(55)



第28図 第1～11ブロック出土石器(5)



第29図 第1～11ブロック出土石器(6)

55(第11ブロック 砂岩4)は厚みのある亜円盤を素材とする。敲石、台石、石斧、石核など、多様な用途に用いられた加工工具であろう。両平坦面には敲打痕と擦痕がみられ、裏面中央部の凹みは最大3mmを測る。左下端の凸部にも弱い敲打痕と擦痕がみられる。淡黄褐色の軟質砂岩で、砂岩1に比べ粒子の濃淡がはっきりしている。上部は赤茶色の節理面である。

台石 (56)

56(環状ブロック群内単独出土 砂岩1)の現存値は縦横厚各169.4mm×143.9mm×84.9mmで重さ2,550gだが、斜めに節理折れしており、本来の縦位は200mmほどと推定される。器表面には強弱のある光沢と微細な擦痕、剥落による段差がみられる。敲打痕の凹凸や荒れは確認できないが、加熱によって脆化した部分が剥落した可能性がある。平らな節理面の棱上に自然面を打面とした小剥離が周回し、角部は丸く整えられている。剥離面は摩耗し、角部と同様、丸みと光沢を帯びる。砥石のような凹みはなく、石斧の刃部を研ぎ出した痕跡はない。石斧とその調整剥片の出土状況からはむしろ、本来の役目を終えた石斧から剥片を剥離するための作業に用いたと考えるのが妥当であろう。また、光沢のある器表面からは動物の皮革や植物などの有機物などを揉み擦りした可能性が窺い知れる。

光沢の残る部分をトーンで示した。スリaはザラつきを残す平坦な面を表し、スリbはもとの機能面で微光沢を保っている。この台石を中心とした半径2.4m内には遺物の出土はない。出土時は実測図正面が天を向いた状態であり、使用時の様相を遺していると思われる(図版4参照)。

接合資料（57～65、接合番号1～3、6、8～10、12・13）

ガジリや折面での接合を除いた、剥離順を追える接合資料は9個体あり、ブロック内での接合が8個体、ブロック間で接合するものは1個体確認できた。ブロック間接合は58のガラス質黒色安山岩3の剥片と台形様石器が約12m離れて接合した資料である。この台形様石器は同母岩が多数分布する第5ブロックに、剥片は玉髓が集中する第9ブロックに分布する。なお、母岩分布状況は第34～37図に示した。

57(a～d) (第5ブロック 接1 ガラス質黒色安山岩3 57a FL、57b FL、57(c+d) PQ) 57は楔形石器1点と剥片2点の接合資料である。下端を台石のようなものに設置した状態で剥離作業が行われており、57a、57b、57(c+d) はすべて同一方向から加撃されたものである。二側縁が収束する57aの末端部分に潰れ痕がみられる。背棱を削る剥離が行われたのち、縁辺を潰すような調整、もしくは使用の際の刺突痕の可能性がある。

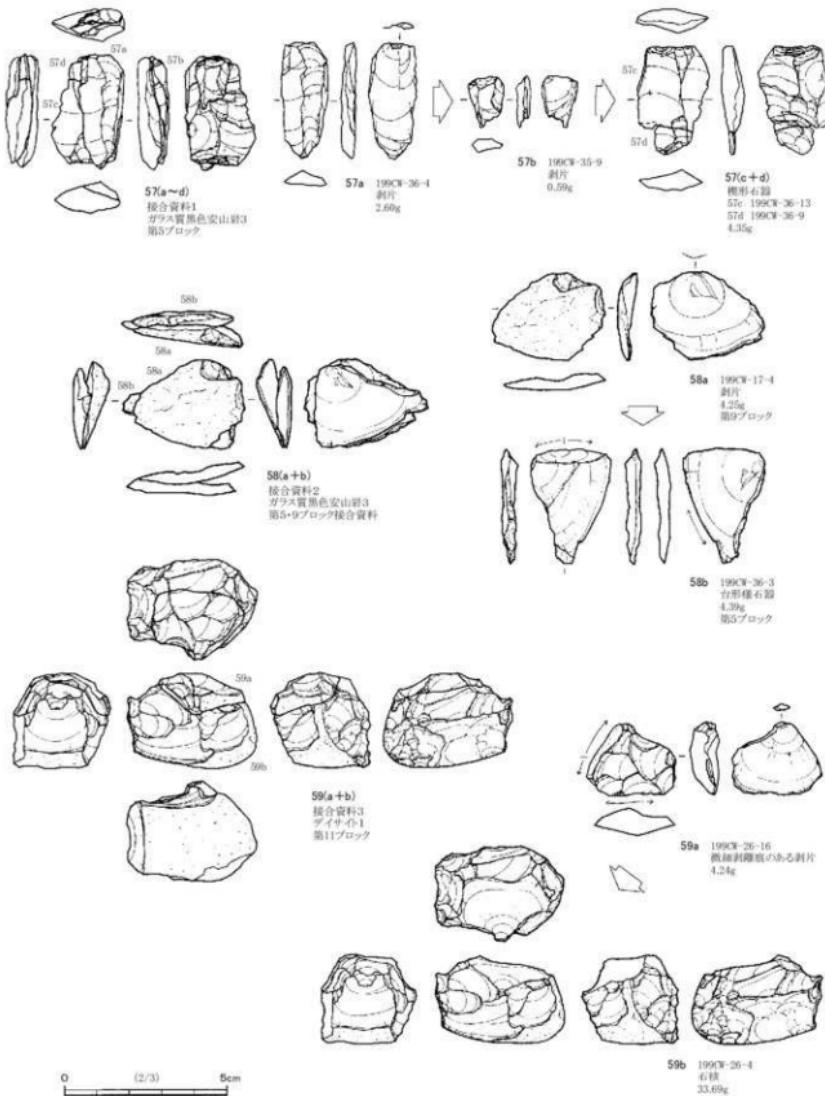
58(a+b) (第5、第9ブロック 接2 ガラス質黒色安山岩3 58a FL、58b TP) 剥片58aと台形様石器58bの接合資料である。58aは北東側の第9ブロック、58bは南側の第5ブロックに分布し、2点間は約12mである。58aの背面は大部分が自然面の貝殻状剥片であり、末端は波打つように収束する。58bは剥離後、素材の右部が鋭角に加工され、61°の刃部が作出される。この直線状の刃部には刃こぼれが看取される。同様の加工は7の台形様石器側面にもみられ、平坦面の中ほどを斜めに加撃し折断することによって、鋭角で直線状の縁辺が作出されている。両側縁はVの字状で、一侧縁は蝶番状の末端縁辺、もう一方の側縁は背面から2回の加撃で作出される。

59(a+b) (第11ブロック 接3 デイサイト1 59a MF、59b CO) 微細剥離痕のある剥片59aと石核59bの接合資料であり、2点間は約1.3mである。鶴卵大の円礫を素材とする打面・作業面置換型の石核で、作業面は正面、上面、左面、裏面にあり、正面右側に最終剥離面が残る。59aの左側縁は直線状で、微細剥離痕が連なる。自然面・剥離面とともに灰色で、ごく細粒だが光沢はない。スプレーで吹き付けられたような黒いタール状の変色痕が部分的にみられる。磁性が強い。

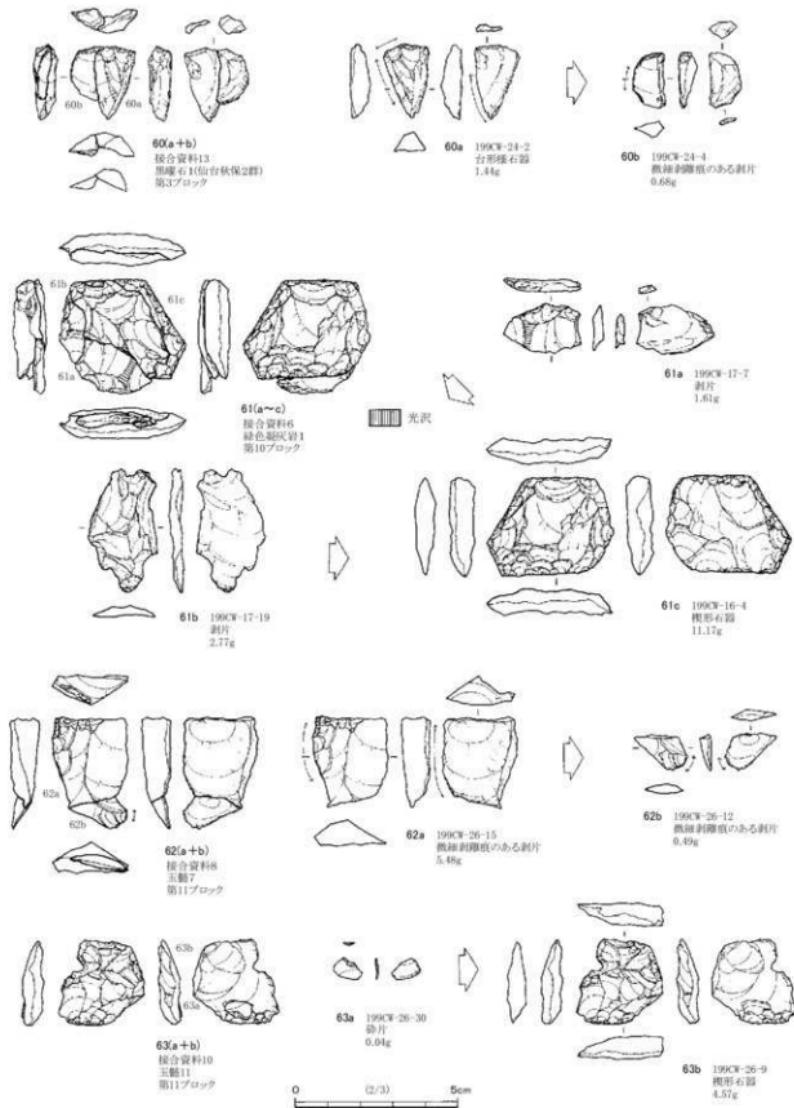
60(a+b) (第3ブロック 接13 黒曜石1 (仙台秋保2群) 60a TP、60b MF) 両極剥離された2点であり、0.55mとごく至近に分布する。素材石核からはまず、60aが剥離され、のちに60bを含む剥片が、挟み割りにて剥離される。60aは二等辺三角形状の台形様石器である。折断、あるいは剥離によって右面が作出されており、末端縁辺は裏面を取り込むように丸みをもって収束する。裏面は平坦で凹凸が少なく、下半部の横断面は山高の三角形状で、端部は刺突具のように尖銳である。左肩部から左側縁には微細な剥離痕がめぐる。折断による成形や正面・側面形の類例としては、玉髓の台形様石器4が近似する。60bは打点直下折れの剥片で、薄い縁辺には複数の折れがみられる。

61(a～c) (第10ブロック 接6 緑色凝灰岩1 61a FL、61b FL、61c PQ) 剥片2点と楔形石器1点の接合資料である。分割された局部磨製石斧片を素材（石核）として、61a、61bの順に61cの厚みを削ぐように剥離される。61cは六角形状で、それぞれの対向する縁辺は平行し、直線状に加工される。61a・61bに、部分的ではあるが、微光沢のある素材面が残る。その鈍い光沢の度合いと平滑さから、刃部付近ではなく握部かと推測される。61a・61bと61cとは約2.3mの距離があり、製品である61cは中心のブロック近くに分布する。

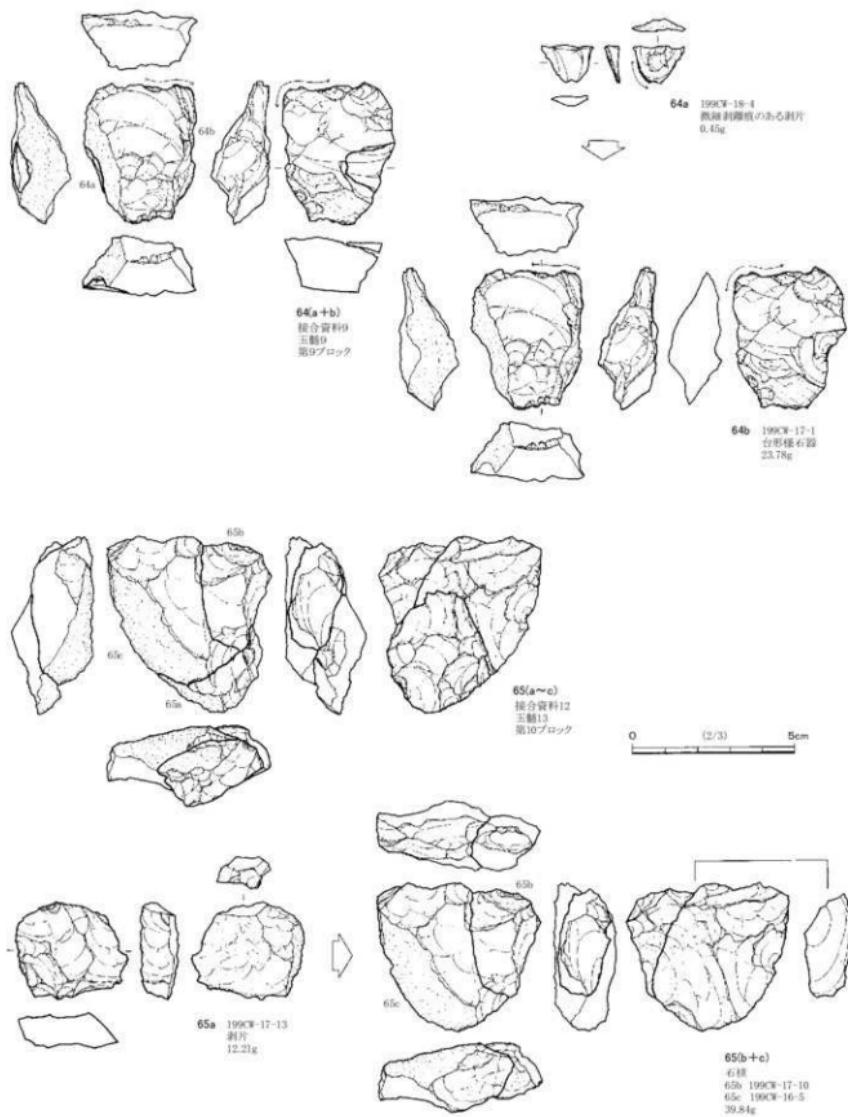
62(a+b) (第11ブロック 接8 玉髓7 62a MF、62b MF) 微細剥離痕のある剥片2点が接合した。2点はほぼ同じ位置から出土しているが、62a剥離後、62bに至る工程には数枚の剥片剥離と打面転移が



第30図 第1～11ブロック出土石器(7)



第31図 第1~11ブロック出土石器(8)



第32図 第1～11ブロック出土石器(9)

行われている。このため、初期段階から62bは別塊に帰属し、別工程の所産であったと考えられる。62aは左上縁、62bは弧状の末端縁に微細剥離痕がみられる。

玉髓7は5点あり、7.0m×1.5mの帶状に分布する。第2ブロックから1点、環央部の第11ブロックから4点出土しており、このうち環央部の2点が接合するも、工程的には隔たりがあり、作出された剥片類は遺跡外へ持ち出されたか、他所で作られたものが搬入されたと推測される。

63(a+b) (第11ブロック 接10 玉髓11 63a CH、63b PQ) 剥片と楔形石器が接合した。2点間は約50cmと至近である。63bの対向する上・下縁に小剥離痕が連続するが、63aはこの下縁の調整の際に剥離したものである。右縁辺上部の剥離痕は素材時の頭部調整か。

64(a+b) (第9ブロック 接9 玉髓9 64a MF、64b TP) 微細剥離痕のある剥片と台形様石器が接合した。64aは台形様石器64bの器厚を減るために側縁から剥離された調整剥片であり、64a以前にも同じ部位の減厚が試みられている。64aは小片であるが両縁辺に小剥離痕が連続し、特に左側縁には微細剥離痕が規則的に並ぶ。器厚の薄さに準ずる欠損の可能性も考えられたが、顕微鏡観察で摩耗痕を確認し、使用痕と判断した。台形様石器の正面下位の節理部分は打点直下で弾けたため、段差が生じている。また、下端の基部縁辺には小剥離痕が連続し、やや抉れ気味である。64a、64bの2点間の距離は1.5m弱で至近といえる。自然面は黒色、褐色が混在する光沢のある平板な面であり、剥離面は橙色を帯びた部分もあるが、概ね白色不透明でスリガラス状である。房総の遺跡で出土する橙色を帯びた半透明の玉髓とは異質である。第5ブロックの3(ガラス質黒色安山岩7)と大きさ、形状、加工部位が近似する。3でも記載したとおり、県外の資料ではあるが、栃木県上林遺跡の環状ブロック群から出土したチャート製の台形状石器に類例をみることができる。

65(a~c) (第10ブロック 接12 玉髓13 65a FL、65(b+c) CO) 剥片1点と2片で1点の石核が接合した。3点は直径1.4mの円内に収まる。ソフトボール大の亜円礫を素材とするが、自然面・剥離面とも光沢や含有物により一様ではなく、多方向からの不規則な剥離痕がみられる。作出された剥片、石核に二次加工や使用痕はない。玉髓脈が縦横に入り、灰色の小礫が混在する。また、節理の発達により破碎部分が多くみられる。部分的にごく滑らかな光沢をもつ淡褐色の器面があり、この部分から40のような刃器になりうる剥片が作出される。遺棄された石核は剥片作出の余力が十分に残された大きさと思われるが、石器製作には不適な質だったのかもしれない。

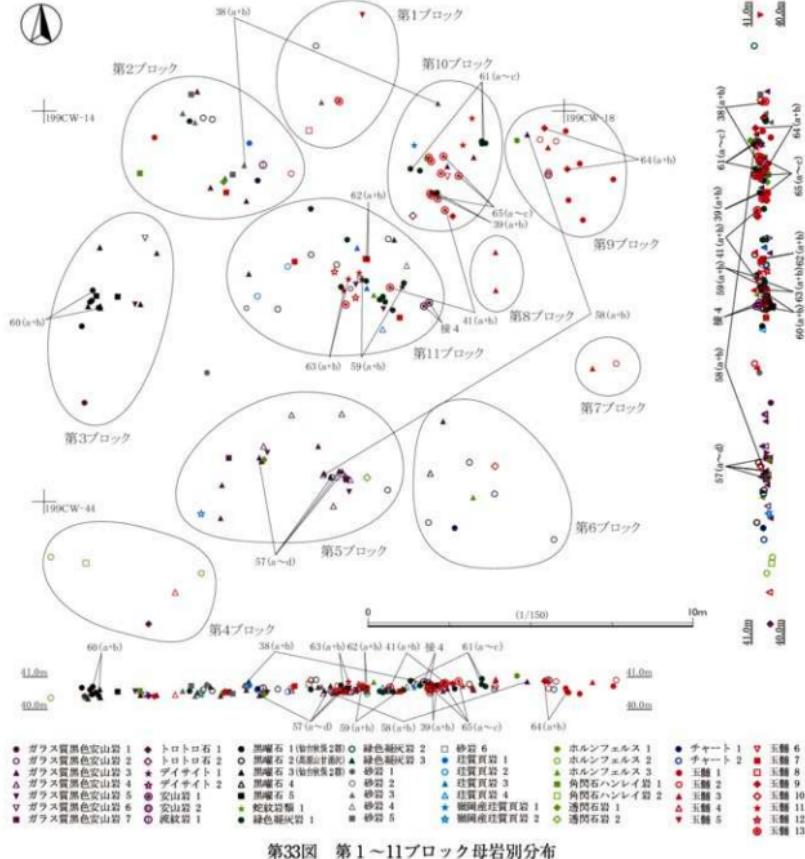
(4) 母岩分布 (第33~37図 第3・17表 図版17・21)

母岩の分布と観察表を第33~37図、第18・19表に示した。この項では仙台秋保2群の黒曜石と、透閃石岩、緑色凝灰岩、玉髓について述べる。記載は器種の項と一部重複する。

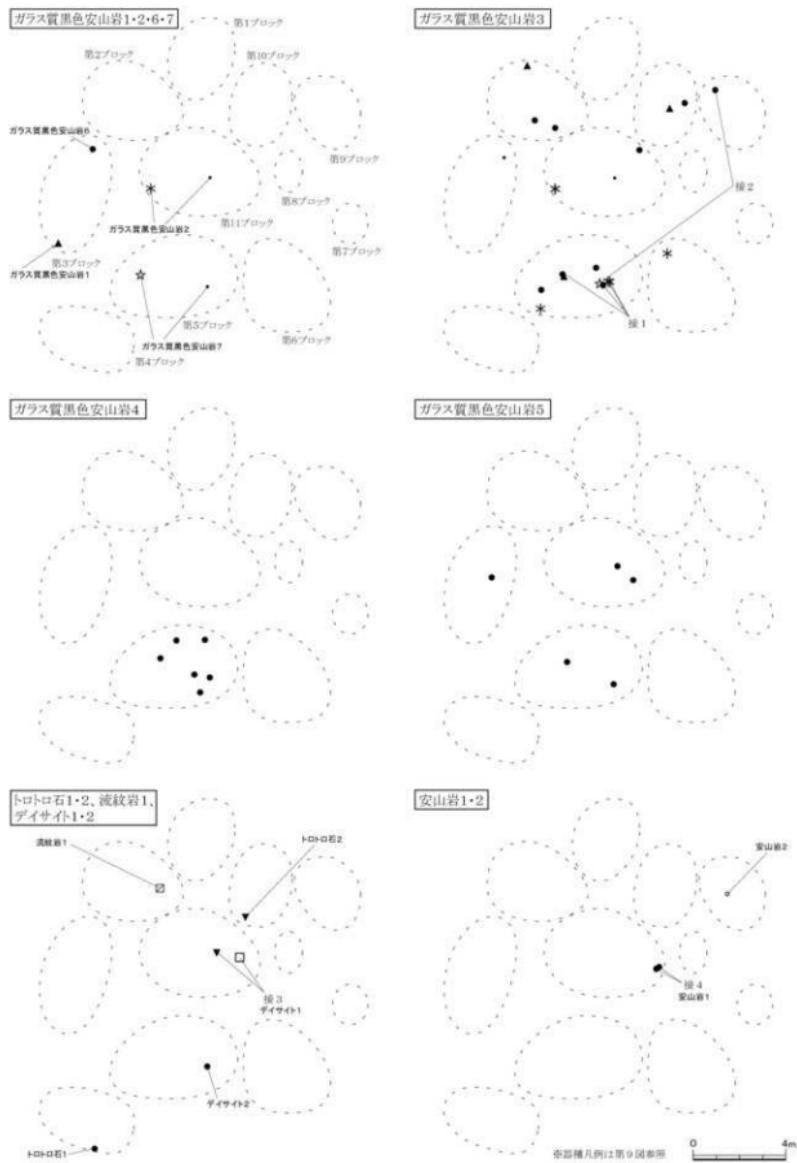
理化学的な分析に拠って推定された黒曜石原産地は、栃木県の高原山甘湯沢、宮城県の仙台秋保の2か所である。現時点では、千葉県におけるⅣ層下部段階の黒曜石産地として仙台秋保は最も北方に位置し、印西市荒野前遺跡V~IV下層段階で確認されて以来8年ぶり、2例目となる。大塚台遺跡環状ブロック群では第3ブロックに10点(うち4点は目視での推定)が分布し、両極打法で剥離された楔形石器や台形様石器などのトゥールを含む。第2・5・6・11ブロックに2~3点が分布する高原山産とは混在せず、第3ブロックの直径2.6mの円内に密集する。当初箱根畠宿産と推定されたが、池谷氏による再三の分析の結果、仙台秋保2群産と変更した。類例や経緯など、少々の考察をまとめの項に記した。

石斧石材では緑閃石を含有する透閃石岩が出土した。県内に岩体ではなく、関東山地から利根川伝い、あるいは利根川を利用してたらされた可能性が千葉県立中央博物館の高橋直樹氏により指摘されている。この透閃石岩製の石斧は、厚みのない小型の局部磨製石斧で、握部は削がれたように減厚されてはいるが、遺存する刃部は両面から丁寧に磨かれ黒く光る。石斧3点がまとめて出土した第2ブロックに帰属する。

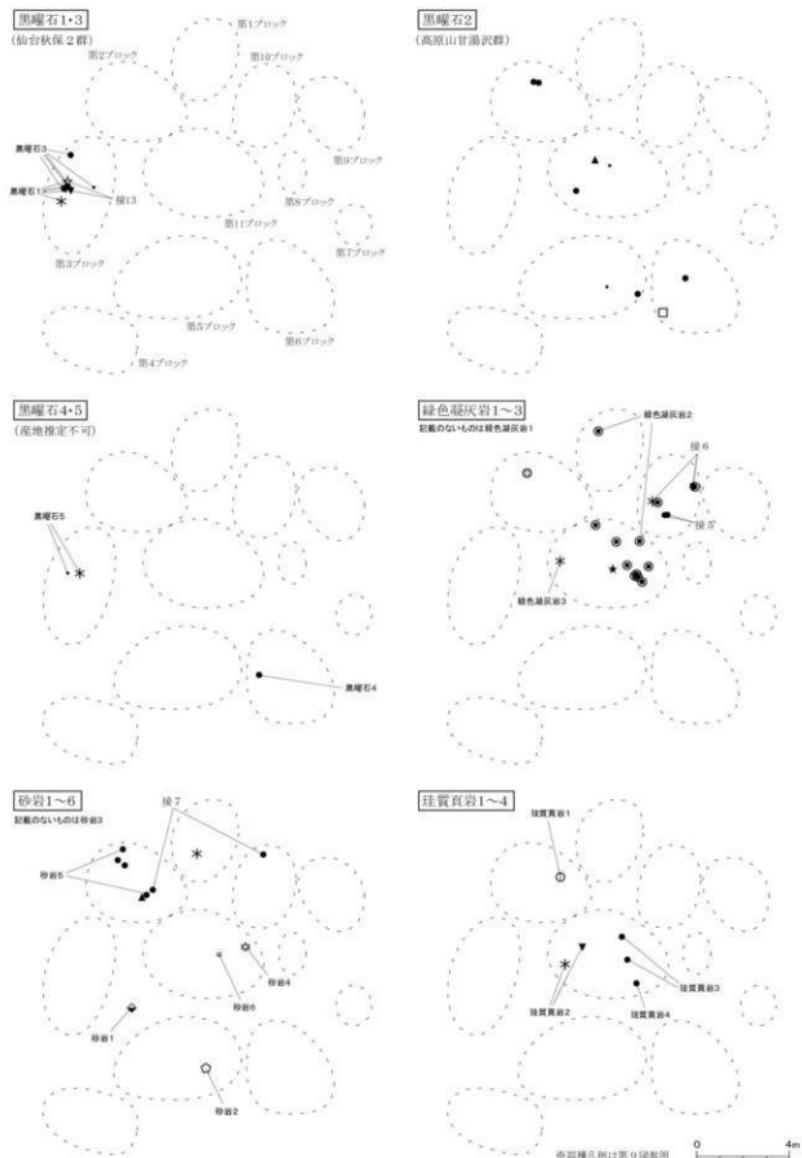
第2ブロックではこのほかにも、調整剥片と分布域が異なる緑色凝灰岩1の局部磨製石斧が出土している。緑色凝灰岩1は、本来1点の局部磨製石斧が母岩であり、石核である。出土した17点の内訳は、丸く小型化した局部磨製石斧の刃部1点、ナイフ形石器1点、楔形石器1点、剥片4点(2片で1点の剥片を含む)、局部磨製石斧調整剥片10点である。このうち、楔形石器と剥片3(4)点は分割された塊から別工



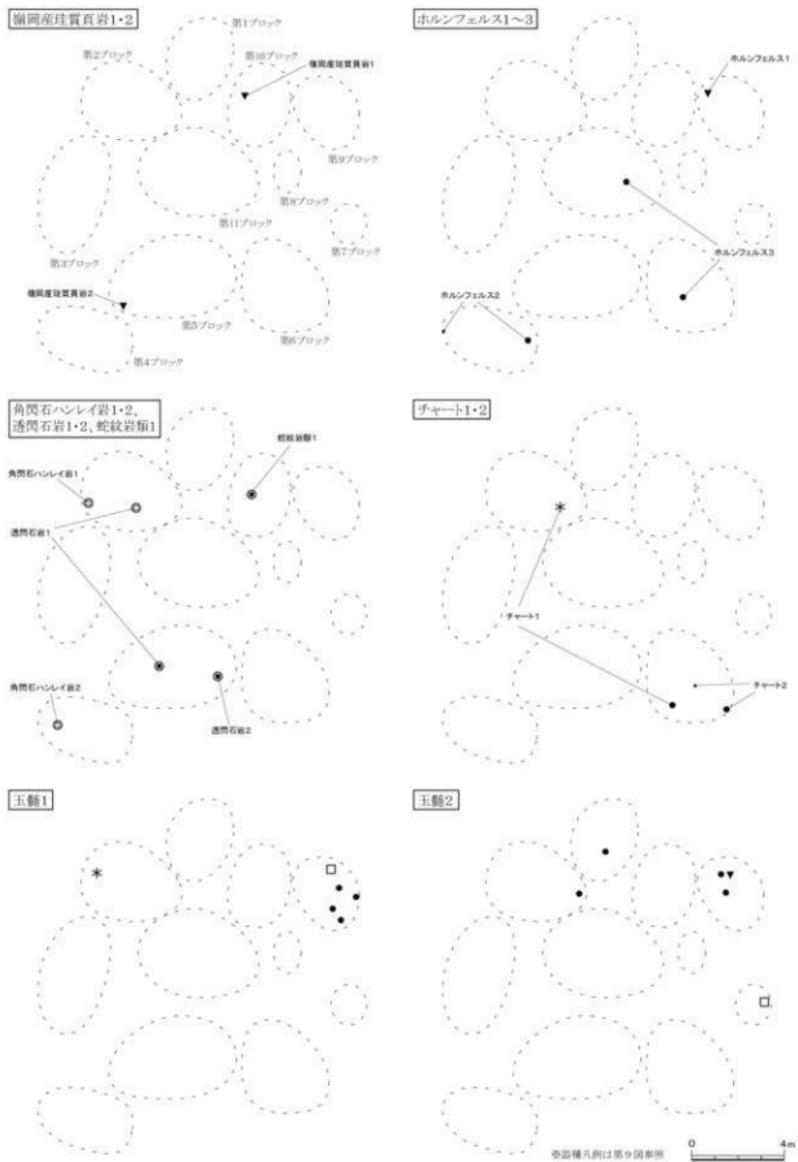
第33図 第1~11ブロック母岩別分布



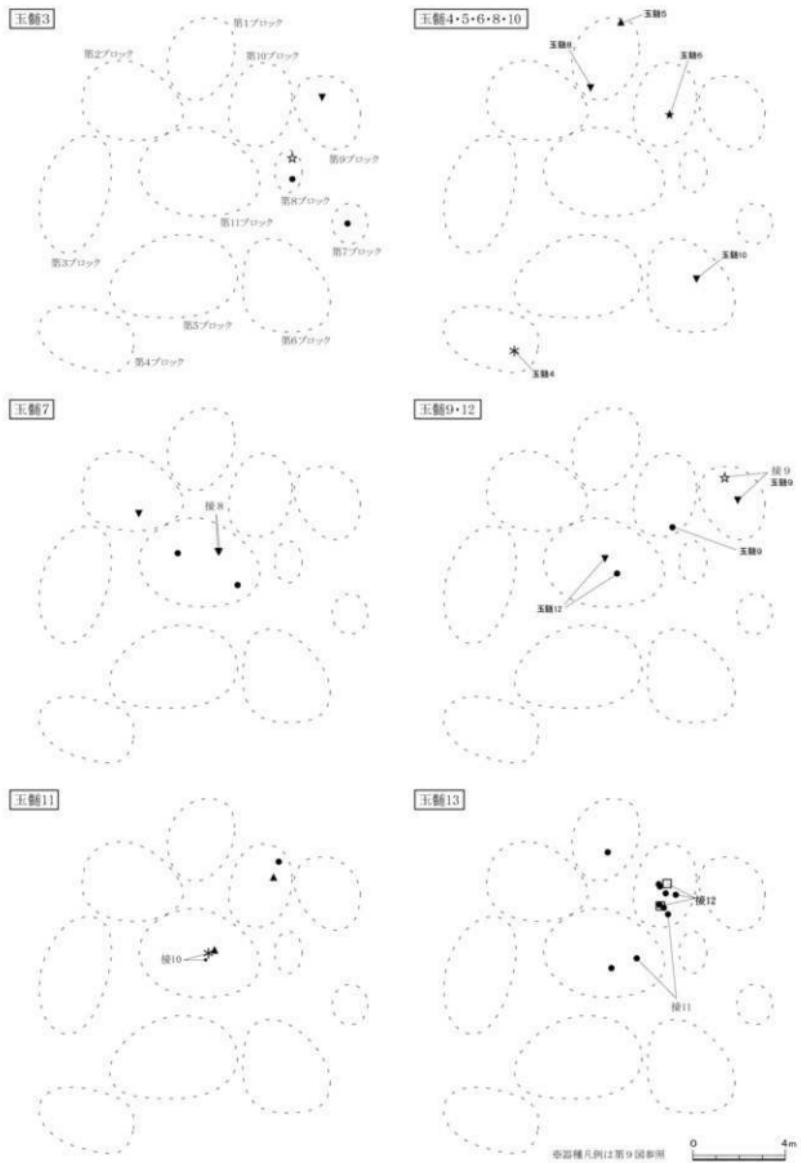
第34図 第1～11ブロック母岩分布状況(1)



第35図 第1～11ブロック母岩分布状況(2)



第36図 第1～11ブロック母岩分布状況(3)



第37図 第1～11ブロック母岩分布状況(4)

程で作出されたもので、剥片39(a+b)が剥離されたのち、一枚以上の剥片、61a、61bが順に剥離、最終的に61cが楔形石器に加工されている。なお、剥離後に加工・使用痕のない緑色凝灰岩1の局部磨製石斧調整剥片10点のうち、磨面の残る51と52の2点を図化した。

玉髓は北東側を中心に分布し、西側の第3ブロックと南側の第5ブロックには分布していない。出土した48点を13の母岩に分けたが、玉髓1～6の19点は橙色がかった白色半透明の剥離面をもち、質感が近似する。この玉髓1～6は大部分が北～東側の外環部に逆U字状に分布し、環央の第11ブロックにはみられない。環央部に分布するのは褐色勝ちで透明感の少ない玉髓7・11～13で、黄玉・赤玉などの碧玉と分類することも可能な石材である。玉髓10はうっすらと橙色を帯びた白色半透明で、長方形の下縁辺に刃部と直交する縦位の磨耗痕が細い帯状となる。剥離の末端形状を活かし、水平な刃部を研ぎ出す加工技術と考えられる。17(玉髓4)や34(玉髓8)と形状が近似し、第6ブロックに1点のみ分布する。玉髓11の二次加工のある剥片2点は長さと幅がほぼ同じで、同じ工程上、連続して剥離されたものと推定されるが、2点間に間隙があり、びたりとは接合しない。表皮の剥落痕は平坦剥離による調整痕の可能性も考えられ、台形様石器とも捉えられよう。玉髓11は玉髓13と同様、環央部の第11ブロックと第10ブロックに多く分布する。玉髓12は環央部の第11ブロックに2点が分布する。1点は薄造りの二等辺三角形で片側縁が切断により整形される。玉髓の分布状況は第36・37図に示した。

なお、第1文化層に帰属する母岩の特徴を第18・19表に示し、図版17では母岩ごとの写真を掲載した。

3 第12ブロック（第38・39図、第15表、図版4・16）

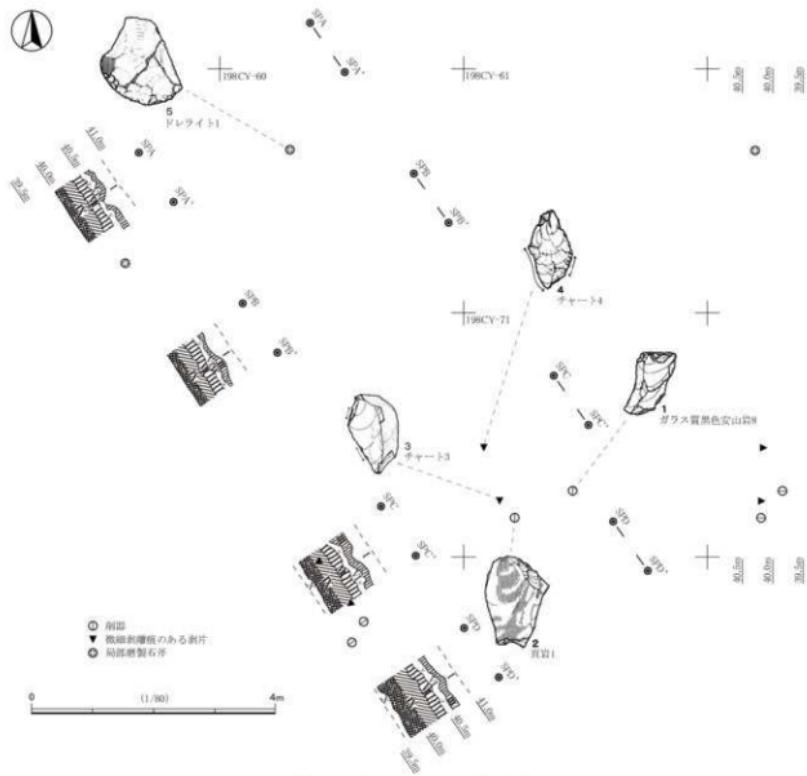
分布状況

石器の出土層位はX層上部～Ⅷ層上部であり、第1～11ブロックよりも若干下位から出土した石器もあるが、器種・石材に共通する要素がみられることなどを検討した結果、同じ文化層に帰属するブロックと判断した。出土点数は5点で、北東に局部磨製石斧1点が分布し、約6m離れて削器・微細剥離痕のある剥片各2点が分布する。石材は4種類で、チャート2点は別母岩であるため、すべて単体での搬入品と推測される。

出土石器

1・2は削器である。1は打面の端部から加撃され、鎌の刃先のような形状である。右側縁は交互剥離、左側縁は緩やかに抉れ、この内湾した部分に潰れ痕がみられる。末端部は夾雜物により欠ける。黒みが強く粘質な感触のガラス質黒色安山岩8を母岩とする。斑晶は欠落するが、斑晶痕の大きさは $\phi 0.2\text{mm} \sim 0.5\text{mm}$ 程度で、含有量は $2 \sim 3/\text{cm}^2$ と少量認められる。2は丸みのある亜角礫を素材とする。分割面のリングは磨耗し光沢を帯びる。右上部の加工は風化剥離面、下部の加工は平坦な自然面から加撃される。この稜上には磨耗痕はみられない。下部に抉れたような凹みがあるが、第11ブロック7の楔形石器や第9ブロック64bの台形様石器にも同様の凹みがあり、紐かけや皮むきなど、なんらかの用途のために意図的に加工されたものと推測される。全体に灰色で明茶褐色の脈が入り、ガジリ部分は漆黒の頁岩1が母岩である。

3・4は微細剥離痕のある剥片である。3は握り拳大の円礫が素材であり、背面に球形の高まりが残される。左側縁の下方2/3は直線状で、微細剥離痕が連なる。押し引きによる刃こぼれか。この縁辺の正面側約0.5mm幅に、筋状の微光沢が8倍ルーペで観察される。母岩はチャート3で、自然面は光沢のある明茶褐色だが、剥離面は緑灰色で光沢はない。4はテニスボールほどの円礫を用い、工程初期に剥離された

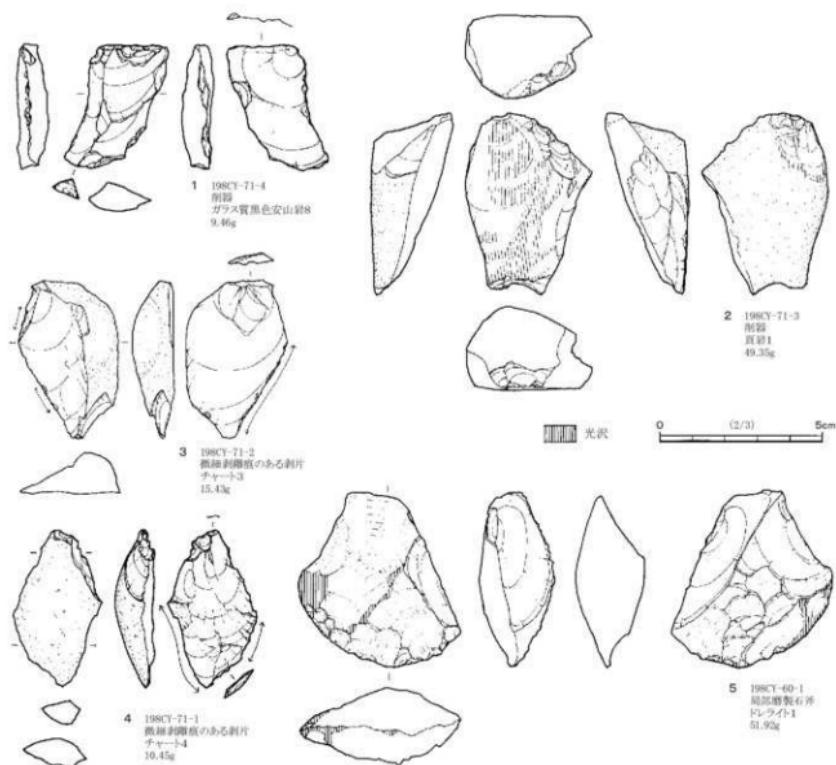


第38図 第12ブロック遺物分布

第15表 第12ブロック組成表

母岩	器種	母岩 番号	削器	微細剥離痕の ある剥片	局部磨製石斧	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	8		1			1	20.00	9.46	6.92
ド レ ラ イ ト	1				1	1	20.00	51.92	38.01
貝 岩	1		1			1	20.00	49.35	36.12
チ ャ ー ト	3			1		1	20.00	15.43	11.29
	4			1		1	20.00	10.45	7.65
チ ャ ー ト 小 計				2		2	40.00	25.88	18.94
合 計			2	2	1	5	100.00	136.61	100.00

自然面の多い剥片が素材である。打点付近から左右の側縁方向へ器厚を減ずるような剥離が施されたのち右下側面を剥離し基部としている。あらかじめ目的とする形状を整えたのちに一撃で剥片剥離が行われており、上部の薄い縁辺には微細剥離痕がめぐるが、一部、折れに中断される。わずかな手間からなる、極めて合理的な作りの刃器である。自然面は濃灰色、剥離面は黒色のチャート4を母岩とする。



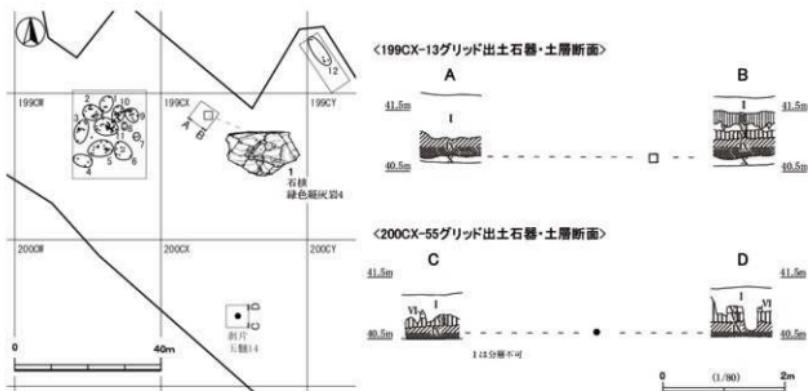
第39図 第12ブロック出土石器

5は局部磨製石斧の刃部である。弧状の両刃で、正面の一部には細かな線状の摩耗光沢が残り、リングの稜線の凹凸を磨り消すような擦痕がみられるが、大きく破損、あるいは剥離されたものの擦痕は観察されない。母岩はドライイト(粗粒玄武岩)1で磁性が強く、持ち重りする。比重は2.90である。

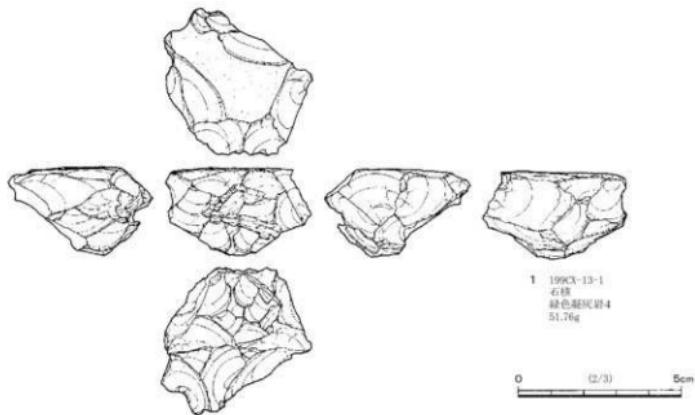
4 単独出土石器（第40・41図、第16表、図版4・16）

単独で出土した石器は2点である。1点は環央の第11ブロックと第12ブロックを結んだ中ほどに分布する緑色凝灰岩製の石核であり、もう1点は第11ブロックから南東に約60m離れた200CX-55グリッドに分布する玉髓の剥片である。共にⅨ層下部に包含され、第1～12ブロックと同一時期の所産と考えられる。2点のうち石核を図化した。

1は求心的な剥離と打面・作業面置換型の剥離作業が行われた石核である。正面図下方の山形のふくらみには多方向の剥離痕が残されているが、高まりを除去するには至っていない。自然面は平滑で濃緑灰色であり、剥離面は緑灰色で細粒である。



第40図 単独出土石器分布



第41図 単独出土石器

第16表 母岩観察表(1)

(「新規土色図」(発行: 日本色研事業株式会社)に準拠)

ブロック	石材	母岩番号	出土点数	合計重量(g)	色相(明度/彩度) 色名			斑晶 色・大きさ 数量/cf	サンプルの 持因番号	器種 (持因番号 凡例参照)	備考	
					自然面	整理面	ガジリ					
3	ガラス質黑色安山岩	1	1	6.61	2.5Y4/2緑灰黄	-	N2/0黒	2.5YS/3黄褐	黄白 粒小粒 微量	RF	ローム付材:ガラス質黑色安山岩 1~4)	
11	ガラス質黑色安山岩	2	2	10.72	2.5YS/4黄褐	-	-	2.5YS/3黄褐	褐 φ0.1mm 微量	PQ		
2,3,5,6,9, 10,11	ガラス質黑色安山岩	3	18	54.10	2.5Y4/1黄灰~ 2.5Y4/2緑灰黄	-	2.5Y2/1 黒	2.5YS/3黄褐~ 2.5Y6/1にぶい黄	黒 φ0.1~2.0mm 僅少	18,19, 56(a+b)	TP,RF	黑色の大型斑晶を含む
5	ガラス質黑色安山岩	4	6	5.03	-	-	N3/0緑灰	2.5YS/3黄褐	黄白 φ0.1mm 微量	FL		
3,5,11	ガラス質黑色安山岩	5	5	6.84	-	-	N2/0黒	2.5YS/2緑灰黄~ 7.5YS/1オリーブ黒	黄白 微細~φ0.2mm 少	FL	被貫 黒色が斑状に混じる	
3	ガラス質黑色安山岩	6	1	0.18	-	-	N3/0緑灰	2.5YS/4黄褐	-	FL		
5	ガラス質黑色安山岩	7	2	26.19	5Y4/2灰オリーブ~ 5Y3/2オリーブ黒	-	-	5Y4/1灰~ 2.5YS/3黄褐	褐 φ0.1~0.2mm 少	3	TP	
4	トロトロ石	1	1	1.31	-	-	10Y4/1灰	10Y7/1灰白~ 10Y8/1灰白	-	FL	灰白色 清らか	
10	トロトロ石	2	1	4.12	-	7.5YR3/3 褐色	10Y4/1灰	2.5Y7/2灰黄~ 2.5Y8/1灰	赤茶 φ1.0~2.5mm 僅少	26	MF	ザラつき トロトロ石より硬質
11	デイサイト	1	2	37.83	2.5YB/2灰黄~ 2.5Y7/1灰白	-	2.5YS/1 黄灰	2.5YB/2灰黄~ 2.5YS/1にぶい黄	濃茶 φ0.1~2.0mm 多(20cmほど)	59(a+b)	MF,OO	磁性あり
5	デイサイト	2	1	1.10	-	-	N3/0緑灰	N5/0灰~N6/0灰	-	FL	磁性あり	
11	安山岩	1	2	1.07	(磨面):10Y6/1灰	-	-	7.5YS/2灰オリーブ	白 φ1.0~2.0mm 8/cf	FL		
9	安山岩	2	1	2.41	2.5YS/4黄褐	2.5Y7/6 明黄褐	2.5Y6/1 黄灰	白 φ1.0~2.0mm 8/cf	PF			
2	流紋岩	1	1	5.57	8Y7/4浅黄~ 7.5YB/2灰オリーブ	-	-	-	色不明 φ1.0~2.0mm 2~3~cf	漂石		
3	墨岩石	1	5	8.06	-	-	-	5PB2/1青黒~ 5PB3/1暗青黒	灰白 φ0.2~1.0mm 6~7~cf	TP,PQ, MF	仙台秋保2群 不透明 青みを 帯びる 粒状 球状の斑晶	
2,5,6,11	墨岩石	2	9	8.66	-	-	-	N15/0黒~N2/0黒	白・黄 針先~φ3.0mm 少	21,42	RF,OO	高麗島甘津沢群 深透明感 あり
3	墨岩石	3	5	1.45	-	-	N2/0黒	N3/0緑灰~N4/0灰	白 φ0.1~0.3mm 5~6~cf	37	FL	仙台秋保2群 不透明 青光沢 濃褐色 濃紺
6	墨岩石	4	1	0.22	-	-	-	5B2/0青黒~ 5B4/0暗青黒	白 φ0.1~0.2mm 僅少	FL	鹿島飛来不可 半透明 灰色の 墨岩	
3	墨岩石	5	2	0.53	-	-	N2/0黒	N2/0黒~ N3/0緑灰	褐 φ0.2mm 僅少	11	PQ	鹿島飛来不可 半透明 くじら うさぎの斑晶 ガジリ透明白高 光灰岩 墓石と被する 光灰岩 墓石と近似
10	蛇紋岩	1	1	0.46	-	-	-	10GB/1緑~ 10G2/1暗黒	-	HO	風化著しく無い	
2,10,11	緑色凝灰岩	1	17	107.60	-	-	10Y4/1灰	2.5GY/1明リーブ灰 ~10Y7/2灰白	-	1.48,51,52, 39(a+b), 61(a~c)	KNPQ, HH,HG	那珂湧石等を素材とする 磁性弱(46) 光沢あり(51,52)
1,11	緑色凝灰岩	2	2	9.92	-	-	N4/0灰	10Y6/1灰	-	53	HO	表面テクス
11	緑色凝灰岩	3	1	6.49	-	10Y5/2 オリーブ灰	-	10Y5/2オリーブ灰	-	12	PQ	微光沢
第1~11 ブロック 新規土	砂岩	1	1	2550.00	(磨面):2.5Y7/3 黄灰	-	-	2.5YS/1黄灰~ 2.5Y8/3淡黄	-	56	AS	表面滑らか 剥離面に黃粉状の 砂粒
5	砂岩	2	1	281.21	2.5YS/1黄灰~ 2.5Y6/3にぶい黄 明黄褐	-	SYR4/8赤褐~ SYR7/6 明黄褐	2.5YS/3にぶい黄~ 2.5Y4/2緑灰黄	-	54	漂石類	
1,2,10	砂岩	3	6	13.39	-	-	N3/0緑灰	N4/0灰	-	38(a+b)	FL	石井たは砂岩を素材とする 墨岩と被る
11	砂岩	4	1	243.12	2.5YS/6黄褐~ 5YS赤褐	-	5YR3/6 赤褐	5YS/2灰オリーブ	-	55	蔽石類	砂岩2と近似
2	砂岩	5	2	3.34	-	-	-	2.5YS/4 赤褐	-	FL	砂岩2と近似	
11	砂岩	6	1	6.60	SYR2/4 緑暗赤褐~ SYR2/1墨黒	-	-	SYR2/6 暗赤褐~ SYR4/7 墨黒	-	PF	被熱 赤褐色	
2	珪質頁岩	1	1	6.68	10YR5/6黄褐	-	-	10YR6/6 黄褐	-	5	SS	
11	珪質頁岩	2	2	1.49	2.5YS/3黄褐	-	-	2.5YS/3 黄褐~ 2.5Y7/3淡黄	-	14,27	PQ,MF	
11	珪質頁岩	3	2	0.53	-	-	-	2.5YS/2 緑灰岩~ 2.5Y4/3 オリーブ褐	-	FL		
11	珪質頁岩	4	1	0.51	-	-	-	2.5YB/2 淡黄~ SYB/1灰	-	FL	反黄色 清らか	

KN(ナイフ石器), TP(台形形石器), SS(砂器), PQ(板形石器), RF(二次加工のある断片), MF(微細剥離層のある断片), FL(剥離), CH(碎片), CO(石核), HK(那珂湧石), HO(高麗島甘津沢群), AS(台石), PW(漂石)

※は新規直根氏(千葉県立中央博物館)の同定による

第3節 大塚台遺跡出土石器の黒曜石原産地推定結果報告

明治大学黒曜石研究センター 池谷信之

1 分析対象資料

千葉県香取郡多古町大塚台遺跡の第2次調査で出土した黒曜石製石器のうち、整理事業担当者が抽出した黒曜石計17点を分析対象とした。分析No.1については整理途上で縄文時代に帰属することが判明したが、それ以外の16点はいずれもⅩ層下部段階に帰属する資料である。なお本遺跡から高原山甘湯沢原産地までは142km、仙台秋保原産地までは283kmの距離がある。

2 分析方法

a. 原産地推定法

蛍光X線分析法は物質にX線を照射したときに、その物質固有の波長をもつX線（蛍光X線）が発生する原理を利用した分析方法である。

原子の周囲には内側から順にK殻・L殻・M殻・・・と呼ばれる軌道（電子殻）があり、外殻側は内殻側に比べより高いエネルギーを有する。原子に照射された一次X線は原子の内殻側の電子をはじき飛ばすが、空席となった場所（空孔）には、外殻側の電子がエネルギーを放出しながら遷移する。このエネルギーが二次X線（蛍光X線）である。軌道間のエネルギー差は原子によって固有であるため、発生した蛍光X線も元素ごとに固有のエネルギー（波長）を有することになる。試料に含まれる元素Aの濃度が高ければ、より多くの蛍光X線aが生じるため（強度として示される）、試料中の元素Aの濃度を求めることが可能となる。

こうした原理を用いた分析法が蛍光X線分析法であり、その機器には「波長分散型」と「エネルギー分散型」がある。後者のエネルギー分散型は波長分散型に比べて分解能が低いものの、完全な非破壊分析であり、測定に要する時間が数分と短いという利点がある。今回の分析に用いた装置は、池谷が所有するSIIナノテクノロジー社製エネルギー分散蛍光X線装置SEA-2110である。

測定条件を次に示す。

電圧：50kV 電流：自動設定 照射径：10mm 測定時間：300sec 霧開気：真空

計測された元素は以下の11元素である。

アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr)

得られた元素の強度を用い、以下の2つの方法によって产地を決定する。

①判別図法（図による产地推定）

測定の結果得られる各元素の蛍光X線強度から以下の4つの指標を計算する。

指標1 Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

指標2 Mn強度×100/Fe強度

指標3 Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

指標4 log(Fe強度/K強度)

指標1・2と指標3・4をそれぞれX軸とY軸とした2つの判別図（第42図左・第42図右）を作成し、原産地黒曜石の散布域とプロットされた遺跡出土黒曜石の位置によって産地を決定する。

②判別分析（多変量解析による産地推定）

判別図法による産地推定結果を検証するために、多変量解析の一手法である判別分析を行う。判別分析では遺跡出土の試料1点ごとに、各原産地との距離（マハラノビス距離）を計算し、試料との距離がもっとも小さい産地がその試料の産地の第1の候補となる。またそれぞれの産地とのマハラノビス距離から、試料が各原産地に属する確率も計算され、その数値が1(100%)に近いほど推定結果の信頼性は高くなる。第20表では紙数の関係から推定候補の第2位までのマハラノビス距離と確率を示した。判別分析と判別図法の結果を総合して最終的な推定産地を決定している。

b. 原産地黒曜石の測定

推定の基準試料となる原産地黒曜石については、以下の産地の原石を収集し測定した。

高原山エリヤ：桜沢

和田(WD)エリヤ：芙蓉ライト・丁子御領・鷹山・小深沢・東餅屋土屋橋・土屋橋北（3地点）・土屋橋東（2地点）・土屋橋西・土屋橋南・鷺ヶ峰・ウツギ沢・古峠・和田峠西

和田(WO)エリヤ：ブドウ沢・牧ヶ沢下・牧ヶ沢上・高松沢・本沢下

諏訪エリヤ：星ヶ台・星ヶ塔・水月靈園・東俣・八島

蓼科エリヤ：麦草峠・麦草峠東・渋ノ湯・冷山・双子池

箱根エリヤ：芦ノ湯・畠宿・黒岩橋・甘酒橋・鍛冶屋・上多賀

天城エリヤ：柏峠

神津島エリヤ：恩馳島・長浜・沢尻・砂糠崎

c. 試料の前処理と測定

原産地試料については、打ち割って平坦な新鮮面を測定した。石器試料については、注記を避けなるべく平坦な部分を対象とし、メラミンフォームで汚れを取り除いて測定した。なお判別図で各判別群の範囲外にプロットされたものについては、洗浄をやり直あるいは注記を除去して再度計測した。この作業を3～5回繰り返してもなお判別群の範囲外に留まったものについては、「不可」とした。

3 分析結果について

原産地推定のための判別図を第42・43図に、資料1点ごとの分析結果を第18表に、分析結果の集計を第19表に示した。

仙台秋保原産地と箱根畠宿原産地は、左右の判別図とも近接した位置にあるため識別が難しく、外観も酷似している。しかし本遺跡で秋保産と判別したものは、特に第42図右側の判別図上でよく纏まって中心付近にプロットされているうえに、表面は風化の影響が比較的少なく、原石固有の化学組成が測定されていると考えられる。この判別結果を検証するために、仙台秋保の原石、近隣の産地である色麻根岸の原石、箱根畠宿の原石を改めて蛍光X線装置を用いて測定し、Zr/Ti・Ca/Kを指標とした散布図を作成して大塚台遺跡出土の秋保産黒曜石と比較した（註1）。この図では箱根畠宿と仙台秋保を明瞭に分離することが可能で、大塚台遺跡出土石器は秋保2群とほぼ一致している。なお分析No.8は第42図の判別図上では秋保2群の分布範囲からやや外れるが、第43図では一致し帰属確率も1.00であることから秋保2群（SDA2）

に含め、第19表の集計にも加えた。したがって本遺跡における秋保（SDA2）産黒曜石は計6点となる。

これに高原山甘湯沢（THAY）産6点を加えた計12点が判別された黒曜石のすべてであるが、不可とされた4点の中に、高原山甘湯沢産の可能性が高いもの2点、箱根産の可能性が高いもの1点、神津島産の可能性が高いもの1点が含まれている。

千葉県内では印西市荒野前遺跡第4文化層（IV下～V層）で仙台秋保産という产地推定結果が望月明彦によって示されたことがあり（註2）、本遺跡は2例目の検出例となる。仙台秋保、高原山甘湯沢という黒曜石の产地構成は、この集団の来歴について極めて貴重な検討材料を提供している。（令和元年 分析）

註

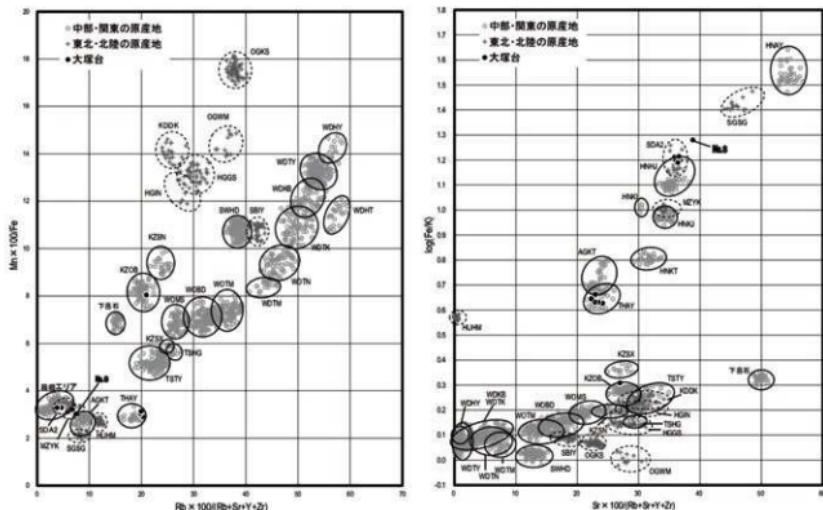
1 この場合の判別ではカリウム（K）やカルシウム（Ca）などが有効であることから、これらの比較的軽い元素をより正確に測定するために、軽元素側（Al～Fe）を15keVに設定し、重元素側（Rb～Y）を通常の測定と同じく50keVに設定した。測定時間はそれぞれ200秒、電流は自動設定とした。

2 千葉県教育振興財團 2012『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXV－印西市荒野前遺跡（下層）－』千葉県教育振興財團調査報告書671

なおこの報文における产地推定結果では「秋保1群」とされている。仙台市秋保産黒曜石は、Fe/Kの比率がやや高く斑晶がめだつ一群と、Fe/Kの比率がやや低く斑晶が比較的小少な一群が存在する。筆者が2003年に望月明彦から提供を受けた判別図では、前者が秋保1群（SDA1）、後者が秋保2群（SDA2）となっていたことから、これに準拠して产地名を付けている（本報告書の判別図では秋保1群は表示していない）。しかし望月が荒野前遺跡報告書に掲載した判別図ではこの両者が逆転している。この間の事情は不明であるが、結果的に望月の秋保1群（SDA1）が筆者の秋保2群（SDA2）に相当するという齟齬が生じていることをお断りしておく。

第18表 大塚台遺跡黒曜石原産地推定結果

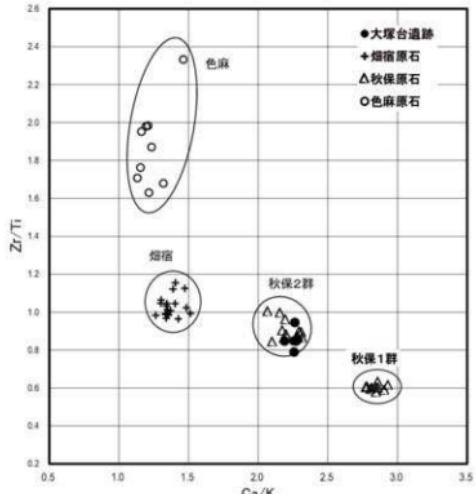
分析番号	出土場	遺物名	文化層	器種	推定産地	判別図		判別分析				Rb%	Mn/Fe	Sr%	Fe/K	
						判別群	候補1	距離1	確率1	候補2	距離2	確率2				
大塚台1	79レ 一括	3	鏡文	FL	KZOB	KZOB	KZOB	2.14	1.00	KZSN	24.42	0.00	20.96	8.04	26.96	2.03
大塚台2	199CW-15(フ)	9	DK?	FL	THAY	THAY	THAY	3.48	1.00	AGKT	157.08	0.00	20.46	3.06	22.95	4.60
大塚台3	199CW-15(フ)	10	DK?	FL	不可	THAY	THAY	7.24	1.00	AGKT	147.09	0.00	19.49	2.97	22.51	3.02
大塚台4	199CW-24(フ)	1	DK?	FL	不可	HMKT	HMKT	38.08	1.00	HNKJ	70.81	0.00	4.67	3.29	36.09	5.42
大塚台5	199CW-24(フ)	2	DK?	TP	SDA2	SDA2	SDA2	4.13	1.00	HNHJ	48.92	0.00	4.73	3.22	35.87	16.28
大塚台6	199CW-24(フ)	3	DK?	PQ	SDA2	SDA2	SDA2	3.89	1.00	HNHJ	44.18	0.00	6.84	3.19	36.02	15.75
大塚台7	199CW-24(フ)	4	DK?	M	SDA2	SDA2	SDA2	2.39	1.00	HNHJ	42.24	0.00	4.68	3.24	36.81	15.81
大塚台8	199CW-24(フ)	5	DK?	PQ	(SDA2)	SDA2	SDA2	75.04	1.00	HNHJ	173.71	0.00	7.44	3.02	38.83	19.05
大塚台9	199CW-24(フ)	6	DK?	PQ	不可	THAY	THAY	15.79	1.00	AGKT	161.57	0.00	19.66	3.16	21.98	2.43
大塚台10	199CW-24(フ)	9	DK?	FL	SDA2	SDA2	SDA2	5.87	1.00	HNHJ	27.78	0.00	4.67	3.28	36.38	15.47
大塚台11	199CW-24(フ)	10	DK?	FL	SDA2	SDA2	SDA2	5.82	1.00	HNHJ	47.44	0.00	3.82	3.28	36.57	16.38
大塚台12	199CW-25(フ)	4	DK?	FL	THAY	THAY	THAY	5.43	1.00	TSTY	136.03	0.00	20.17	3.19	24.12	4.24
大塚台13	199CW-26(フ)	14	DK?	FL	THAY	THAY	THAY	2.64	1.00	AGKT	131.95	0.00	19.90	3.00	22.28	4.42
大塚台14	199CW-36(フ)	7	DK?	FL	THAY	THAY	THAY	2.89	1.00	AGKT	160.28	0.00	20.28	2.90	23.41	4.28
大塚台15	199CW-36(フ)	8	DK?	FL	不可	KZOB	KZOB	4.75	1.00	KZSN	41.31	0.00	20.45	7.77	20.38	1.38
大塚台16	199CW-37(フ)	1a	DK?	FL	THAY	THAY	THAY	3.42	1.00	AGKT	155.19	0.00	19.74	3.03	22.87	4.29
大塚台17	199CW-46(フ)	1	DK?	CO	THAY	THAY	THAY	4.56	1.00	AGKT	129.33	0.00	19.93	3.13	22.28	4.41



第42図 大塚台遺跡黒曜石原産地推定判別図

第19表 大塚台遺跡黒曜石原産地推定
集計表(旧石器時代のみ)

エリア	別群群	記号	試料数	%
フヨーライト		WDHY	0	0.0
黒山		WDTY	0	0.0
小深沢		WDRB	0	0.0
和田(WD)	玉置橋北	WDTK	0	0.0
	玉置橋西	WDTN	0	0.0
	玉置橋南	WDTM	0	0.0
古崎		WDHT	0	0.0
高松沢		WDTM	0	0.0
和田(WO)	ブツラ沢	WDRD	0	0.0
	蟹ヶ沢	WDRS	0	0.0
津訪		SWHD	0	0.0
豊利		TSTY	0	0.0
若山		TSHG	0	0.0
天城		AGKT	0	0.0
柏崎		HHKU	0	0.0
白根		HHKJ	0	0.0
葛尾		HNKJ	0	0.0
萩根		HNKT	0	0.0
	上多賀	HNKT	0	0.0
	芦ノ瀬	HNAY	0	0.0
足利島		KZOB	0	0.0
	谷郷崎	KZSN	0	0.0
神津島		KZSK	0	0.0
	谷郷崎K	KZSK	0	0.0
高唐山	甘通沢	THAY	6	50.0
新發田	坂山	SBY	0	0.0
羽黑	月山	HGS	0	0.0
	今川	HGS	0	0.0
仙台	秋保2群	SDAZ	8	50.0
塙剛	塙剛港群	SOSQ	0	0.0
宮崎	湯ノ曾	MZYK	0	0.0
男鹿	豊ヶ崎	DGKS	0	0.0
	船木	DGWM	0	0.0
深浦	八森山	HJHM	0	0.0
	木道	KDK	0	0.0
	合計		12	100.0
	不詳		4	
	非黒曜石		0	
	計		16	



第43図 大塚台遺跡における仙台秋保原産地と箱根烟宿原産地の判別

第3章 縄文時代以降

第1節 縄文時代

1 概要（第3図）

大塚台遺跡では、縄文時代に属する遺構として、(1)の調査区において陥穴が1基（SK001）、(3)の調査区において縄文時代と考えられる炉穴6基（SK016～SK021）が検出されている。さらに、(2)の調査区において遺構は伴わないが遺物集中地点が1か所検出されている。

2 遺構

(1) SK001（第44図、図版2）

調査区西端の198CV-90・91グリッドに所在する。平面形は長楕円形で、上端の掘り方の規模は長軸250m × 短軸130m、深さ1.90mで、底面は長軸2.20m × 短軸0.20mである。底面から0.70mほどの高さのところで、長軸側で外に張り出している。

(3) SK016（第44図、図版13）

203CZ-98グリッドに位置する。掘り方規模は0.40m～0.48m、確認面から底面までの深さは0.16mである。覆土中には焼土粒を多く含む。

(3) SK017・018・019（第44図、図版13）

204CZ-08・09グリッドに位置し、3基がかたまって検出された。

SK017は直径0.50m～0.60m、確認面から底面までの深さ0.20mの円形の掘り方である。SK018は直径0.55m～0.60m、確認面から底面までの深さ0.20mの円形の掘り方である。SK019は直径0.55m～0.60m、確認面から底面までの深さ0.15mの円形の掘り方である。いずれの土坑の覆土にも焼土粒が含まれており、特にSK018の覆土は多めの焼土粒を含んでいたが、いわゆる炉床のような焼け方をしている面はどちらも確認できなかった。

(3) SK020（第44図、図版13）

204CZ-07グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、掘り方の規模は0.35m × 0.75m、確認面から底面までの深さは0.05mという浅い掘り込みであった。覆土中には焼土粒を多く含む。

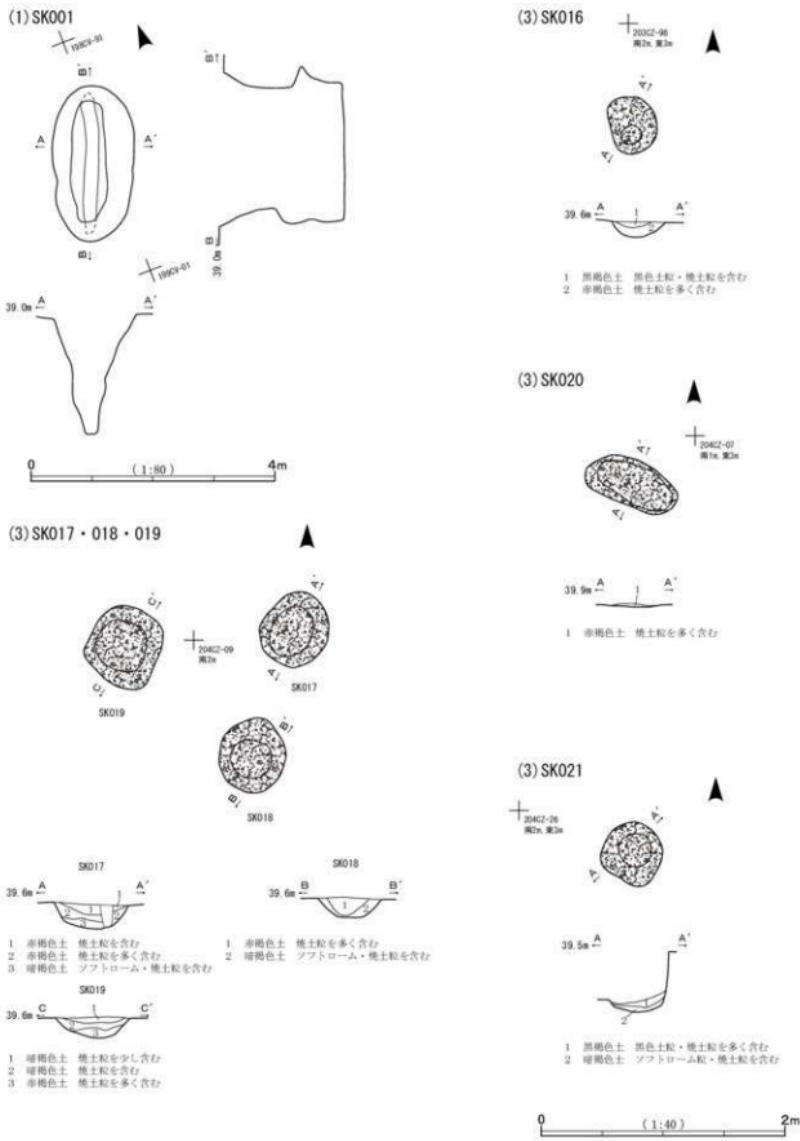
(3) SK021（第44図、図版13）

204CZ-26・27グリッドに位置する。平面形は円形で、掘り方の規模は0.50m、確認面から底面までの深さは0.10mという浅い掘り込みである。覆土中には焼土粒を多く含む。

3 遺物

(1) 遺構外出土縄文土器（第45図、図版18）

1、2は早期撫糸文系土器である。いずれも撫糸文がほぼ継位に施され、稻荷台式に比定される可能性が高い。3は明確な文様がないが、胎土に纖維を含み、縄文時代前期中葉の破片かと思われる。4は浮島式の口縁部破片である。口縁直下に幅広の半截竹管状工具の先端による押引き沈線が巡り、その下には先端の鋭い工具による斜行沈線が連続する。5は外面全体にL R縄文が横位に施される破片で、それらに



第44図 繩文時代遺構

伴う結節文が2段巡っている。縄文前期末に位置づけられる。

(2) 遺物集中地点及び遺構外出土縄文土器 (第45・46図、図版18・19)

縄文時代早期を主体とした遺物包含層とその周辺から出土したものである。1~12は撫糸文系土器で、1は口縁部が強く肥厚、外反し、口唇外縁にL R 縄文を縦位に施文する。胴部は、口縁直下のみ L R 縄文を横位に、以下条が綴になるように斜位施文している。口唇上面や内面に縄文が施されないことから、井草II式に比定される。2~4は口縁部破片で、2、3にはわずかに外反する口唇部に縄文が施されている。4は口唇部への施文は認められず、以下細かい撫糸文が縦位に施される。胴部破片では、5~9が縄文、10~12が撫糸文を施している。2以下については、全体的には夏島式前後の位置づけが与えられる可能性があるが、一括性は不明である。

13~41は条痕文系土器で、13~23が口縁部破片である。13は口唇部に絡条体による押捺が施されて深い刻目が巡り、外面には刺突列が山形に施文されている。茅山上層式に比定される。14~18も口唇部に刻目が巡る。刻目の原体は、14が先端の鋭い工具による刺突、15~18は貝殻腹縁によると思われる。表裏に貝殻条痕が施されることが多いが、23、28、29、31は内外面とも削り、ナデ調整のみの破片である。30には幅1cmほどの隆帯が垂下し、その上に縄文が施されている。これらは、いずれも胎土への纖維の含有量は比較的少ない。

42~46は前期中葉、黒浜式に位置づけられる土器片である。胎土に纖維を含み、42、44、45には半截竹管状工具による施文がみられる。43は破片全体に無節縄文が施されている。

47~57は前期後葉、浮島式に位置づけられる土器片である。47~49は口縁部破片で、47、49の口縁直下またはそのやや下に半截竹管状工具による密な沈線が縦位に施され、半截竹管状工具による横位の沈線と組み合わせる。同様の横位沈線は、50、51、52、54にもみられる。48、51、53には、幅の広い半截竹管状工具による押引きを用いて、細かい波状沈線が施される。55、56は貝殻腹縁による浮島式特有の波状貝殻文が施されている。

58~61は前期末に位置づけられると思われる縄文施文の土器片である。58は折り返し状の複合口縁をもつ。59~61の縄文はいずれも無節である。

62、63は中期初頭、五領ヶ台式に位置づけられる土器片である。62は口縁外面に隆帯が貼り付けられ、外面には縦位の細かい沈線が施され、上面は平滑に面取りされている。その下は、斜行する沈線と円形の沈線が主な文様構成となり、その間を細い棒状工具による密な沈線と、主文様を描くのと同じ工具による押引沈線によって埋めている。

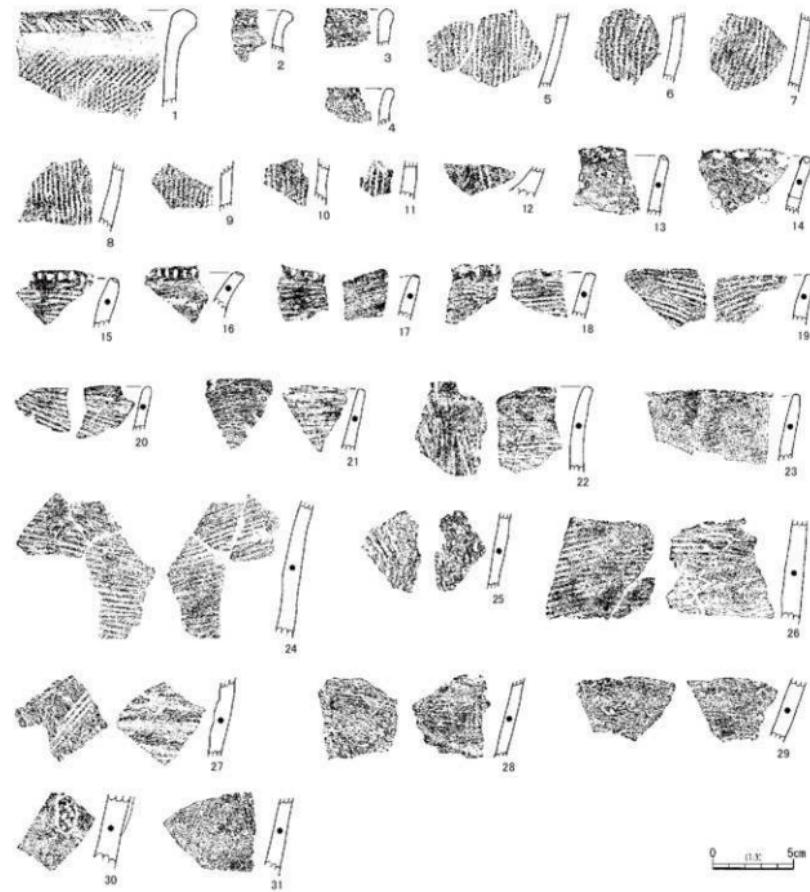
64~67は中期後葉、加曾利E式に位置づけられる土器片である。いずれも小片のため細かい時期比定は困難であるが、64には低い隆帯が、65には文様帶を区画する横位沈線と縦位施文のL R 縄文が、66には垂下する沈線と縦位施文のR L 縄文が観察される。

68~71は後期中葉、堀之内1式に位置づけられる土器片である。68は口縁部に沈線が巡り、右端部に円形の刺突文が認められる。69、70は数条単位で斜行する沈線で文様を描く。70には文様帶を区画するような水平な沈線も巡る。71は縦位の垂直な沈線と波状の沈線の組み合わせとなる。

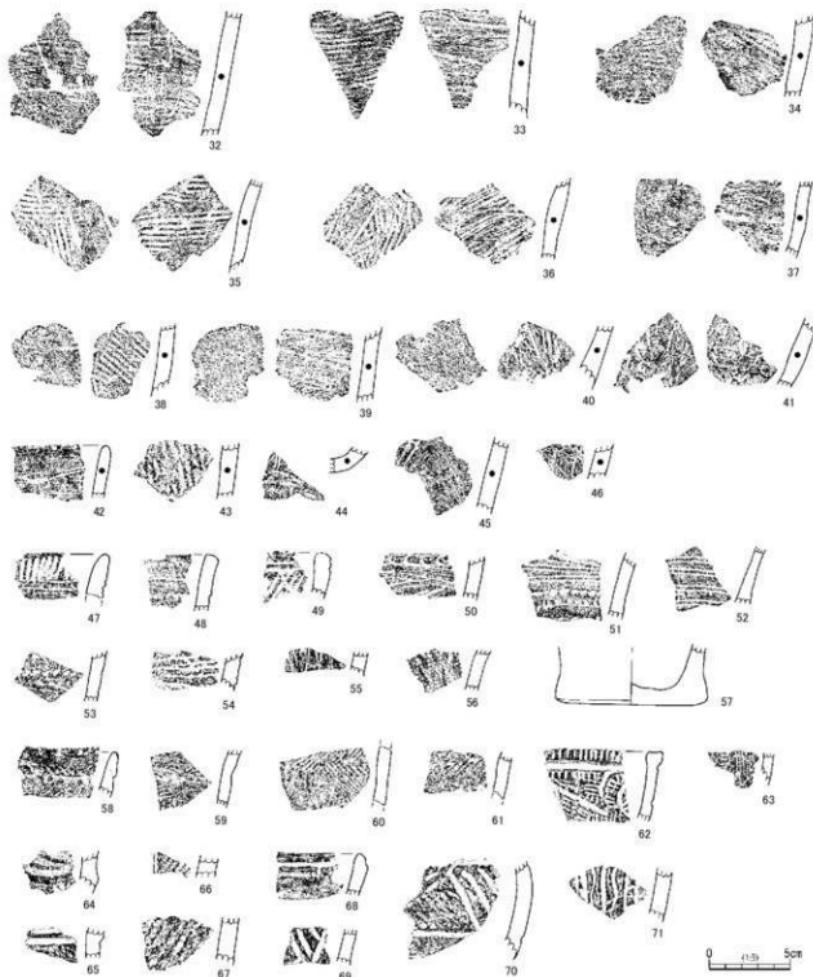
(1) 遺構外



(2) 遺物集中地點及び遺構外



第45図 繩文土器①

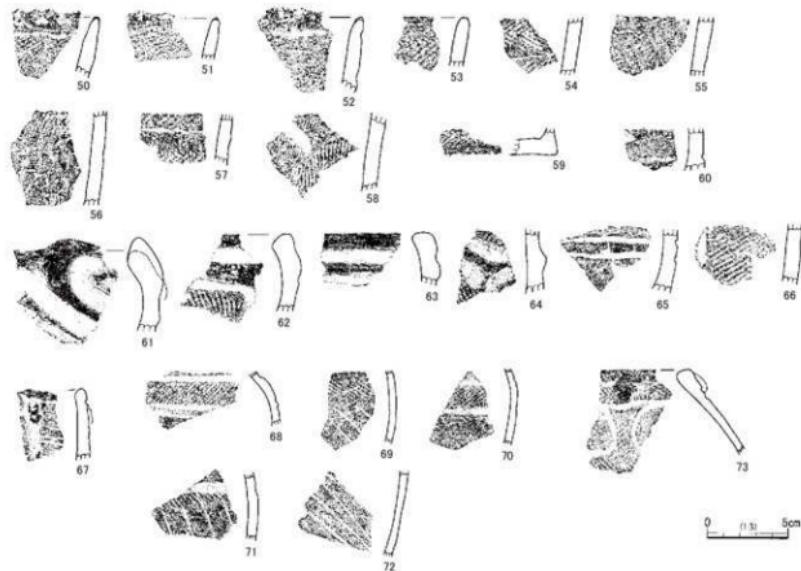


第46図 縄文土器②

(3) 遺構外



第47図 縄文土器③



第48図 繩文土器④

(3) 遺構外出土縄文土器 (第47・48図、図版19・20)

1~13は早期条痕文系土器である。2~6は口縁部破片で、5を除き口唇部に深い刻目を巡らせている。2の外面には横位に列点が施されている。1、7、9~11、13の内外面には貝殻条痕が施され、他は削りまたはナデ調整で仕上げられている。

14~48は前期後葉、浮島式に位置づけられる土器である。14、15、29~33は、斜行する沈線によって文様が構成される。14は口縁部で、口縁直下に半截竹管状工具による沈線が巡る。他の破片も、沈線には半截竹管状工具が使われている。口縁部破片16、17も同様であるが、工具の上下を交互に押引きすることで、細かい波状を呈している。また、17には変形爪形文も認められる。18~20及び23は口縁部破片で、口唇部外面には短い綾位の沈線を巡らせ、以下三角文を平行に巡らせている。24~27も同様の土器の胴部破片で、多くは同一個体である可能性がある。21、22は折り返し状のわざかな段をもつ口縁部破片で、段部分に竹管の背で連続的に押捺を加えている。34~36は変形爪形文をもつ破片である。34は平行沈線、35は結節文、36は波状貝殻文が併用されており、後者2点は同一個体と思われる。36~47は波状貝殻文を施す破片である。

50~58は前期末に位置づけられる土器片である。横位の羽状縄文や結節文がみられる。縄文は多くが単節であるが、58のみ無節縄文が使われる。

59~66は中期の土器片である。59は五領ヶ台式と思われる底部破片、60は角押文が施される阿玉台式の

破片である。61～66は加曾利E式の土器片で、64までの降帯、縄文区画をみると加曾利EⅢ式からEⅣ式を主体とすると思われる。

67～73は後期から晩期の土器片である。67は堀之内式の口縁部で弱い波状口縁を呈すると思われ、波頂部直下に八の字浮文が認められる。68～72は後期安行式の帶縄文系土器とそれらに伴う粗製土器である。73は、内湾する口縁部をもち、肥厚する口縁部外面にはR L縄文が施され、その下位に枠状文が描かれる。安行3 b式に比定される。

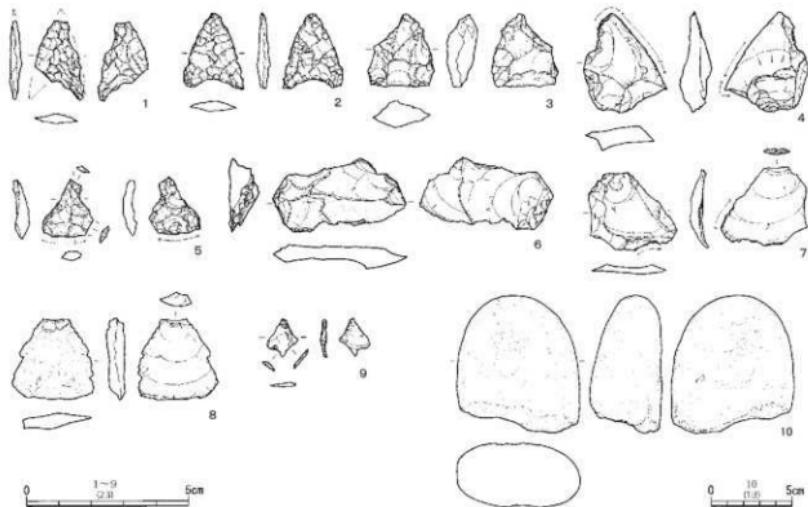
石器（第49図、第20表、図版21）

遺構外から出土した縄文時代の石器10点を図化した。いずれも単独出土のため、詳細な時期は不明である。

1～5は石鎚・石鏃未成品・石匙である。1は薄型で二等辺三角形の凹基鎚で、先端、左脚部は欠損する。右側縁にはところどころガジリ（新欠）がみられる。石材はガラス質黒色安山岩で、強い磁性がある。2は各端部が欠損した石鎚である。縁辺から斜め下方に向かう剥離痕が並列する。濃い緑灰色で不透明なチャート製である。3、4はチャート製の石鏃未成品である。3の右側縁に微細な刃こぼれが連なることから、石鎚製作途中で器厚が失われたため刃器に変更、利用された可能性がある。また、両端部を含む右側縁には磨り光沢が看取される。刃部を下に据えて持つと指に刺じむ。黒色だが、右下端部は半透明の石英質である。4は厚みのある三角形状で節理折れがみられる。5は石匙である。右端部は欠損し、下縁辺に微細剥離痕がみられる。握り部の先端は夾雜物による折れが生じている。透明な部分と青みのある黒色部分とが縞状にみられる良質な黒曜石を素材とする。

6～9は剥片類である。6の左縁辺には背腹両面に、右側縁は鋭い縁辺を潰すような加工が施された二次加工のある剥片である。縁色を帯びた黒色のチャートで、自然面は褐灰色である。7は微細剥離痕のある剥片である。複剥離打面をもち、打面直下には庇が形成される。打面は対縁に比してごく小さく、器厚は薄い。背面に残る剥離痕からは、同一打面から連続して剥離されたことが読み取れる。厚みのない板状の剥片であるが、縁辺はさらに薄く、右端部には微細剥離痕がみられる。8、9は剥片である。8は原石の一端を削いで打面とし、背面に自然面を多く残す工程初期の剥片である。石鎚の素材となり得るような三角形状を呈するが、厚みが不均一のために未加工のまま残されたと推定される。剥離面は懐胎色で、橙色の点状紋を含む。9は石鎚や石匙などを調整する際に剥離された薄く小さな剥片で、左右の下端部と打点は欠損している。無色透明部分と黒色部分とが明確に二分された黒曜石製であり、含有元素による原産地分析の結果、神津島恩馳島産と推定された。^{よしむら}5も同様の特徴を有しており、同じ産地の可能性がある。6、7、8の石材はチャートである。

10は両平坦面中央部に弱い凹みがみられる凹石である。折面、棱とも摩耗著しいことから、遺跡内で破損したものではなく、下部が欠損した状態で搬入され、凹石として利用されたものと推定される。石基は青みを帯びた灰色、斑晶は黒色で角張っており、ずっしりとした質感の安山岩である。



第49図 繩文時代石器

第20表 繩文時代石器観察表

博団	図版	番号	調査次	出土地点	遺物 番号	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
49	21	1	(2)	1T	1	石鏃	ガラス質黒色安山岩	24.85	15.23	3.61	0.99	先端・片側欠損
49	21	2	(2)	49T	2	石鏃	チャート	23.24	18.63	3.98	1.24	斜並行剥離
49	21	3	(2)	8LT	1	石鏃未成品	チャート	23.05	20.76	9.61	3.61	
49	21	4	(2)	202CY-36	2	石鏃未成品	チャート	30.95	25.42	9.98	5.08	右縁辺に磨光沢
49	21	5	(2)	61T	2	石鏃	黒曜石	17.99	15.91	4.64	0.88	右端部欠損
49	21	6	(3)	204DA-21	2	二次加工のある剥片	チャート	22.68	41.27	9.35	4.92	石鏃の素材か
49	21	7	(3)	SI006	3	微細剥離痕のある剥片	チャート	24.07	26.95	5.61	1.72	
49	21	8	(3)	204CZ-28	29	剥片	チャート	25.08	25.32	5.59	3.60	
49	21	9	(2)	79T	3	剥片	黒曜石	11.91	9.72	1.48	0.08	神津島恩賜鳥塗
49	21	10	(3)	2T	2	四石	安山岩	84.81	75.10	44.08	390.35	表面に浅い凹み

第2節 古墳時代

1 概要（第3図）

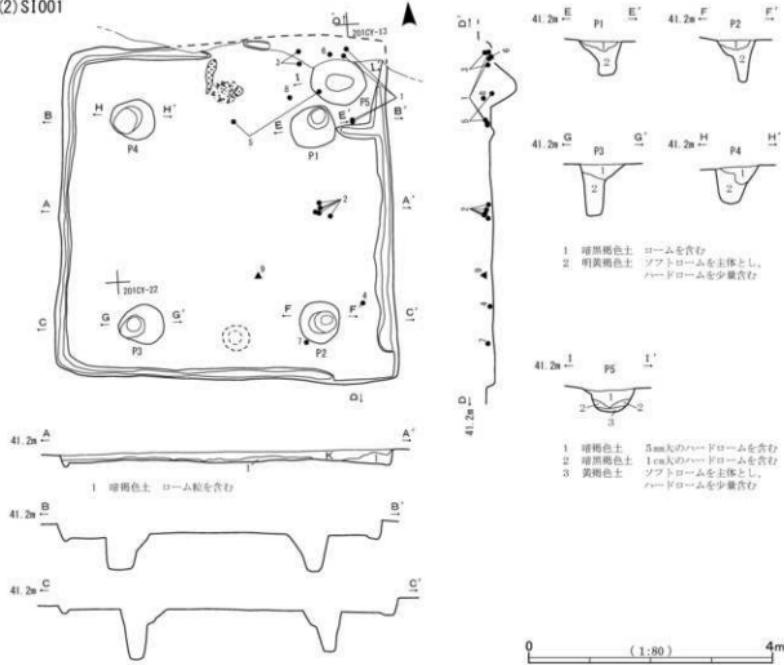
古墳時代の遺構としては、調査区の東寄りの(2)の調査区の地点で、2棟の竪穴建物跡が検出されている。

2 竪穴建物跡 遺構・遺物

(2) SI001（第50・51図、第21表、図版5・22）

遺構 調査区東寄りの201CY-11・12・13・21・22・23グリッドに位置しており、北東壁付近の一部が壊乱によって壊されている。平面形はほぼ正方形で、掘り方規模は南北が約5.40m、東西は5.30m～5.70m

(2) SI001



第50図 (2) SI001



第51図 (2) SI001出土遺物

を測り、確認面から床面までの深さは0.10m～0.25mである。カマドは北壁中央にはほとんど残骸のような状態で火床部のみが確認され、建物の主軸方位はN-3°-Eである。床面には主柱穴が4基確認されており、掘り方規模は0.60m～0.70m、深さは0.50m～0.80mである。この他に床面北東隅には貯蔵穴と考えられる掘り込みがあり、掘り方規模は0.90m×0.70m、深さ0.40mである。また、壁溝はカマド周辺と南東隅を除きほぼ全周している。また、北東隅の主柱穴から東側の壁溝には間仕切り溝と考えられる掘り込みが設けられている。

遺物の出土状況については、掘り込みの浅い遺構から検出されていることから、みな床面直上と考えてよいと思われる。

遺物 1～3は身の深い土師器杯である。1の外面にはミガキが施されておらず、内面にのみ放射暗文様のミガキが施されている。2は内外面のほぼ全面にミガキが施されており、図に示したとおり外面下半部に明瞭な色調の境目があることから、それより上の部分には漆樹脂の塗布が施されているものと考えられる。3は底部がほぼ平底で、口縁部と胴部の間に明瞭な稜線がある、杯と小型鉢の中間のような器形である。内面にはミガキが施されているが、全体に内面の器面調整は粗雑である。4、5は口径に比してさらに身が深く平底であり、口縁部と胴部の境に明瞭な稜線があり、小型鉢と呼ぶべき器形と考えられる。4は器肉が厚ぼったくて重く、外面全面に赤彩が施されており、内面は黒色処理である。5は4に比べて薄手で、シャープで丁寧なつくりである。底部を欠失しているが、器形的には4と同様であったと考えられる。6は須恵器杯身模倣の土師器杯である。口縁部外面には、漆と思われる塗膜が部分的に残っており、漆塗りが施されていた可能性がある。内面には漆塗膜は見えないが光沢のある灰褐色であることから、いわゆる漆仕上げのような樹脂処理が施されているものと考えられる。

7は土師器瓶である。最大径は口唇部にあり、遺存部分の胴部はほぼ直線的な傾きであるが、底部で窄む砲弾型の器形であると考えられる。口縁部と胴部の境に低い凸帯様の明瞭な境目があり、胴部外面のケズリは斜方向である点がかなり特殊である。内面には全体に丁寧なミガキが施されている。8は土師器壺の底部片である。焼成は比較的硬質であるが底部内面の劣化が進んでおり、器面が剥離している部分がある。9は凝灰岩製の砥石である。現存全長：48mm、幅：20mm、厚：9mmという小さなものである。基部に径4mmほどの円孔が開けられており、紐を通した痕跡がある。いわゆる提紙として携帯されたものと考えられる。研ぎ減りでかなり小さくなっている。

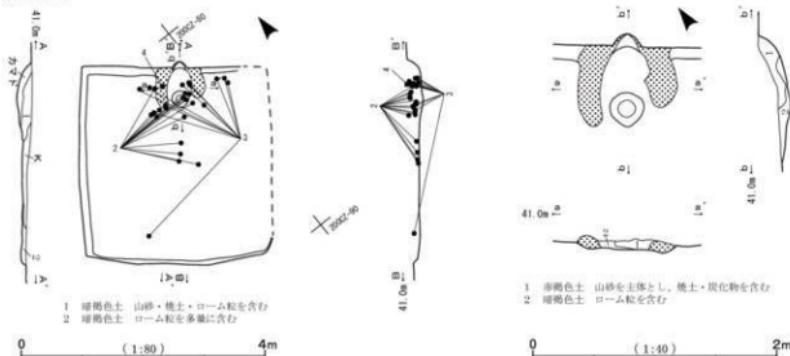
帰属時期は7世紀第1四半期と考えられる。

(2)SI002（第52・53図、第21表、図版5・22）

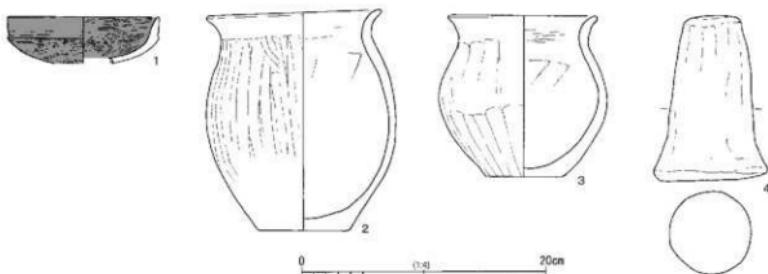
遺構 調査区東端の200CY-79・89、200CZ-80グリッドに位置しており、南東壁及び周辺の床は擾乱などで壊されており、確認することができなかった。掘り方規模は3.10m～3.20mのほぼ正方形で、確認面から床面までの深さは0.06m～0.16mで、遺存状況は極めて悪かった。カマドは北東壁のほぼ中央に設けられており、建物の主軸方位はN-37°-Eである。床面には主柱穴は掘り込まれておらず、壁溝も設けられていなかった。カマドは両袖の山砂と火床面を確認することができた程度である。

遺物の出土状況については、(2)SI001同様に掘り込みの浅い遺構から検出されていることから、みな床面直上と考えてよいと思われる。

(2) SI002



第52図 (2) SI002



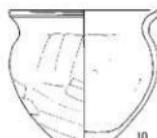
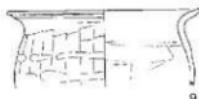
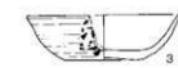
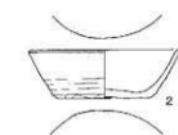
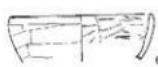
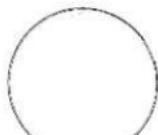
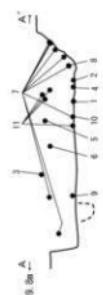
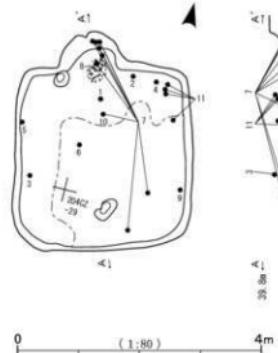
第53図 (2) SI002出土遺物

遺物 1は須恵器杯蓋模倣の土師器杯である。口縁部外面は横ナデのみ、それ以外の部位は丁寧なミガキが施されており、内外面は黒色処理で黒光りがしている。2、3は土師器壺である。いずれも壺としては小振りのものである。2はやや細長い器形で、焼成は良好であるが内面の劣化が進んでおり、器面の剥離、更には剥離部分の胎土がボロボロになるという劣化が見られる。3は丸味の強い器形の壺である。厚ぼったいつくりで、大きさに比べてかなり重く感じる個体である。4はカマドで用いる支脚である。全体に砂っぽい胎土である。素地の表面には植物の茎などが多くなりの量で練りこまれており、焼成により表面にその圧痕がきれいに残っている。

帰属時期は6世紀第4四半期と考えられる。

(3) SI001

+
204G2-19



0 (1:20) 20cm

第54図 (3)SI001

3は体部外面に正位の墨書が二字見える。欠損部分にかかっていることと墨痕が薄いため、一字目は偏が「**ト**」、旁は不明、二字目は「**ヒ**カ」と読める程度である。内面の底部周縁部は剥離劣化が進んでいる。4、5は須恵器杯である。4は外面とともに黒褐色で、胎土中の微石粒が器表面全体に浮き出ている。底部外面には「×」字状のヘラ書きが見られる。5は全体で30%程度の残存破片からの復原実測である。破損後に被熱したと考えられ、破片によって色調が全く異なる。胎土は4と同じで、ともに千葉市緑区の南河原坂窯産と考えられる。6は土師器杯である。外面は手持ちヘラケズリ、内面は乱雑なミガキで調整されている。

7～10は土師器壺である。7が最も大きく、8、9が中間的な大きさ、10が小型の壺である。7～9は長胴型の器形で、10は胴が短く丸味を帯びた器形である。調整技法はいずれも同じで、口縁部は内外面横ナデ、胴部は内面が横方向のヘラナデ、外側が上位は縱方向の、下位は横方向のヘラケズリである。10は胴部内面中位辺りの器面が摩耗し劣化が進んでいる。11は底部を欠失しているため断定はできないが壺と考えられる。胎土から4、5と同じ南河原坂窯産の須恵器と考えられる。胴部外側は縱方向の平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。胴部内面上端の部分に細かいロクロナデの横線が見える。

帰属時期は8世紀後半期と考えられる。

(3) SI002a・b (第56・57図、第22表、図版8・23)

遺構 204DA-30グリッドに位置する。SK001によって部分的に壊されている。当該堅穴建物跡は、外側の一回り大きくて一段浅い掘り込みの堅穴建物跡と、その内側の一段深い掘り込みの堅穴建物跡とが重複していると考えられ、一段深い掘り込みの方をSI002a、浅い掘り込みの方をSI002bとした。発掘調査の段階においては、SI002bの方が古く、SI002aの方が新しいと判断した。

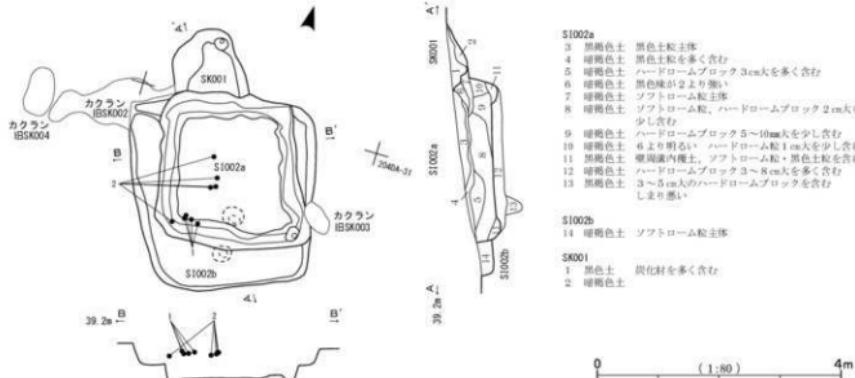
SI002bの掘り方の規模は、南北3.20m～2.90m、東西3.10m～2.50m、主軸はN-19°-Wで、確認面から床面までの深さは最も浅い北東側で0.17m、最も深い北西側で0.34mである。西側の床面には硬化面が残っていた。南側床面のSI002aの南壁にかかる部分で入口ピットと思われる掘り込みが確認された。主柱穴は確認されなかった。また、カマドは痕跡も確認されなかった。

SI002aの掘り方の規模は、南北2.10m、東西2.50m～2.10mで、平面形は歪んだ方形である。主軸は、歪んだ掘り込みの中軸線をとると、SI002bと同じN-19°-Wであるが、南壁・北壁とは直交する西壁のラインをとると、N-10°-Wである。確認面から床面までの深さは、最も深い北側で0.60m、最も浅い南側で0.25mである。壁溝がほぼ全周しており、南東隅に深さ0.25mほどの柱穴様の掘り込みがある。床面はほぼ全面に硬化面が広がっており、南壁際に深さ0.40mほどの入口ピットと思われる掘り込みが確認された。カマドは北壁側に築かれていたものと考えられるが、痕跡さえも確認できなかった。また、主柱穴も確認されなかった。

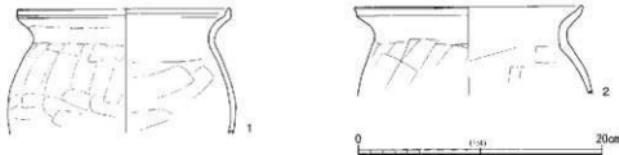
なお、図化した遺物は2点とも時期が新しいと考えられるSI002aの掘り方の範囲内から出土しているが、その出土レベルはみなSI002bの床面レベルよりも上である。試みに、掲載に至らなかつた他の破片資料も調べたところ、95%以上の遺物はSI002bの床面レベルから上で検出されていた。このことから、SI002aとSI002bの前後関係は、発掘調査時の認識とは逆であった可能性も考えられる。

遺物 1、2ともに土師器壺である。器形はよく似ており、調整技法は口縁部が内外面横ナデ、胴部外側は上位が縱方向のヘラケズリ、中位以下は該当部分の残っている1では横方向のヘラケズリ、内面は横方

(3) SI002a・b, SK001



第56図 (3) SI002a・b, SK001



第57図 (3) SI002a・b出土遺物

向のヘラナデと2個体ともには共通である。ただし、2は内外面ともにぶい褐色で、かなり白っぽい焼き上がりになっている。

出土土器が土師器壺のみであるため時期の判別が難しいが、8世紀第4四半期以後と考えられる。

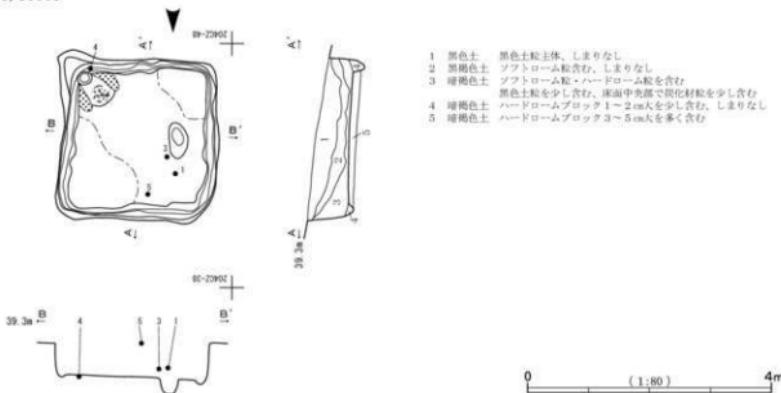
(3) SI003 (第58・59図、第22表、図版8・24)

遺構 上層本調査区域南端の204CZ-38グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形はほぼ正方形で、掘り方の規模は南北、東西ともに260mで、確認面からの掘り込みの深さは北壁側で0.75m、南壁側で0.35mである。南東の隅にカマドを設けるいわゆる隅カマドの堅穴建物跡である。したがってカマドを建物の主軸線上に置くと、他の建物跡との比較ができないので東西壁の中軸線を建物の主軸として計測するとN-9°-Eとなる。カマドはほぼ壊された状態で確認され、火床部と両袖の基部のみが確認された。壁溝が全周し、北東部と南西部の床面が硬化している。西壁際の床面から楕円形の掘り込みが検出され、入口ピットかと考えられる。主柱穴は確認できなかった。

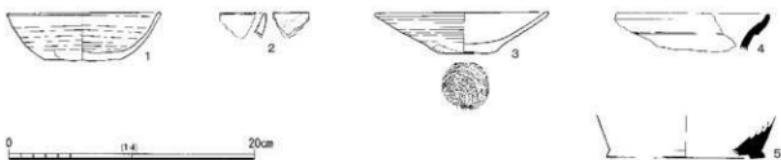
遺物は、4がカマド内、1と3が北西壁に近いところで床面直上の検出である。

遺物 1はロクロ土師器杯である。硬質な焼き上がりで、内外面に細かく強いロクロ目が残る。回転糸切

(3) SI003



第58図 (3) SI003



第59図 (3) SI003出土遺物

りの後に、体部外面下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを行っている。体部外面の広い範囲に黒ずみが見えるが成因は不明である。2は土師器杯の口縁部の小破片である。破片内面全体にべったりと油煙煤が付着しており、灯明皿として使用されていたものと考えられる。3はロクロ土師器の無高台の皿である。回転糸切りの後に、体部外面下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリで斜めに削ぎ落としている。内面は全体に黒ずんでいるが、外面は灰黄褐色で全体に白っぽい焼き上がりである。4は須恵器壺の口縁部破片資料である。口縁部は貼り付け有段口縁で、内面が受け口状になっている。胎土中の微細粒が多く器表面に浮き出ていることから、千葉市緑区の南河原坂窯産である可能性が高い。5は東海産の灰釉陶器長頸瓶の底部片である。高台は、基部幅が1.2cm、高さが0.5cmで、高さに比べて幅が広めである。遺存部分には施釉痕は見られない。

帰属時期は9世紀第1四半期と考えられる。

(3) SI004 (第60~62図、第22表、図版8・9・24・25)

遺構 上層本調査区域西端の204CZ-15・16・25・26グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形はやや台形気味で、掘り方の規模は北西壁際で3.60m、南東壁際で3.30m、北東壁際で3.30m、南西壁際

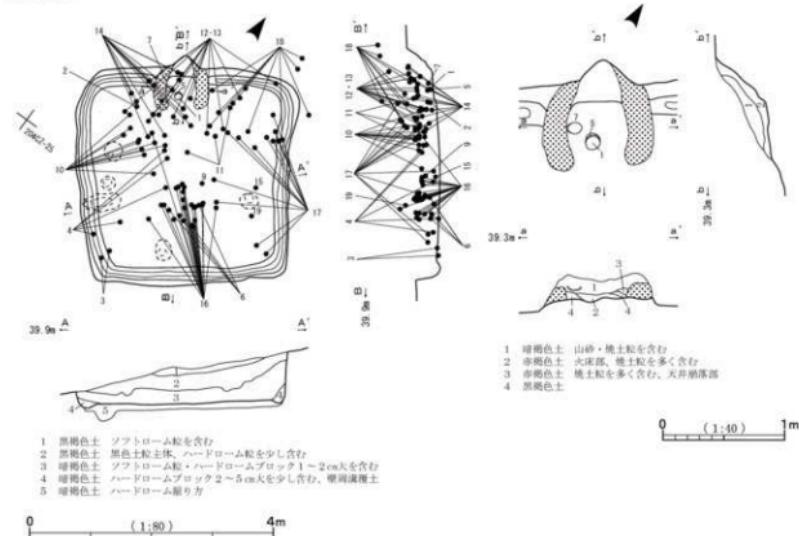
で3.60mである。確認面から床面までの深さは、北隅で0.75m、東隅で0.70m、南隅で0.20m、西隅で0.40mである。カマドは北西壁のほぼ中央に設けられており、当遺跡の竪穴建物跡の中では比較的良好に両袖と火床部が残っていた。建物の主軸方位はN-27°-Wである。カマド部分を除き壁溝が全周している。床面は南西壁際の中央部を除きほぼ全面が硬化している。貼り床を剥いだところ、南西壁際には3基、南東壁際には1基、北東壁際には1基の小さなピット状の掘り込みが確認された。主柱穴は確認されなかった。

遺物は、カマド内から検出された1、5、7の他に、3や15が床面直上での検出で、それ以外の遺物は大半が覆土中・上層での検出である。また、19の奈良三彩火舎の獸脚は覆土最上層での検出である。

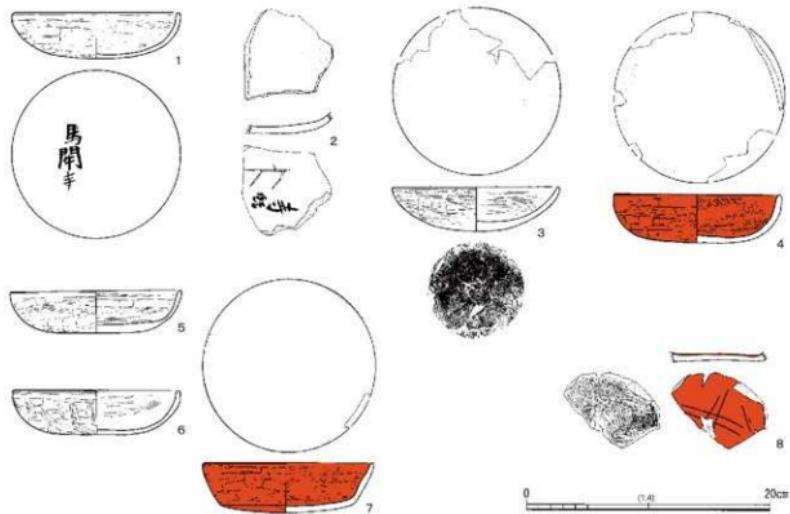
遺物 1～6は丸底の土師器杯である。成形・調整技法はほぼ同じである。口縁部は内外面ともに横ナデを施す。体部外面から底部全体にかけて手持ちヘラケズリの後に、個体によって精粗の差はあるが、ヘラミガキを施している。内面はヘラナデの後にヘラミガキを施している。1は底部外面に縦書きで「馬闍寺」と墨書きが記されている。二文字目の「闍」は「閉」の異体字である。全体に文字のバランスが悪く、特に最後の「寺」の字はその前の二文字とは比べ物にならないほど細く弱々しい。2は底部外面中央に木葉痕が残り、その横には縦書きで「寺□」と墨書きが記されている。墨痕は比較的鮮やかであるが、二文字目は器面の摩耗で一部かされている。偏は「食」、「魚」、「虫」のいずれかの可能性があり、旁は「圭」の可能性が高いが、断定はできない。3は体部内面と底部の境付近に1か所と口縁部に油煙煤の付着が見られる。4、7は内外面全面に赤彩が施されており、どちらも口縁部内面の複数箇所に油煙煤の付着が見られる。この2個体は、摩耗部分や欠損部分にも油煙煤が付着していることから、灯明皿に転用したものと考えられる。5、6はよく似た器形で、1や3に比べて底部はやや平坦気味に成形されている。8は7同様の土師器杯の底部片である。内外面全面に赤彩が施されており、底部外面は静止ヘラケズリで、その後に刻まれた「#」状の線刻が見える。9～11はロクロ土師器杯である。9は底部内面に縦書きで「升坏」、体部外面には底部側から見て左側に縦書きで「万手」と墨書きが記されている。いずれも明瞭な墨痕であるが、特に外側の「万手」は極めて濃い、鮮明な墨痕である。「升坏」と記されていることから、計量用の升の代わりに使用されていた可能性が高いと考えられる。欠損部分が多いため実測図から容積を計算すると、すりきりで約250mlになり、大宝令の1升（大升の3分の1）の約240mlにかなり近い値である。10、11は内面全面に丁寧なミガキが施されている。

12～15は土師器壺である。12と13は同一個体であるが接合点がないことから別々に実測した。それぞれの図に横線を施した部分で重なり合うものと考えられる。14はそれより少し小型の壺、15はかなり小型の壺である。12、13は比較的胴部が球状に膨らむ形態である。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部外面は上半が縦方向、下半が横方向のヘラケズリ調整で、その後に下半部分に縦方向のヘラナデが施され、内面は全体にヘラナデで調整されている。14は胴部中位以上が残るかなり細身の壺である。15は器高15cm弱の小型の壺で、SX004で藏骨器として用いられている小型の壺に良く似た器形である。かなり硬質な焼き上がりであるが、粘土の練りこみが甘いため胴部外面にマーブル状の斑紋ができる。16は下総地域産の須恵器壺である。口縁部と底部を欠失している。やや細身で、焼き上がりの色味は須恵器というよりも土師器と言った方がよいものである。胴部外面は縦方向の平行タタキ成形で、下端部は横方向のヘラケズリ、上端部はロクロナデで調整されている。胴部内部部分は當て具痕をナデ消している。17、18は土師器瓶である。17は口径が30cmを超えるかなり大型の瓶である。頸部の外面に小さな突起が貼りつけられており、90°間隔で4か所に貼りつけられていたものと考えられる。内面は全体に丁寧なヘラミガキが施

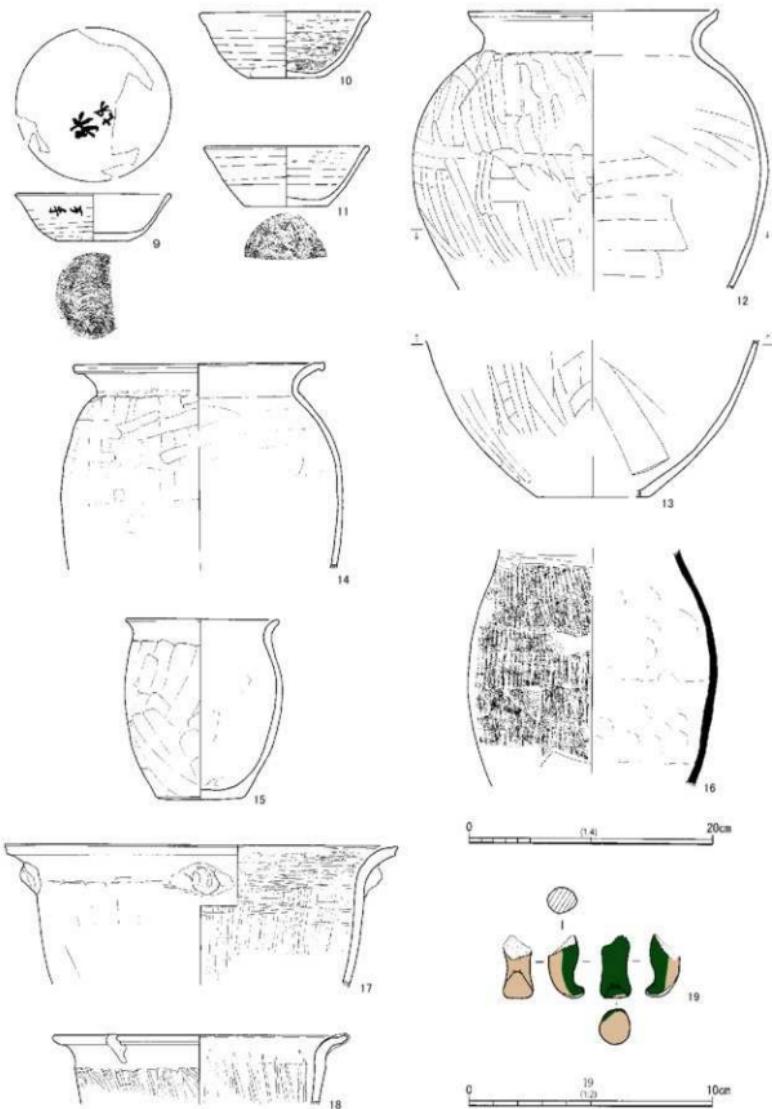
(3) SI004



第60図 (3)SI004



第61図 (3)SI004出土遺物①



第62図 (3) SI004出土遺物②

されている。18には頭部の突起は見られないが、形態から瓶でよいと考えられる。やはり内面に丁寧なヘラミガキが施されている。口縁部に製作時補修痕跡が見られる。19は奈良三彩の火舎の脚である。灰白色の胎土で、混和物はほんないに等しい。遺存部分に見られるのは緑釉と白釉（透明）の彩色のみで、褐釉の部分はない。

9～11のように時期の異なる遺物の混入が見られるが、当該遺構の帰属時期は床面上出土の遺物から8世紀第2四半期と考えられる。

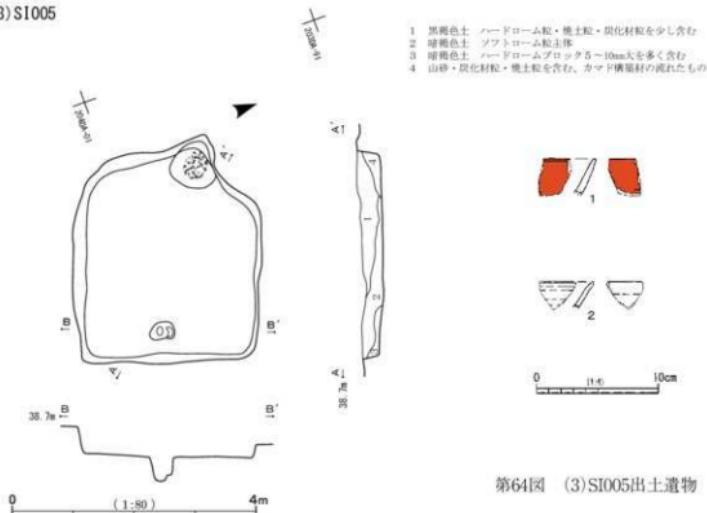
(3) SI005 (第63・64図、第22表、図版9・25)

遺構 上層本調査区域北東隅の203DA-91・92、204DA-01・02グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形は正方形に近いが、北隅側でややいびつな形になっている。掘り方の規模は、北東壁際で3.00m、南西壁際で3.50m、北西壁際で3.00m、南東壁際で3.00mである。確認面から床面までの深さは、北隅で0.40m、東隅で0.20m、南隅で0.30m、西隅で0.60mである。カマドは北西壁のやや北寄りのところに設けられている。建物の主軸方位はN-68°-Wである。カマドはほとんど残っておらず、全体としては火床部が明確にわかる程度であった。壁溝は巡らされておらず、床面には特に硬化部分は見当たらなかった。支柱穴ではなく、南東壁際の床面に、入口ピットと考えられる掘り込みが確認できたのみである。

遺物 図化できる資料は2片のみである。1、2ともに通常であれば掲載しない程度の小破片ではあるが、当該竪穴建物跡からの出土遺物がほとんどないことから、図化、掲載するものである。どちらもロクロ土器器杯である。1は内外面に赤彩が施されている。2は外面ともに灰褐色で、かなり黒ずんで見える。

出土遺物が土器の小片2点のみのため、帰属時期の判断はできない。

(3) SI005



第64図 (3) SI005出土遺物

第63図 (3) SI005

(3)SI006 (第65~68図、第22表、図版9・10・25~27)

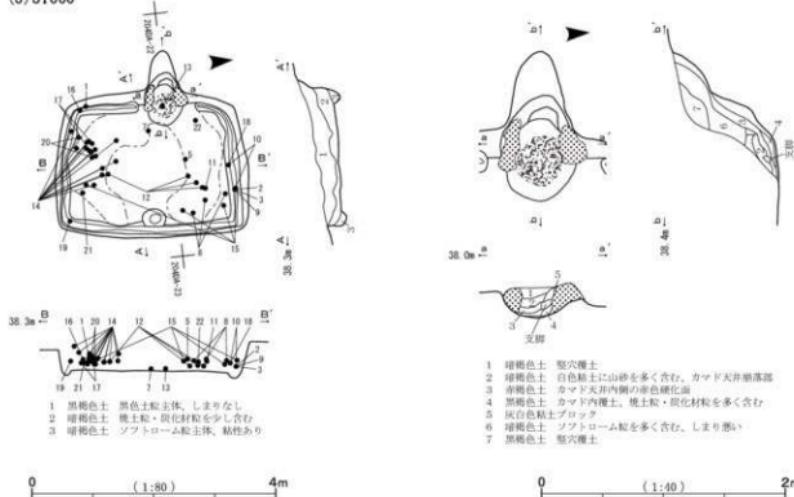
遺構 上層本調査区域南東端の204DA-12・22グリッドに位置する。平面形はややいびつな長方形である。掘り方の規模は、北壁際で2.30m、南壁際で2.30m、西壁際で2.90m、東壁際で3.15m、確認面から床面までの深さは、北東隅で0.30m、南東隅で0.45m、南西隅で0.65m、北西隅で0.70mである。カマドは西壁中央のやや北寄りのところに設けられており、建物の主軸方位はN-85°-Wである。カマドは当該遺跡の中では比較的の残り具合が良好で、両袖材、火床部が確認できた。壁溝はカマド以外の部分を周囲している。床面は中央部と東壁側を除いて硬化面が馬蹄形状に確認された。東壁際の中央部に入口の掘り込みが確認された。

遺物の大半は覆土中層以上から上層にかけての出土で、床面直上での検出は、7、13などわずかな遺物のみである。

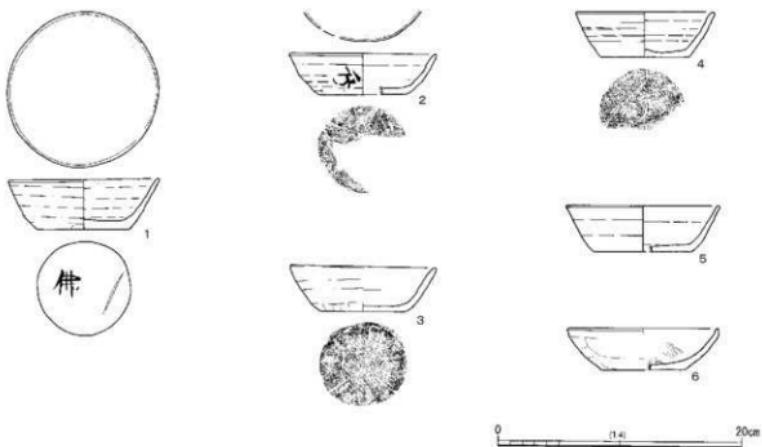
遺物 1~5はロクロ土師器杯である。1は底部外面に「佛」と墨書が記されており、口唇部内面には何か所もの油煙煤の付着が見られる。土師器杯を転用する一般的な灯明皿に比べて、この個体は破損も器面の摩耗も観察できないことから、形態は通常の食器の杯であるが、当初より灯明皿として専用されていた可能性が高い。2は口縁部外面の底部から見て左側の部分に薄い墨痕の墨書が記されている。偏は「千」のように、旁は「子」のように見える。口縁部内面には油煙煤の付着が1か所ある。3は静止糸切りの後に、体部外面下端から底部周縁部を持ちヘラケズリで調整している。4は他に比べて段差の強い明瞭なロクロ目が残る個体である。5は他の土師器杯に比べかなり白っぽい焼き上がりの個体で、底部外面のみを一方向の持ちヘラケズリで調整している。練りこみが甘いために素地に空気が入っていたらしく、部位によっては二層に分かれしており、胎土にはマーブル状の斑紋が見える。6は土師器杯である。ロクロは使用されておらず、体部外面から底部全面にかけて持ちヘラケズリ、内面は全面にヘラミガキが施されている。底部内面の器面には摩耗が見られる。

7~11は土師器甕である。調整技法はほぼ共通しており、口縁部は外外面横ナデ、胴部は外面上位が縱方向、下位が横方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデである。7は口径が30cmを超える大型の甕で、かなり硬質な焼き上がりである。器厚は4mmで、大型の甕にしてはかなり薄手のつくりである。8は中型の甕である。器厚は3mmで、やはり薄手のつくりである。9~11は小型の甕である。9、10は口縁部から胴部中位以上までの資料で、器厚は9が3mm、10が3mmを下回り、やはり薄手のつくりである。11は胴部下位から底部にかけての資料で、器厚は3mmで同じく薄手のつくりである。ざらざらした胎土や色調などの酷似から考えて、9と11は同一個体である可能性が高いが、遺存部分に接合面は存在しない。12、13は土師器甕の底部付近の破片資料である。どちらも硬質の焼き上がりで、特に13は下総地域産の須恵器に近い。いずれも底面及び内面下端部はきれいに面取りがされており、胴部内面はミガキ調整がなされていないといふ共通点がある。14~19は須恵器甕で、このうち14は他に例を見ないような大型の甕である。接合面はないが同一個体であることが確実な口縁部の破片をはめ込んで図上復原すると、口径36cm、胴部最大径48cm、残存部分の器高52cmである。胴部外面下端には横方向のヘラケズリが施されていることから、あとわずかで底部に達するものと考えられる。調整は、口縁部が外外面ロクロナデ、胴部は外面上が斜めの平行タタキで、最下部が横方向のヘラケズリ、内面は肩の部分で当て具痕をそのままにしているが、それ以外の部分ではナデ消しをしている。下総地域産の製品と考えられる。15は甕の胴部最大径部分と考えられる。外面は斜め方向の平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消しており、胎土中の混和物は非常

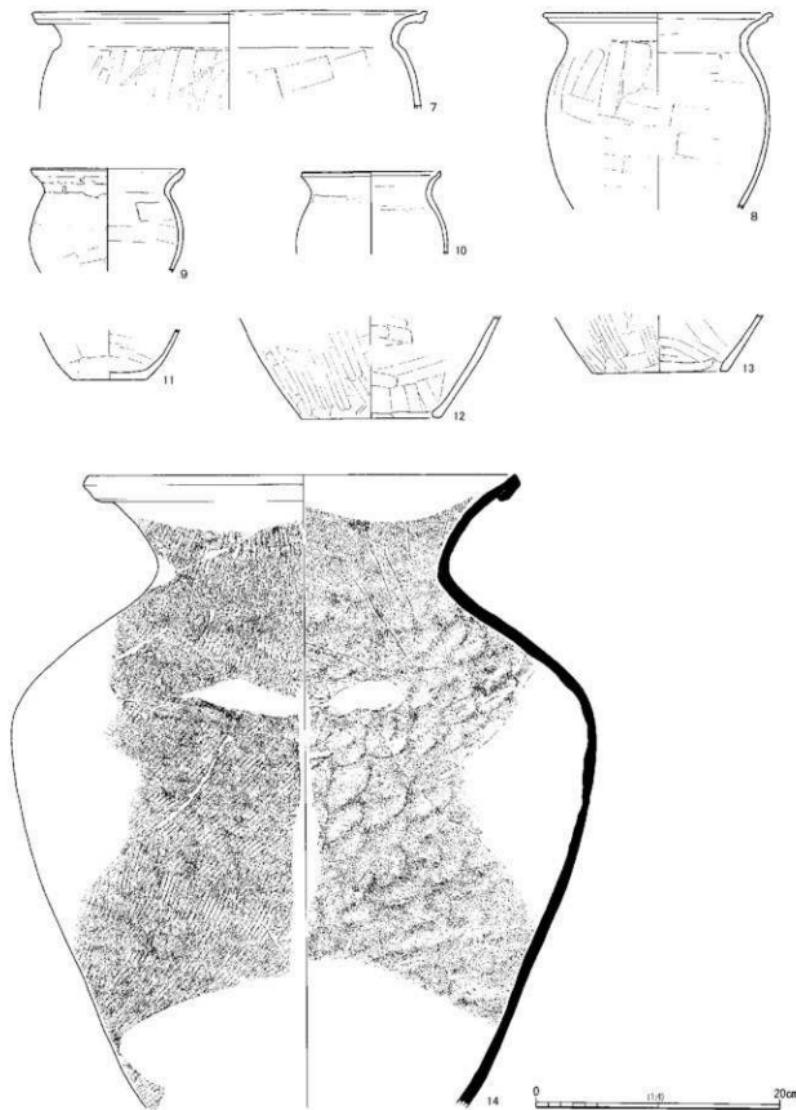
(3) SI006



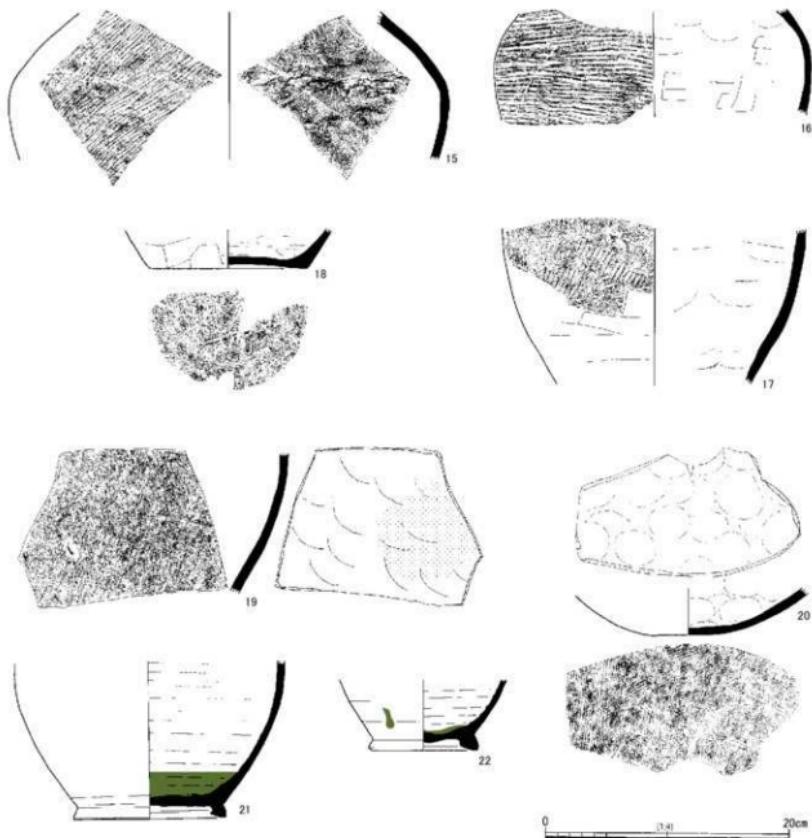
第65図 (3) SI006



第66図 (3) SI006出土遺物①



第67図 (3)SI006出土遺物②



第68図 (3)SI006出土遺物③

に少なく、内外面ともにかなりスペスペしている。湖西産の可能性が考えられる。16も壺の胴部最大径部分と考えられる。外面は横方向の平行タタキ、内面は当て具痕を横方向のヘラナデでナデ消している。白雲母の混和は見られないが、茨城県新治産の須恵器と考えられる。17は下総地域産の壺の胴部破片である。胴部外面は斜め方向の平行タタキで、下半部は横方向のヘラケズリ、内面は当て具痕をナデ消している。18は下総地域産の壺の底部片である。胴部外面下端は横方向のヘラケズリ、内面は横ナデで当て具痕をナデ消している。底部外面は無調整で、「乙」字形の浅いへら書きが見える。19はやはり大型の壺と考えられるもので、胴部中位の肩に近い部分の大型破片である。外面は下半部に斜め方向の平行タタキが見え、上半には薄い自然釉がかかっている。内面は全面に当て具痕が見えることから、外面上半はタタキの後に

ナデ消しを行ったものと考えられる。図中内面右端の部分には研磨部分がある。硯として転用された可能性も考えられるが墨痕は見えない。長石粒を多めに含むことから常陸産と考えられるが、窯は特定できない。20は底部にわずかな窪みを持たせる丸底の甕の破片資料と考えられる。外面は平行タキ、内面は当て具痕をナデ消ししている。内面はほぼ全体がツルツルの手触りであるが、墨痕は特に見えず転用硯とするのは無理かと考える。15と同じく湖西産かと考えられる。21、22は東海産の長頸瓶である。21は高台部外径が12.4cm、胴部最大径が22.2cmで、長頸瓶としてはかなり大型のものである。胴部内面にツルツルになっている部分があり、明瞭な墨痕は見えないものの転用硯として使用された可能性は高いと考える。底部内面には自然釉がかかっている。22は標準的な大きさの長頸瓶である。底部内面には21と同じく自然釉がかかっており、外面には複数の釉垂れが見える。

帰属時期は8世紀後半と考えられる。

(3)SI007 (第69~71図、第22表、図版10・11・27・28)

遺構 上層本調査区域北寄りの204CZ-06・07・16・17グリッドに位置する。平面形はやや横長の台形である。掘り方の規模は、北壁際で4.00m、南壁際で3.50m、東壁際で3.20m、西壁際で3.40m、確認面から床面までの深さは、北西隅で0.65m、北東隅で0.55m、南東隅で0.55m、南西隅で0.50mである。カマドは北壁の中央に設けられており、建物の主軸方位はN-0°ではなく真北を向いている。カマドは北西側を搅乱によって破壊されているが、全体としては当遺跡のカマドの中では遺存状況が良好である。両袖とも高い部分まで残っており、カマドの中からは多くの遺物が出土した。壁溝はカマド部分を除いて全周している。カマドの東脇の壁溝の中には浅い小さなピット状の掘り込みがあった。床面は、ほぼ北東側のやや広い範囲と北西側の一部のそれぞれやや窪んでいる部分を除き硬化していた。南壁際中央に入口ピットが検出された。

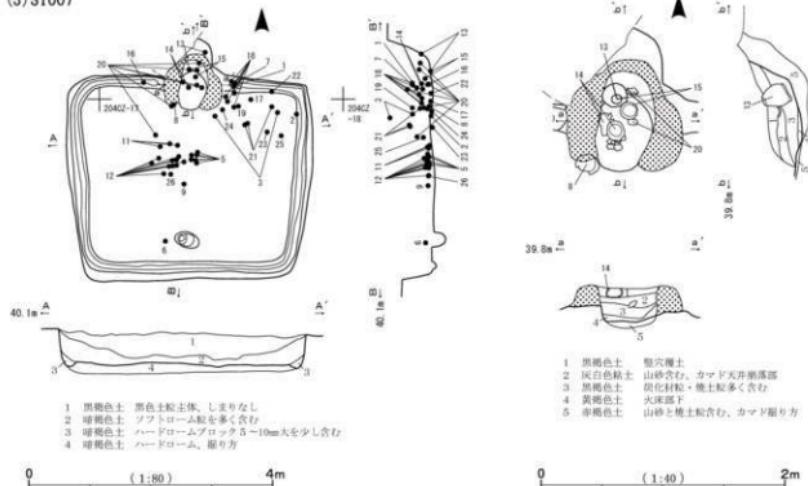
カマド内から出土している土器が8、13、14、15など多数ある他に、11の瓦鉢のような特殊な遺物もほぼ床面直上で検出されている。

遺物 1は須恵器杯である。腰の部分に明瞭な段を持ち、底部外面に丁寧な回転ヘラケゼリが施され、全体に薄手の丁寧なつくりであることから、市原市永田・不入窯産である可能性が高い。外面には自然釉と考えられる黒っぽい色調の部分がある。2~8はロクロ土器器杯である。2は体部外面に正位で「**アミ**」(=网:あみ)と墨書が記されている。器表面は全体に黒ずんでいるが墨痕はかなり鮮明である。3は内外面の広い範囲に黒く光沢のある部分が広がっているが、その範囲が広すぎることから灯明皿に転用された結果ではなく、樹脂処理などの結果である可能性も考えられる。また、内外面には被熱劣化と考えられる剥離部分が多くある。4は接合破片5片中1片のみが黒色、他はぶい褐色で、破損後に被熱していると考えられる。口縁部の内外面の同一箇所に油煙煤の付着があることから、灯明皿に使われていたものと考えられる。5は、内面は灰褐色でやや白っぽい色調であるのに対して、外面は全体に黒ずんでおり、さらに油煙煤の付着箇所が数多く見られる。灯明皿の上皿に転用されていたものと考えられる。6は口縁部外面に油煙煤の付着があり、破断面にまで及んでいることから破損後に灯明皿に転用されたものと考えられる。底部内面にはあばた状の剥離が見られる。7、8は内面を丁寧なミガキで器面調整している。7は体部外面に正位で墨書が記されている。墨痕はかなり薄く、文字の中に割れ口が入っているため読みづらい状況だが「**アミ**」と読める。8は内面に黒色処理が施されており、外面も全体に黒ずんでいる。9、

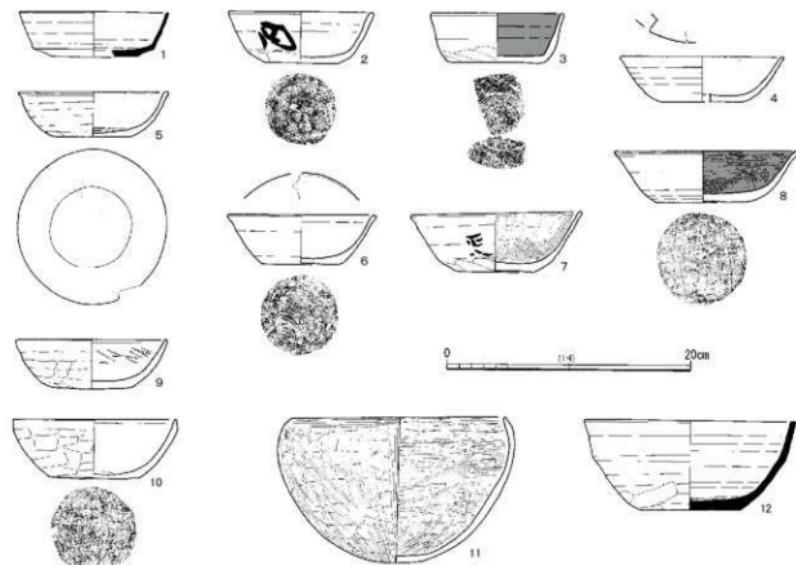
10は土師器杯である。いずれもロクロは使用していないが、9は内面に粗いミガキ調整が施されている。胎土の練りこみが粗かったらしく、体部外面、底部にはマーブル状の斑紋が見える。10の底部外面には、手持ちヘラケズリの前の成形痕として静止糸切り様の痕跡が観察される。このことから考えて、非ロクロ成形の杯においても、円柱状の底部の上に粘土紐を巻き上げて、最終的に円柱状の部分を静止糸切りで切り離す技法を用いていた可能性が考えられる。11は僧侶が用いる応量器で、本資料は土器であることから瓦鉢と呼ばれるものである。球形の胴部の外面最下部にヘラケズリで直径3.5cmほどの平坦面が設けられているが、この平坦面は中心から微妙に外れているため立てると器が斜めになる。外面は横方向のヘラケズリの後に縦方向の粗いミガキ、内面はヘラナデの後に横方向のミガキが施されている。粘土の練りこみが甘く、部分的にマーブル状の斑紋が見える。12は須恵器の椀もしくは鉢と考えて開口部を上にして実測したが、逆に開口部を下にして甕などの蓋として製作された可能性も考えられる。口唇部は上面にやや内傾気味の平坦面を設け、外端、内端ともにわずかに稜を持たせている。胎土などの特徴から千葉市南河原坂窯産の製品の可能性が高いと考えられる。

13～19は土師器甕である。このうち13～15は中型の甕で、16～19は小型の甕である。13は胴部最大径が上位にある砲弾形の器形で、口縁部は弱い受け口状である。器厚は3mm程度の部位が多く、全体としてはかなり薄手のつくりである。14の胴部最大径は13に比べて下がった部位にある。外面は全体に黒ずんでおり、使用痕跡と考えられる。やはり薄手のつくりである。15は口縁部から胴部中位までの資料である。14に近い器形で、やはり薄手のつくりでやや硬質の焼き上がりである。16は口縁部を欠失しているが、頭部から底部にかけてはほぼ完全に残存している資料である。頭部以上がきれいに欠けており意図的に打ち欠いた可能性があることから、藏骨器として使用されていた可能性も考慮に入れて土器の中に入っていた土を採取しておいて、整理作業の段階で飾ったところ、骨片はまったく無く、若干の炭化材の小片が検出された。17は胴部中位よりやや上の部分に明瞭な粘土紐の接合部分があり、その部分で窪んでいる。18は口縁部内外面、頭部外面に、朱色の顔料の痕跡が見られる。色から考えてベンガラと思われるが、小型の甕であるので彩色の理由の見当がつかない。19は口縁部から胴部中位にかけての資料である。20～22は下総地域産の須恵器甕である。20は底部を欠失している。口縁部は内外面ロクロナデ、胴部の外面は縦方向の平行タタキで、下端が横方向のヘラケズリ、内面は当て具を縦方向のヘラナデでナデ消している。21は底部付近の破片資料で、胴部には縦方向の平行タタキ、最下端に横方向のヘラナデ、内面も横方向のヘラナデ、底部は外面が無調整、内面がナデ調整である。底部内面の中心部には器表面が削り取られてしまうような研磨痕がある。このことから、硯ではなく砥石として転用された可能性が考えられる。22も同じく底部内面の中央部分が径6cm程度の範囲に同じような研磨痕があり、これも砥石として転用された可能性が考えられる。また、底部外面には細かい線状のキズが何条も縦横に走っている。23は下総地域産の須恵器甕である。器高13cmほどの小型の甕である。底部は一般的に見られる五孔式のものではなく、底部を縦に3か所切り抜き、平行する二本の帯を切り残す形態のものである。24は須恵器長頸瓶の胴部の資料である。SI004出土破片を含めて、大きく3ブロックに分かれる接合資料から図上復原したものである。頭部以上と底部から高台部にかけての部分は欠失している。肩部外面以上には自然釉がかかっている。東海産と考えられる。破片数としてはSI004出土破片の方が多く、どちらに帰属させるべきか判断に迷う資料である。25は奈良三彩火舎の獸脚である。胎土はにぶい黄橙色で、混和物はほとんどないに等しい。遺存部分には三色の釉が描っている。脚下端部の形状の差異から、SI004の獸脚とは別個体と考えられる。

(3) SI007



第69図 (3) SI007



第70図 (3) SI007出土遺物①

一方、釉の発色の類似性から204CZ-27グリッド出土の奈良三彩火舎の破片と同一個体である可能性が高い。26は当遺跡から出土した唯一の鉄製品である。形状から考えて穗摘具の可能性が高く、重さは4.34 gで、全体の1/2~2/3程度を欠失していると考えられる。

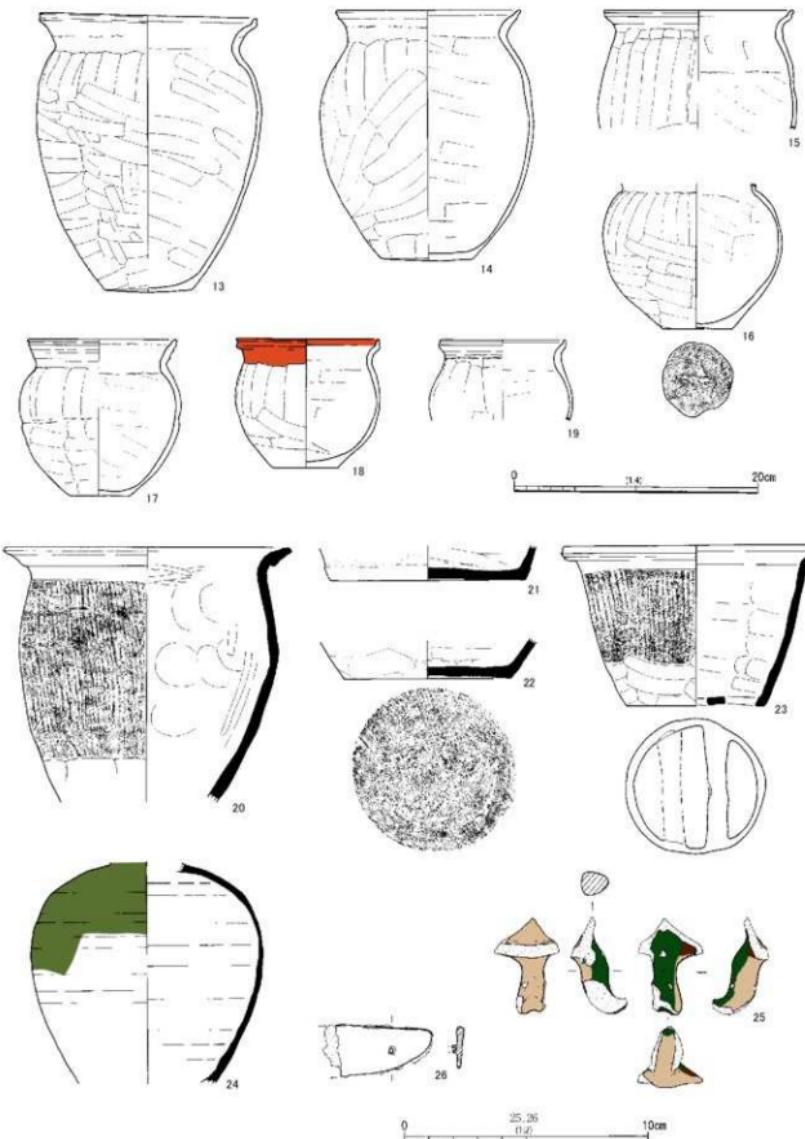
出土遺物の中には一段階後の時期と考えられる遺物も見えるが、床面直上出土の遺物からは8世紀第3四半期に帰属すると考えられる。

(3) SI008 (第72~74図、第22表、図版11・28・29)

遺構 上層本調査区中央北端の203CZ-98・99、204CZ-08・09グリッドに位置する。重複する遺構はない。遺構の平面形はほぼ正方形である。掘り方の規模は、北西壁際で3.30m、南東壁際で3.20m、北東壁際で3.10m、南西壁際で3.10mである。なお、南東壁は南東端で極端に窄まるような形になっており、見かけ上のもっとも狭い部分は2.40mである。確認面から床面までの深さは、北西隅で0.80m、南西隅で0.75m、北東隅で0.50m、南東隅で0.55mである。カマドは北西壁のはば中央に設けられており、建物の主軸方位はN-22°-Wである。カマドの遺存状況は、本遺跡の他の堅穴建物跡のものに比べると比較的的良好で、両袖材及び火床面が確認できた。カマドの部分を除き、壁溝が全周している。床面はほぼ全体が硬化している。床面に主柱穴は検出されず、南東壁際中央に入口ピットとみられるものが2基連なって確認された。当該堅穴建物跡は補修などが理由かと思われるが、壁を若干広げている痕跡が見られ、入口ピット状の掘り込みが2基連なっているのもそれが原因と思われる。

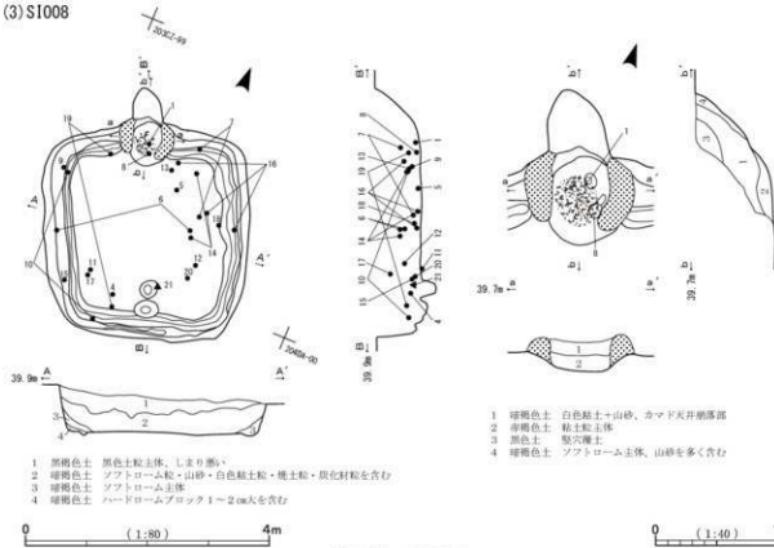
カマド内から1、8が出土し、この他にも5、11などが床面直上で検出されている。

遺物 1~7はロクロ土師器杯である。このうち、1~4には墨書が記されている。1は底部外面に薄い墨痕で墨書が記されており、釈読は不能である。2は体部外面に正位で墨書が記されている。部分資料のため断定はできないが、草書体の「得」である可能性が考えられる。草書体の「得」の墨書は千葉県内では多く見られ、204CZ-19グリッドのロクロ土師器杯ににくずしはやや異なるが草書体の「得」の墨書が見られる。体部外面下端と底部周縁の手持ちヘラケズリは逆方向にケズリが一周するという特徴がある。これは、6にも7にも共通の特徴で、同一人による製品の可能性が考えられる。3、4は底部外面に墨書が記されている。部分的な文字の残存であるため断定的なことは言えないが、千葉県内の多くの集落遺跡で出土している「千万」の可能性が考えられる。また、3の底部外面には墨書とは別に浅いヘラ書きが見える。SI006の須恵器甕18に「乙」字状の浅いヘラ書きがあり、本例も同様のものである可能性が高い。SI006の18は南河原坂産と考えられることから、本例も南河原坂産である可能性が高い。5は体部外面の広い範囲に油煙煤の付着が見られ、全体に器面の劣化が進んでいる。6は2で記したとおり、体部外面下端と底部周縁の手持ちヘラケズリが逆方向に一周している。7は体部上半を欠失している資料で、破損後に灯明皿として転用されているようで、内面上端の一部に油煙煤が付着し、それに続く破断面が被熱で黒ずんでいる。外面はやや劣化が進んでおり、器表面が軟化している。体部外面下端と底部周縁の手持ちヘラケズリは2、6と同様である。8、9は須恵器杯である。胎土の特徴からともに南河原坂窯跡群の製品と考えられる。8は底部外面に墨書が見えるが、部分的な資料のために釈読は不能である。破損後に被熱しているようで、破片によって色調が異なる。9は口縁部内面に油煙煤の付着が見られる。10は土師器杯であるが、外観的には土師器甕の底部付近のような形態である。全体に赤味の強い胎土である。外面は

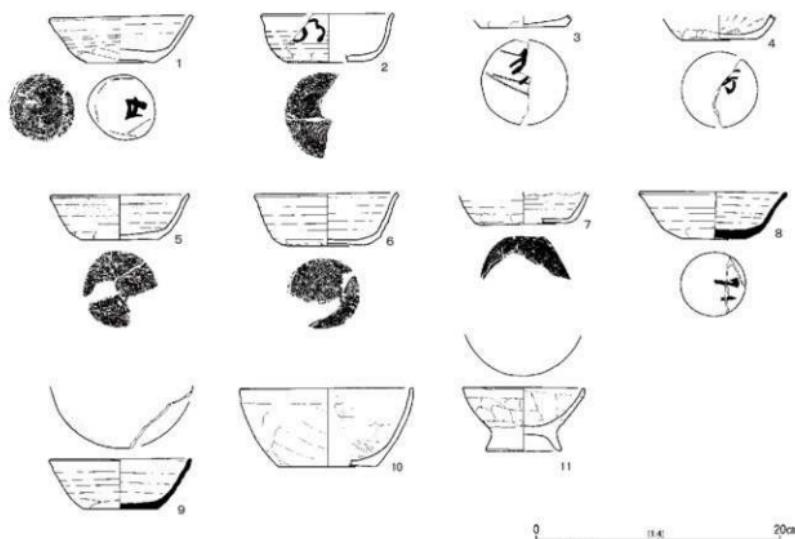


第71図 (3)SI007出土遺物②

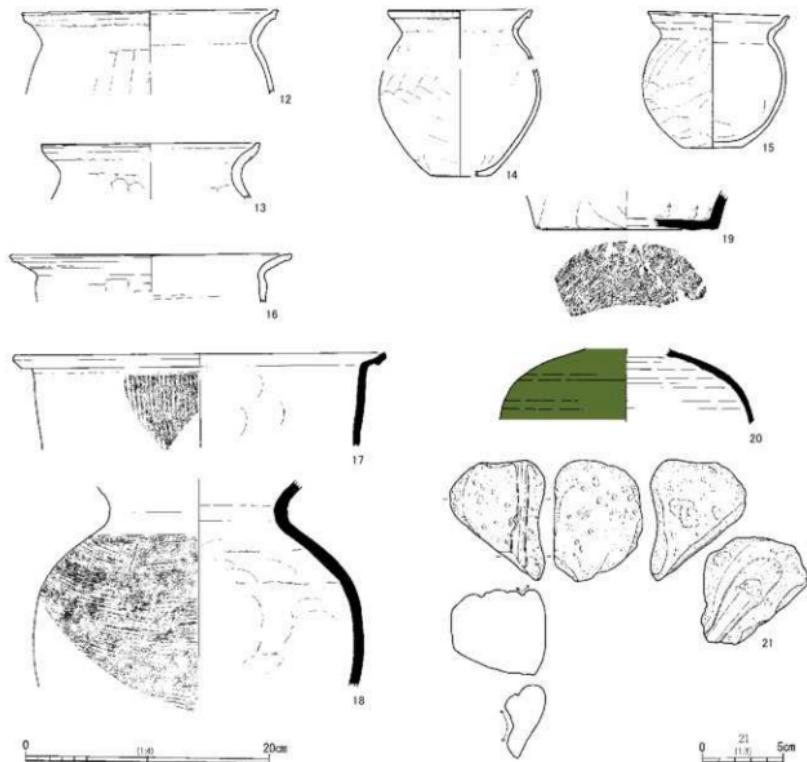
(3) SI008



第72図 (3) SI008



第73図 (3) SI008出土遺物①



第74図 (3) SI008出土遺物②

口縁部上端のみ横ナデ、それ以下から底部にかけては手持ちヘラケズリ、内面はナデの後に全体に粗いヘラミガキが施されている。11は小型の杯に高台が付く器形である。杯部外面は粘土紐の接合痕と指頭圧痕が明瞭で手捏ね土器のように見えるが、高台や杯部上位の内外面の調整はロクロナデである。このことからロクロ成形の土師器と考えられる。口唇部に1か所、油煙煤の付着が見られる。器表面の摩耗痕がほとんど見えず、灯明具として専用に製作されたものである可能性が考えられる。

12~15は土師器甕である。12、13は標準的な大きさの甕で、口縁部は内外面横ナデ、胴部は外面が輻方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデ調整である。14、15は小型の甕である。14は接合面はないが、明らかに同一個体である口縁部と胴部の資料を図上復原したものである。14の方がやや長胴気味で、15の方はやや小型で丸味を帯びている。14は口縁部外面に煤の付着が見られるが成因は不明である。どちらも薄いつくりでかなり軽い。16は土師器甕の口縁部付近の破片資料である。口縁部径が最も大きく、頭部の

くびれ部の径と胴部最大径がほぼ同じで、底部に向かって窄む砲弾型の器形であろうと考えられる。17は下総地域産の須恵器壺の口縁部付近の破片資料である。16と同じく口縁部に最大径があり、底部に向かって窄む砲弾型の器形である。胴部外面には縦方向の平行タタキがあり、内面は円形の当て具痕をナデ消している。18、19は須恵器壺である。18は新治産の須恵器の壺と考えられるが、胎土中に白雲母はほとんど混入していない。頸部がくびれ、やや肩の張る器形である。外面は横方向の平行タタキで、内面は円形の当て具痕をヘラナデで消している。19は下総地域産の須恵器壺の底部付近の破片資料である。底部外面は無調整と考えられるが、無節の繩の痕跡が無数についており、成形時に下敷きにした敷物などの可能性が考えられる。20は東海産の須恵器長頸瓶の頸部付け根から肩部にかけての破片資料である。外面には自然釉がきれいにかかっている。

21は2面に形状の異なる溝状痕をもつ有溝砥石である。正面の溝は幅・深さともに約5.0mmで平坦面を縱断する。下面の溝幅は1.0cm～2.2cmで、気泡を除く最も深い所で約6.0mmを測る。開口部の幅は狭く浅い。石材は、薄い黄褐色で径4mm～6mmほどの気泡を含む軽石である。

帰属時期は8世紀末乃至9世紀初頭と考えられる。

3 火葬墓・遺構・遺物

大塚台遺跡（3）からは、発掘調査時に火葬墓と判断した遺構が4基検出されている。このうちSX001・003・004の3基からは藏骨器、火葬骨、炭化物が検出されており、確実に火葬墓であると断定できるが、SX002からは明確な藏骨器が検出されておらず火葬墓と断定することは難しい。SX001～003は上層本調査区中央南端のSI003とSI002に挟まれた地点に集中しており、SX004はそれらとは少し離れた本調査区中央北端のSI007とSI008に挟まれた地点に位置している。

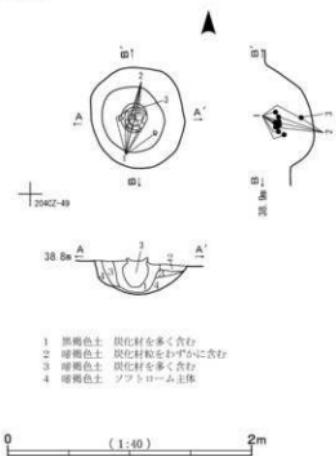
（3）SX001（第75・76図、第22表、図版12・30）

遺構 204CZ-39グリッドに位置する。SX002とSX003が隣接する。当初、方形の掘り方を想定して調査を開始したが、掘り上がりは円形の平面形で、掘り方規模0.83m×0.75m、確認面から底面までの深さ0.25mであった。藏骨器本体の3は正立状態で埋納され、そのまわりは炭化物を多く含む土で固められていた。藏骨器の中からは、覆土とともに火葬骨、炭化物が検出された。

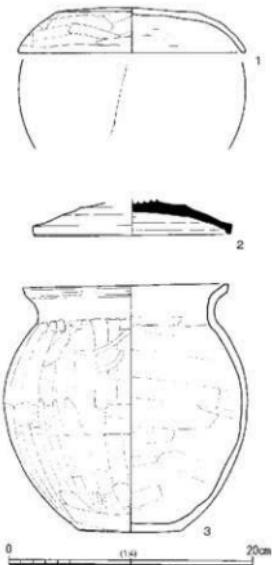
遺物 3の壺が藏骨器本体、1がそれと組みになる蓋、2は藏骨器の中蓋として転用された須恵器杯蓋である。1と3は明らかに組みで製作されており、胎土もほぼ共通で土師器としては硬質な焼き上がりである。3はほぼ完形、1も一部を欠失している程度で、ともに遺存状況の良好な資料である。また、どちらも手摺れなどの使用痕が見えないことから、藏骨器に使用することを目的として製作された専用品と考えられる。1の蓋の外面は、口縁部端部を除き全面手持ちヘラケズリ、内面はナデの後に粗いミガキが施されている。3は口縁部が内外面横ナデ、胴部から底部にかけては外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで調整されている。2の須恵器杯蓋の転用中蓋は、中蓋として転用するためにはつまみが邪魔になるので、意図的に打ち欠きを行っている可能性が高い。口縁部下端等に摩耗などの使用痕が見える。胎土中に白雲母の混入は見えないが新治産の須恵器と考えられる。

藏骨器中蓋の新治産須恵器杯蓋の形態から、当該遺構の帰属時期は8世紀第2四半期と考えられる。

(3) SX001

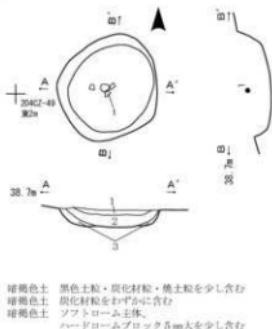


第75図 (3) SX001



第76図 (3) SX001出土遺物

(3) SX002



第77図 (3) SX002

第78図 (3) SX002出土遺物



(3) SX002 (第77・78図、第22表、図版12)

遺構 204CZ-39・49グリッドに位置する。SX001、SX003と隣接する。掘り方の規模は0.90m×0.80m、確認面から底面までの深さ0.30mで、円形の平面形の遺構である。遺構内から蔵骨器は検出されず、覆土中にわずかに炭化材粒、焼土粒が含まれていた程度である。1は口縁処理のかなり特殊な遺物であることから、単なる土坑とはせずにSXの符号を残したままで報告するが、蔵骨器本体が検出されていないことから、火葬墓と断定することは難しい遺構である。

遺物 1はクロロ土師器の皿状の器の口縁部破片と考えられる。同一個体と考えられる破片が全4片出土している。口唇部は稜線が鋭くかなり端正なつくりである。内面にはミガキが施されている。特殊な器形であることから図化、掲載しているが、先にも記したとおり、本資料の出土のみを以て当該遺構を火葬墓と判断することは難しいと同時に、小片のために時期の判断も難しい。

(3) SX003 (第79・80図、第22表、図版12・30)

遺構 204CZ-39グリッドに位置する。SX001、SX002と隣接する。遺構の北東側はわずかに攪乱によって壊されている。掘り方規模は0.70m×0.65m、確認面から底面までの深さ0.25mの円形の平面形の遺構である。蔵骨器である2は正立状態で埋納されており、その周りは多くの炭化材を含む土で埋まれていた。蔵骨器の中からは、覆土とともに火葬骨と炭化物が検出された。

遺物 1、2はSX001の1、3と酷似する土師器の蔵骨器と蓋である。色調、胎土、焼成、法量（2の器高は復原）、調整技法などほぼ共通で、SX001の1、3とともに、同一工人が専用の蔵骨器として組みで製作した可能性が高い。であるとするならば、近接する火葬墓に同一工人が製作した組みの専用蔵骨器が2組埋納されていることになる。SX001とSX003との最大の違いは蔵骨器に中蓋を用いるか否かである。

帰属時期はSX001同様に8世紀第2四半期と考えられる。

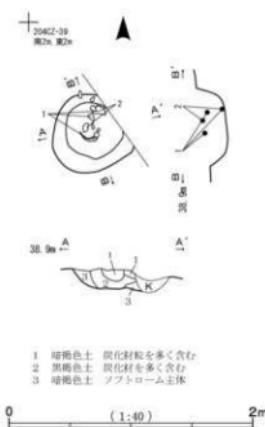
(3) SX004 (第81・82図、第22表、図版12・30)

遺構 この遺構だけが他の火葬墓からは15mほど離れた204CZ-07グリッドに位置する。遺構確認面で1の杯が伏せられた形で検出された。平面形は円形で、掘り方の規模は0.90m×0.95m、確認面から底面までの深さ0.28mという遺構である。土坑内には蔵骨器である2が正立状態で埋納され、その上に1を逆さまにして蓋をするように置かれていた。土坑の覆土中には炭化物粒がわずかに混入していた程度である。蔵骨器である2の中からは、覆土とともに火葬骨とわずかな炭化物片が検出されている。

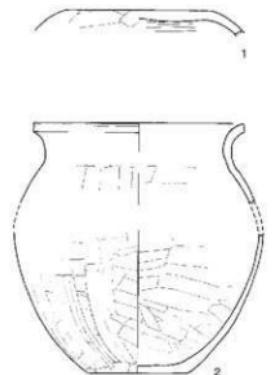
遺物 1はクロロ土師器杯である。内外面全面が赤彩されており、内面にはミガキが施されている。底部外面は静止糸切りで切り離されており、その周縁には手持ちヘラケズリが一周巡らされている。全体に硬質な焼き上がりで、口縁部などに摩耗が見える。2は蔵骨器本体である。径も器高も小振りで、全体に細身の土師器の小型壺である。口縁部の3分の2ほどを欠失しているが、それ以外はきれいに残存している。1とは異なり目だった摩耗痕は見えないが、土師器杯を転用して蓋にしていることを考えれば、2も小型の土師器壺を蔵骨器に転用したものである可能性は高い。SI004の15の小型壺が2とよく似た器形である。

帰属時期は8世紀第2四半期と考えられる。

(3) SX003

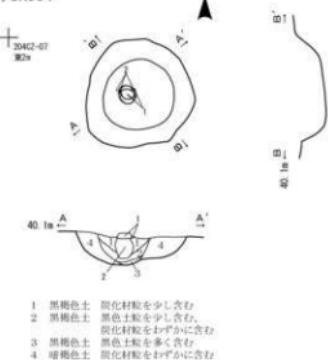


第79図 (3) SX003



第80図 (3) SX003出土遺物

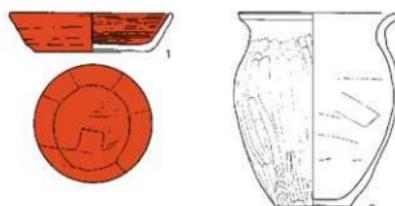
(3) SX004



- 1 黒褐色土 領化材料を少し含む
- 2 黒褐色土 領化材料を少し含む
- 3 黑褐色土 領化材料を土の中に入れてある
- 4 墓褐色土 領化材料をかなり多く含む

0 (1:40) 2m

第81図 (3) SX004

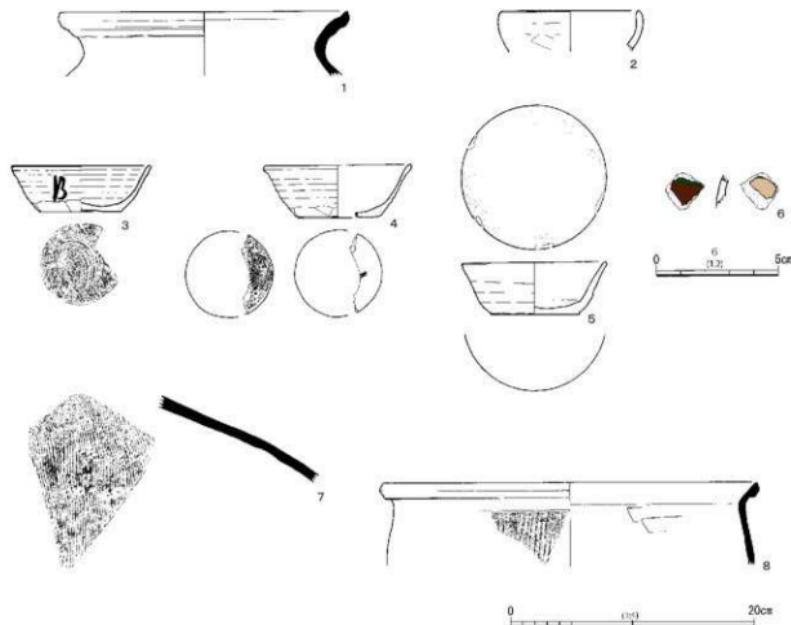


0 (1:4) 20cm

第82図 (3) SX004出土遺物

4 遺構外出土遺物 (第83図、第22表、図版30)

大塚台遺跡(3)の調査区では、遺構外から奈良時代の遺物が検出されている。1は203DA-81グリッド出土の須恵器壺の口縁部付近破片資料である。遺存部分の調整はすべてロクロナデのみである。胎土から、下総地域産と考えられるが、かなり硬質な焼き上がりである。2は204DA-01グリッド出土の土師器杯の小破片である。3～5は204CZ-19グリッド出土のロクロ土師器杯である。3は体部外面下端と底部周縁を手持ちヘラケズリ調整しているが、ヘラケズリの方向が逆向きである。体部外面に草書体の「得」の文字が正位で墨書きされている。4は底部外面に小さいが明瞭な墨痕が見える。使用していた筆の穂先が割れていたようで、平行線になっている。5は底部外面全体に手持ちヘラケズリが施されており、他の部位はロクロナデ調整のみである。体部内面の広い範囲に油煙煤の付着が見られ、灯明皿に転用されていたと考えられる。6は204CZ-27グリッド出土の奈良三彩火舎である。火舎本体の口縁部に近い破片と考えられる。胎土や釉色の特徴などから、SI007出土の奈良三彩火舎獸脚と同一個体と考えられる。7は204CZ-27グリッド出土の須恵器肩部破片資料である。比較的大型の壺の肩部の資料かと考えられる。外面には縦方向の平行タタキ、内面には円形の当て具痕が見える。かなり硬質な焼き上がりで、外面には鉄分の吹き出しが全面に見られ、その上には部分的に灰の被った自然釉が見える。内面は外面ほど明瞭ではないが、やはり全体に鉄分の吹き出しが見られる。常陸産と考えられるが、窯の特定はできない。8は204CZ-27グリッド出土の須恵器肩部破片資料である。



第83図 (3) 遺構外出土遺物

ト出土の須恵器窓の口縁部付近破片資料である。胴部外面には縦方向の平行タタキが見える。胎土から、下総地域産の須恵器と考えられる。

5 時期・性格不明のその他の土坑

(3)の調査区内からは、時期・性格不明の土坑が13基検出されている。いくつかの土坑の覆土中からは土器小片が出土しているが、いずれも、それらの土坑の時期や性格を特定できるような遺物ではなかったことから、ここでは遺構の概要についてのみ記しておく。

(3)SK001 (第56図、図版8)

204DA-20グリッドに位置する。SI002aと重複し、この堅穴建物跡の一部を壊している。1.05m×1.10mの不整形の平面形で、確認面から底面までの深さは最も深い部分で0.25mである。覆土中には炭化材を多く含む。

(3)SK005 (第84図、図版13)

204DA-10グリッドに位置する。掘り方規模は直径0.65m、確認面から底面までの深さは0.20mの円形の土坑で、覆土上層には少量の炭化材粒を含む。

(3)SK006 (第84図、図版13)

204DA-10グリッドに位置する。掘り方規模は直径0.65m、確認面から底面までの深さは0.30mの円形の土坑で、覆土中層以上には少量の炭化材粒を含む。

(3)SK007 (第84図、図版12・13)

204CZ-39グリッドに位置する。掘り方規模は直径0.90m～0.95m、確認面から底面までの深さは0.30mの円形の土坑で、覆土中には少量の炭化材粒、焼土粒を含む。

(3)SK008 (第84図、図版13)

204CZ-26グリッドに位置する。掘り方規模は直径0.80m～0.90m、確認面から底面までの深さは0.30mの円形の土坑で、覆土中には少量の炭化材粒、焼土粒を含む。

(3)SK009・010 (第84図、図版13)

204CZ-27グリッドに位置する。2基は重複しており、SK010の方がSK009よりも新しい。掘り方規模はSK009が直径0.60m～0.70m、確認面から底面までの深さは0.15m、SK010が直径0.50m～0.55m、確認面から底面までの深さは0.15mで、ともに円形の土坑である。どちらの覆土にも少量の炭化材、焼土粒を含む。

(3)SK011 (第84図、図版13)

204DA-30グリッドに位置する。掘り方規模は直径0.45m、確認面から底面までの深さは0.10mの円形の土坑である。覆土中には炭化材粒を多く含む。

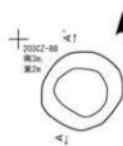
(3)SK012・013・014・015 (第85図、図版13)

上層本調査区北端の203CZ-88・89・98グリッドに直線的に並んで検出された。いずれも覆土に関する記録が残されていないので、平面形態と規模のみを記す。

SK012は平面梢円形の土坑で、掘り方規模は長軸0.90m、短軸0.65m、確認面から底面までの深さは0.25mで、西端部に一段深い掘り込みがあり、この部分は直径0.30m、確認面から底面までの深さは0.75mである。

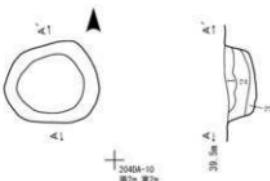
SK013は平面梢円形の土坑で、掘り方規模は長軸1.00m、短軸0.50m、確認面から底面までの深さは0.20m

(3) SK005



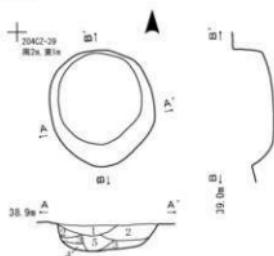
- 1 黒褐色土 塗化材粒を少し含む
2 喀褐色土 黒色土粒・塗化材粒を少し含む
3 喀褐色土 フットローム粒主体。しまり悪い

(3) SK006



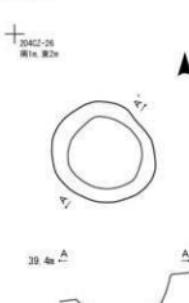
- 1 黒褐色土 塗化材粒を少し含む
2 喀褐色土 ソフトローム粒主体。塗化材粒を少し含む
3 喀褐色土 ソフトローム粒主体。しまり悪い

(3) SK007

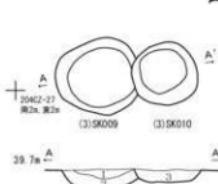


- 1 黒褐色土 塗化材粒を少し含む
2 喀褐色土 フットローム粒を多く含む、塗化材粒をわずかに含む
3 黒褐色土 塗化材粒を多く含む
4 黒褐色土 塗化材粒を少し含む
5 喀褐色土 塗化材粒・燒土粒を少し含む。しまり悪い

(3) SK008



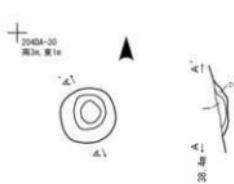
(3) SK009・SK010



- (3) SK009
1 黒褐色土 塗化材 3cmを少し含む。燒土粒を少し含む
2 喀褐色土 塗化材粒をわずかに含む

- (3) SK010
3 黑褐色土 燃土粒・塗化材粒を少し含む

(3) SK011



- 1 黒褐色土 塗化材粒を多量に含む
2 喀褐色土 ソフトローム粒主体。ハードロームブロックを含む

0 (1:40) 2m

第84図 時期・性格不明のその他の土坑①

で、南端部に一段深い掘り込みがあり。この部分は直径0.20m、確認面から底面までの深さは0.40mである。

SK014は直径0.30m～0.40mで、確認面から底面までの深さは0.20mの円形の土坑である。

SK015は直径0.40m～0.50mで、確認面から底面までの深さは0.30mの円形の土坑である。

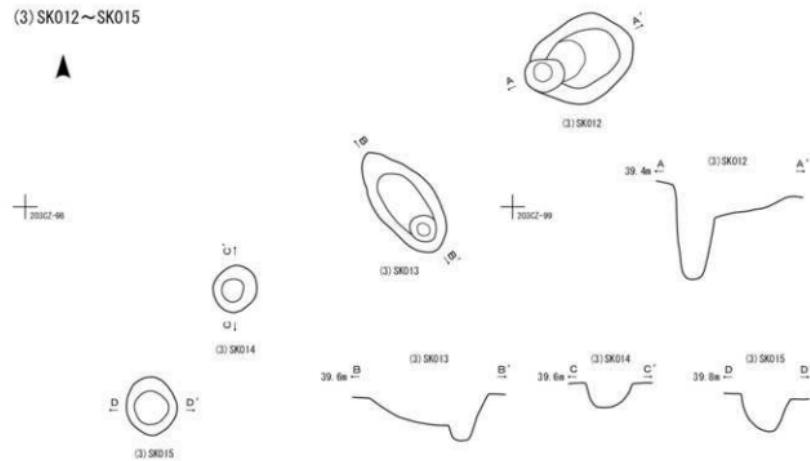
(3) SK022 (第85図)

204CZ-26グリッドに位置する。平面形は楕円形で、掘り方の規模は0.30m～0.45m、確認面から底面までの深さは0.18mという浅い掘り込みである。覆土に関する記録は残されていない。

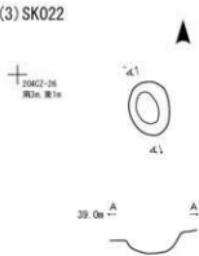
(3) SK023 (第85図)

204CZ-26グリッドに位置する。平面形は円形で、掘り方の規模は0.30m～0.35m、確認面から底面までの深さは0.15mという浅い掘り込みである。覆土に関する記録は残されていない。

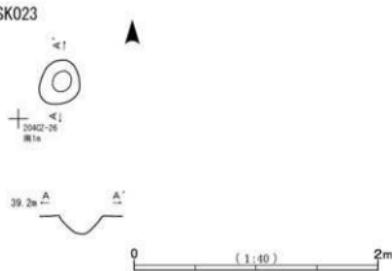
(3) SK012～SK015



(3) SK022



(3) SK023



第85図 時期・性格不明のその他の土坑②

第4章 まとめ

第1節 旧石器時代

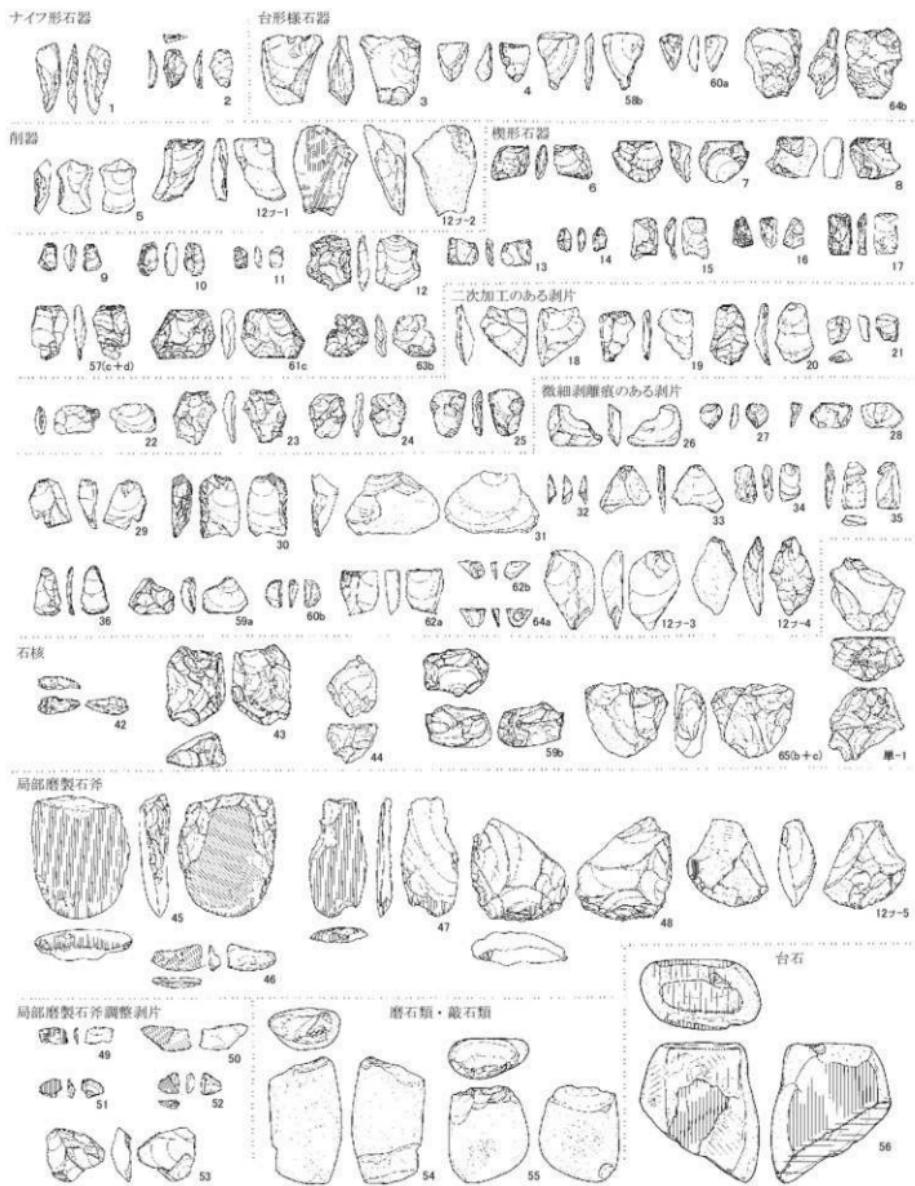
大塚台遺跡では第1ブロックから第12ブロック、単独出土地点2か所が検出され、このうち第11ブロックまでの169点が調査区北西端の平坦な台地上で「環状ブロック群」を構成する。このまとまりから東に60m離れたところに第12ブロックが立地するが、石器の出土層位はX層～IX層であり、IX層下部に集中すること、器種・石材が共通することから、12か所のブロックと単独出土石器の計176点はすべて同一の文化層の所産と捉えられる。第86図にはナイフ形石器(1・2)、台形様石器(3・4・58b・60a・64b)、削器(5・12-1・12-2)、楔形石器(6～17、57c+57d・61c・63b)、二次加工・微細剝離痕のある剥片(18～36、59a・60b・62a・62b・64a・12-3・12-4)、石核(42～44、59b・65b+65c・單-1)、局部磨製石斧(45～48、12-5)、局部磨製石斧調整剥片(49～53)、磨石類(54)、敲石類(55)、台石(56)等、接合図に収められた資料を含めた主要な器種の一覧を示した。それぞれの特徴は本文に記載したので、この項では局部磨製石斧の石材、台形様石器に類する石器、黒曜石の原産地、特に仙台秋保産の黒曜石について述べ、まとめとしたい。

1 局部磨製石斧の石材 (第86図)

本遺跡の局部磨製石斧は、環状ブロック群から4点、第12ブロックから1点の計5点である(第86図45～48、12-5)。実体顕微鏡による石材鑑定により角閃石ハントレイ岩、透閃石岩、緑色凝灰岩、ドレライトの4種が同定され、比重が高く重みのある石材が選択的に用いられていることが確認できた^{(1)・(2)}。これらはこの時期の石斧に利用されることの多い石材であり、房総半島でも手に入れることができがあるが、透閃石岩と分類した47のみは近在では確認されていない。47は一見すると蛇紋岩のような緑、黒、灰色の縞状文様を呈するが、房総半島近在には産出例のはほとんどない「緑閃石(アクチノ閃石)^(註1)」が多く含まれていることが実体顕微鏡による観察で明らかになった。割れ面を20倍に拡大すると濃緑色のきらきらとした針状結晶の集合体として可視化され、これらは全体の80%を占める。磁性はごく弱く、ネオジム磁石は5mmの距離では寄らず、石器に沿わせるとかすかに反応する程度であり、蛇紋岩の強磁性とは明らかに異なる。また、アルキメデス法^{(註2)・(3)～(6)}で得た本資料の比重は3.067027…であり、緑閃石の3.0～3.4(透緑閃石は3.05～3.22)の範囲内に収まる。

従来、蛇紋岩と呼ばれてきたこの石材だが、近年の比重や構成鉱物判定を用いた分析では明治大学黒曜石研究センター(元野尻湖ナウマンゾウ博物館館長)中村由克氏を中心に、新たな結果が導き出され^{(1)～(3)・(5)～(8)}、関東や甲信越地方の各県や市、自治体では既報告の石材名を読み替える取組みが行われている。千葉県でも例にもれず、旧石器時代では立川ロームIX層を中心とした時期、そして移行期を含む縄文時代の遺跡から、この種の石材を用いた石斧類が出土しており、それぞれの含有鉱物に応じた名称に変更されている。

上記のように、①顕微鏡観察による鉱物組織、②比重鑑定法、③磁石による磁性を検討した結果、当資料47に含有される結晶鉱物の多くは蛇紋岩が変形・変性した緑閃石(アクチノ閃石)の針状鉱物と判明した。石材名は、中村由克氏の前例に倣い、「緑閃石(アクチノ閃石)」、「透閃石」を主構成鉱物とする岩石をまとめて「透閃石岩」として報告する。



第86図 大塚台遺跡主要石器

また、千葉県立中央博物館地学研究部 主任上席研究員の高橋直樹氏から本資料に類似する資料としてご提示いただいた北海道・群馬県下仁田町鏑川・神流川、千葉県南房総市和田町五十蔵の現地採集資料を20倍の実体顕微鏡で比較したところ、縫閃石の結晶構造は大きさや色、含有量など、鏑川・神流川採集の資料と最も類似していた。群馬・長野県周辺の遺跡ではこの流域の石材が多用されているが、大塚台遺跡までの距離は直線で約150kmあり、当地への過程を検証することは今後の課題としたい。

縫閃石・透閃石は蛇紋岩帯の中のごく限られた範囲に脈状に産出する、白や緑の美しく固く重い石である。この石を蛇紋岩帯の中から、あるいは河川流域から探し出して成形し、携行した往時の人々の強い「こだわり」を遺跡の中に垣間見ることができる。

2 台形様石器に類する石器（第87・88図）

「台形様石器」は水平、あるいは傾斜した未加工の刃部と、二次加工された基部をもつ石器である。基部には平坦剥離が施されることが多く、ナイフ形石器のような急角度の刃潰し加工は少ない。ここでは解釈が容易で簡便、且つ、米ヶ森系ナイフ形石器を別器種とした台形様石器である「蔽塚系ナイフ形石器⁽²⁾ 3・9-10」の定義に準じて区分し、第2章の報告で二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片、楔形石器、同じ形状だが使用痕・調整加工を確認できなかった剥片をふくめたものを第88図1~12で提示し、大塚台遺跡の台形様石器と台形様石器に類する石器について考えてみたい。なお、13・14は形状が台形に類するものとして、整った長方形の玉髓製石器を取り上げた。

1・2は逆台形で平刃、薄い板状であり、刃部に微細剥離痕をもつ。飴色の玉髓で、自然面を有する同じ母岩であるが接合関係はない。明確な基部加工が確認できなかったため二次加工のある剥片としたが、厚みを減す必要のない薄い基部を有する、あるいは加工痕が火跳ねによって失われたと捉えれば台形様石器と分類することも可能と考える。

3は五角形で斜刃、薄い綫長の剥片素材で上に据えた刃部の両端を欠く。やはり基部の加工は不明瞭で、刃部に残る加工痕から「二次加工のある剥片」と分類している。

4・12は菱形で左右に鋭角の縁辺をもつ、剥離工程初期の剥片である。

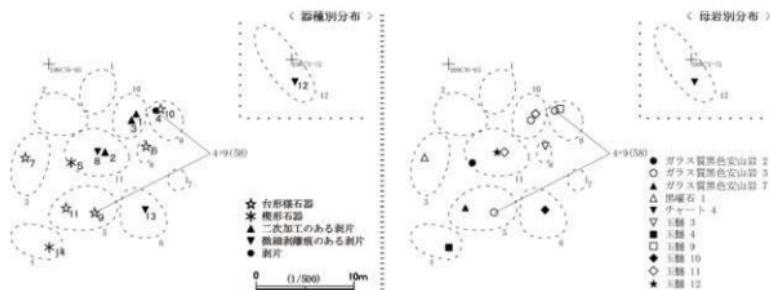
5は半円弧の部分を上に据え、抉りある部分を下位に設置した。これにより平面形状が逆台形を呈し、減厚された基部が下位に設置される。小型円礫に両極打撃を加えた楔形石器の傾きを変えて提示した。

6~11は側面が折断、もしくは平坦面からの加撃により成形される。6・7は逆三角形で平刃、最大幅を下部にもつ。8・9も逆三角形で平刃だが薄い板状であり、厚みは均一である。10・11は逆台形で平刃、縱断面は下位に最大幅をもつ菱形を呈する。

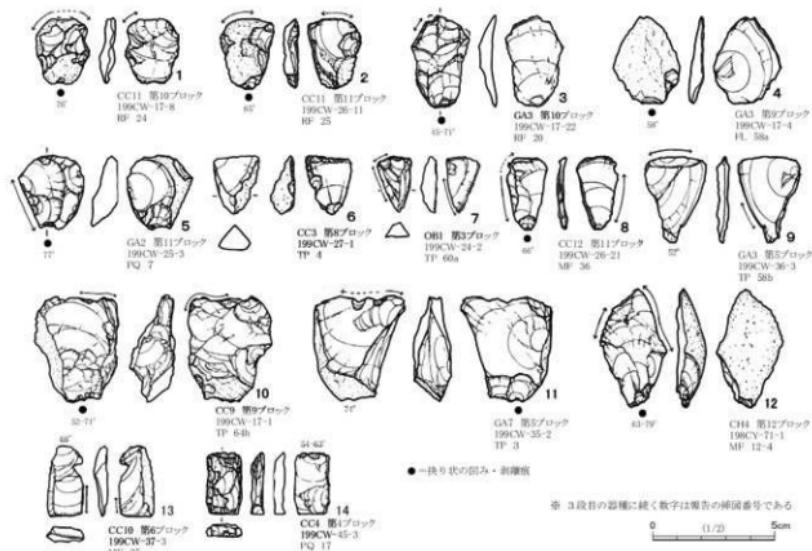
これらのうち下部に緩い抉り状の凹み、もしくは剥離痕があるものは1~5、8・10~12であり、図示した12点中9点の下部に肉眼で認識できる剥離痕・潰れ痕がみられる（図中の●印）。その下には両面の成す角度を記載した。 45° ~ 77° 、平均 59.75° 。凹みは石器の刃部以外の部位にあり、刃部縁辺にみられる微細な剥離痕とは異なり、不揃いの大小の欠けで形成されている。形成要因は不明であるが、考えられる用途としては柄などへの装着痕、紐掛けの痕、また、道具としては小枝の皮剥ぎ、枝や木根の矯正など、使用されたのちの結果として残った凹みとも捉えられよう。抉れた形状が何らか作業に都合の良い形であった可能性も考えられる。これらの機能を類推する一例として、日本人の起源を渡航という手段で検証した⁽¹¹⁾ 池谷信之氏によると、南洋の島々では筏や住居の柱を束ねる蔓はそのままでは固く加工し難いため、裂いて細くしたものを茹でる、燃るなどして、燔めが効くよう処理を施す際、同様の抉りのある道具を使用し

ている事例があり、ここで示した●印の石器もその可能性がある。加えて、大塚台遺跡出土の逆台形状をした石器には、幅の狭い下部にみられる抉り状の痕跡だけではなく、上部に据えた平・斜・曲刃にも竈のように用いた痕が表れているものがある。刃部の形は上記のとおり、大きく3種類に分かれるが、平刃のものに刃こぼれや剥離痕が多く見受けられる。上部に据えた刃部の中ほどにすり減りや刃こぼれが観察されるのは1・2・3・6・7・10・11で、このうち3は刃部両端の高まりが主要剥離面側から除去されている。10のように刃部の中ほどに刃こぼれ・すり減りがみられ、両端部が凸形になるものは薄く弱い部分が欠けてしまったか、対象物をこそげるような、竈のような利用の仕方が考えられる。大塚台遺跡の台形

Ⓐ



第87図 台形様石器関連の分布



第88図 台形様石器と台形様石器に類する石器

様石器・台形様石器に類する石器は部位に応じて、切る、削る、裂くといった使い分けを行った臨機的な複合石器と考えられる。

また、上記の台形様石器とは趣を異にする資料に第6ブロックに分布する13がある。平面形は台形ではなく長方形状だが、刃先に強い光沢をもつ剥片で、正面側の刃先は丸みを帯びるが、裏面では縦10mm×横13.0mmの帯状に面的な磨りが施されている。表面の微細な剥離痕は、磨りにより穂が除去される。打点が折れて遺存しないことから、楔、あるいは鑿のような道具として用いられたものと推測される。うっすらと橙色を帯びた白色半透明の玉髓製で、同じ母岩を用いた石器は出土していない。14は南東端の第4ブロックから出土した橙色の玉髓製で短冊状を呈した楔形石器である。刃部を作出する前の素材として持ち込まれた可能性があり、14と同様の石器は後述する金沢台遺跡からも出土している。

ところで、環状ブロック群で出土する剥片の磨り、あるいは砥ぎ出しによる刃部作出例を探したところ、群馬県教育委員会 小原俊行氏より群馬県舞台遺跡^[2]の「研磨痕のある剥片」例をご教示いただいた。提示された報告書によれば、資料は厚みのあるチャート製で、研磨された部分だが、1点は側面上部の平坦面、もう1点は正裏両面であり、いずれも平坦面を広く磨っている点で、刃先だけに線状の光沢をもつ大塚台遺跡の玉髓資料とは異なっている。この違いが何に起因するかは不明だが、機能等については類例の追加を待って判断したい。

遺跡における台形様石器・台形様石器に類する石器の分布に目を向けてみると、上記14点は第1・2・7ブロックを除いた8か所のブロックで出土しており、北西から南東へ散漫に分布する傾向がみられるが、環央の第11ブロックでは3点が分布し、疎らながら分布の中心部を成している。この第11ブロックには局部磨製石斧調整剥片が9点分布しており、第11ブロックの21%を占める。局部磨製石斧4点の分布域との重なりはないため、これらから剥離された局部磨製石斧調整剥片が台形様石器類の補完材として、第11ブロックに集められたと推察される。台形様石器・台形様石器に類する石器の破損に備え、不要になった局部磨製石斧を剥片生産用の素材として遺跡に持ち込んだ可能性があり、木の伐採や動物の解体といった作業を局部磨製石斧で行った後、それらを束ねる作業に移る、大塚台遺跡の台形様石器類が分布する環央部はその結束具を加工する場ではないかと推察される。今後、使用痕のより具体的な分析を行うことで判明すると考えられる。

3 黒曜石の原産地、特に仙台秋保産の黒曜石について（第89図、図版17・21）

大塚台遺跡の環状ブロック群から出土した黒曜石は22点（総点数比12.4%）で、肉眼観察により5種の母岩に分類した。黒曜石1・黒曜石3は5点ずつ、計10点出土している。色調の違いから、青みのあるものを黒曜石1・濃褐色灰色を帯びるものを黒曜石3としたが、両母岩はともに第3ブロックの直径2.5m内にまとめて分布する上、濃淡の縞は共通するため、同一母岩の可能性が高い。黒曜石1の5点の推定产地はすべて仙台秋保であり、黒曜石3は1点のみが仙台秋保と推定された。产地が推定できなかった1点を除く3点は分析に耐えうる大きさを有していない資料である。

高原山甘湯沢産は9点（6点が同定され、肉眼観察で加えた碎片類3点を合わせた計9点）あり、母岩を黒曜石2とした。第2・5・6・11ブロックに2～3点が散在する。第35図参照。

黒曜石の原産地推定分析は明治大学黒曜石研究センターの池谷信之氏に委託し、氏のご厚意で再三の分析を行っていただいた。分析を重ねるに至った経緯は第2章に詳しいが、当初、箱根畠宿産とされた5点は、明治大学黒曜石研究センター所蔵の原産地資料と望月明彦氏の判別図から「仙台秋保2群」産と再測



第89図 大塙台遺跡と主要な石材の推定产地
(仙台秋保OB、高原山OB、下仁田町前川透閃石岩)

定され、さらに1点が加えられて計6点が「仙台秋保2群」と推定されたものである。

「秋保地区」では、名取川上流にあたる仙台市秋保町字「馬場」付近の丘陵地を構成する流紋岩の砂礫層（馬場凝灰岩）中に黒曜石の礫が含まれ、この丘陵地を刻む谷筋沿いの林道（水上南）には黒曜石が転石として認められるほか、字「土蔵」周辺では水田の耕作土からも採取できることが知られており、2019年12月、分析を受託した池谷氏自ら現地に赴き、原石を採取された。千葉県内で仙台秋保産と推定された黒曜石は印西市荒野前遺跡^[13]に次ぎ2例目である。現時点では、IX層下部段階の黒曜石産地として仙台秋保は最も北に位置する。なお、東北地方の黒曜石産地データ^[14]に原産地の一つとして名を連ねる仙台秋保であるが、原産地である東北地方でも旧石器時代に利用された遺跡は確認できない。良質な硬質頁岩が潤沢に採取できる地域においては、黒曜石は探してでも手に入れたい石材ではなかった可能性がある。

上述の黒曜石産地データを見ていくと、仙台秋保の黒曜石と類似する特徴を持つ遺跡として岩手県「下巣江（おろせ）遺跡^[15]」に行き当たる。原産地の湯ノ倉は宮城県栗原市花山本沢湯ノ倉、秋保は宮城県仙台市太白区秋保町馬場土蔵にある。秋保と湯ノ倉間は直線距離で70.9kmであり、山形との県境、奥羽山系の山並みを西に見ながら北上すれば湯ノ倉である。この山々の連なりは南から藏王山、面白山、翁ヶ岳、荒雄岳と続く火山帶であり、黒曜岩などを含む流紋岩質の溶岩帶である^[16]。「湯ノ倉産」は黒色不透明で黒みが強く、「湯ノ倉？産」は黒色不透明で灰色の濃淡が縞状となる部位がある。報告書の510頁に「下巣江の黒曜石産地は、男鹿系、湯ノ倉、小赤沢？で、男鹿系は各石器群に共通しているが、湯ノ倉、小赤沢？は尖頭器石器群I群にのみ認められる。」とあり、後期旧石器時代の後半期に限定的に用いられたことがわかる。

以下に宮城県湯ノ倉の黒曜石原産地とその特徴を吉川耕太郎氏の論考^[16]44~46頁から抜粋した。

東北日本の黒曜石は第三紀中新世以降のグリーンタフ変動期に形成された青森県深浦や秋田県男鹿産、宮城県湯ノ倉、第四紀更新世の火山により生成された岩手県零石など、約12箇所の原産地が現在のところ知られている。中略…

<宮城県湯ノ倉>

鳴瀬川上流部、奥羽山脈麓の第三紀中新世における火山性堆積物ある永志田層中に包含され、周辺の畑地で拳大程度の亜円～亜角礫が採取できる^{[17]～[18]}。漆黒不透明な黒曜石で、灰白色の縞が特徴的に見られる。

この度の分析で仙台秋保2群産と推定された黒曜石であるが、大塚台遺跡とは直線距離にして283km離れており、直接遺跡に持ち込まれたとは考えにくい。名取川を下り、太平洋を海岸伝いに南下するには河川に歩を阻まれる。山沿いを進み高原山を経由すれば、その先は川を渡渉せずに遺跡まで辿りつける可能性はある。環状ブロック群の時期には宮城県はおろか、東北地方でも確認されていない仙台秋保産の黒曜石がなぜ千葉県にあるのか、どういった経路で搬入されたのか、東北地方の遺跡における仙台秋保産黒曜石の出土例や、石器形態、製作技術など、様々な検討を行っていかなければならない。

4 大塚台遺跡環状ブロック群の位置づけ（第90図）

2005年に発掘調査報告書が刊行された酒々井町墨古沢遺跡は、最大級の環状ブロック群が検出されたことで全国的に周知された遺跡であり、2019年6月には国指定史跡に認定された。この総括報告書では全国の環状ブロック群の集成が行われ⁽¹⁸⁾、118遺跡146基が抽出されている。環状ブロック群とはブロック群の平面形が「円形・もしくは円形になると推定されるもの」で、石器の帰属時期はAT下位、武藏野台地におけるIX層～X層段階であり、不定形剥片を素材とする台形様石器と局部（刃部）磨製石斧などの斧形石器を伴うことが多い、と記載されている。斧形石器は146基中102基にみられ、69.86%の出現率だとされるが、これに大塚台遺跡が加わると147基中103基となり、70%を超える。ブロック数の平均は11.57か所、出土点数では100点～199点、200点～299点にもっと多くの遺跡が集中している。直径50mを超える大規模な環状ブロック群は少数で、その形状は概ね楕円で環央部に明確な石器空白域を持つが、直径20m以下では環央部に散漫な分布、あるいは円環部と同等のブロックを有する例があり、大半は後者に含まれる。これらのデータを鑑みると、大塚台遺跡の第1～11ブロックは、出土点数、ブロック数、ブロック群の規模や器種においてごく平均的な環状ブロック群といえる。

圈央道（大栄～横芝）が敷設される成田市、多古町、芝山町、横芝光町、山武市で検出された環状ブロック群は、成田市では天神峰最上遺跡⁽²⁰⁾、十余三稻荷峰西遺跡⁽²¹⁾、東峰御幸畠西遺跡⁽²²⁾、南三里塚宮原第I遺跡⁽²³⁾、多古町では土持台遺跡⁽²⁴⁾、芝山町では金沢台遺跡⁽²⁵⁾、山武市では四ツ塚遺跡^(26・27・28)、八幡神社北(1)遺跡⁽²⁹⁾がある。横芝光町では寺方古墳群⁽³⁰⁾や長倉鉛治屋台遺跡⁽³¹⁾、長倉宮ノ前遺跡⁽³²⁾、遠山天ノ作遺跡^(28・33)など、遺跡近傍の礫層から持ち込まれたと推定される小円礫を素材とした両極剥離（遠山技法）の石器群が知られている。

南北19.0m、東西17.5m、直径約20mを測る大塚台遺跡の環状ブロック群だが、同様の規模を持つ近在の遺跡から、墨古沢総括報告書の環状ブロック群集成表をもとに3遺跡を抜粋し、概要を記載する。

山武郡芝山町金沢台遺跡石器集中2

香取郡多古町土持台遺跡Aブロック

成田市十余三稻荷峰西遺跡石器集中2

金沢台遺跡は本遺跡の西側を南下する高谷川の水源付近にあたり、太平洋に東流する木戸川、印旛沼に西行する根本名川の分水界に位置する。直径約20m内に石器306点が8か所のブロックに分布し、局部（刃部：以下カッコ内は報告書の器種名）磨製石斧1点、打製石斧1点、ナイフ形石器1点、周縁加工尖頭器1点、台形様石器1点、両極剥離による台形様石器9点、楔形石器10点、楔形石器剥片18点、二次加工のある剥片（調整痕のある剥片）1点、微細剥離痕のある剥片（使用痕のある剥片）6点、石核4点が主要石器及びその点数である。安山岩A（ガラス質黒色安山岩・黒色緻密質安山岩）44点、安山岩B（トロトロ石）20

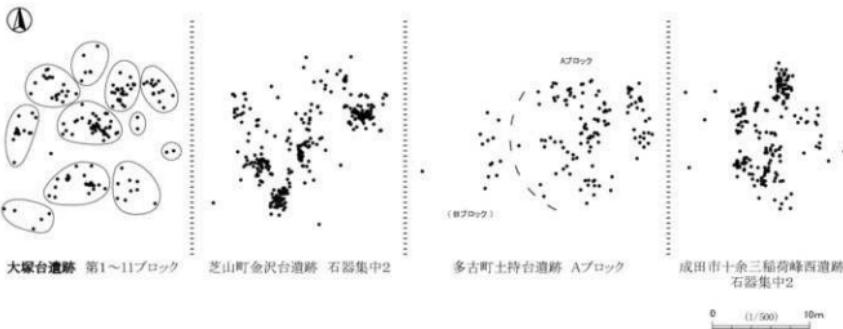
点、安山岩C10点、珪質頁岩(单独母岩、嶺岡産を含む)52点、黒曜石(大きく2母岩、一つは縞状の模様)51点、メノウ45点、チャート25点、ホルンフェルス20点、凝灰岩21点、石英7点、流紋岩2点、黒色頁岩1点、その他4点で構成される。出土層位はIX層中～上部で、大塚台遺跡よりは新しい段階に包含される石器群であるが、下総のIX層石器群に多用される扁平な小円盤の挟み割りではなく、剥片を素材とした両極剥離が駆使されている。大塚台遺跡と共通するのはこの素材の在り方で、両極剥離によって側縁を形成し、未調整の鋭い縁辺を刃部とした、加工の手間を省いたような機能的な台形様石器の存在である。また、各ブロックはそれぞれ特定の石材(母岩)で構成され、接合の大半がブロック内で収束する。

土持台遺跡Aブロックは本遺跡から南に2kmの距離にあり、南北13m、東西12m、8か所のブロックから113点が出土した小規模な環状ブロック群で、谷頭の南側斜面で検出された。出土層位は、現在の層序区分に照らすとIX層下部に相当する。主要石器としては局部磨製石斧1点、削器1点、石核2点があり、多くは剥片として報告されているが、図示された石器図からは台形様石器数点と楔形石器に分類可能な資料が認められる。これらと局部磨製石斧の刃部片を含めた器種組成に大塚台遺跡と共通する点が多い。特に、土持台遺跡第76図4の三角形状の剥片は本遺跡で台形様石器と報告した玉髓資料と形状が近似する。石材の記載がないため、モノクロ写真からの推測であるが、チャートなどの珪質な石材であろう。

十余三稲荷峰西遺跡は、利根川水系の根本名川の支流である取香川に開析された支谷の奥部にあり、舌状に張り出した台地上に立地する。2つの環状ブロック群のうち、石器集中2の規模は南北20m、東西16m、199点の石器が10か所の集中部を形成する。環央には2つのブロックがあり、明白な空白部は見られない。石材の主体は安山岩で、メノウ、珪質頁岩が僅かにみられる。台形様石器4点、二次加工のある剥片(調整痕のある剥片)5点、剥片147点、碎片13点、石核4点などが出土しているが、局部磨製石斧はない。大塚台遺跡との共通点はブロックの規模と、環央部にも石器が分布する形状である。

このほか、大塚台遺跡よりもやや規模が大きいが、3つの環状ブロック群(エリア1は弧状に並列するブロック)が検出された東峰御幸畑西遺跡のエリア1、エリア3では台形様石器と局部磨製石斧に、石材・形状が近似する資料が複数出土しており、環状ブロック間の往来をうかがわせる要素と考えていいのかもしれない。

一方、環央に明確な石器空白部をもつ大規模な環状ブロック群の一つ、印西市泉北側第3遺跡^[34-36]で



第90図 大塚台遺跡と環状ブロック群類例

は、関東一円から持ち込まれた石材・母岩がブロックごとにまとまりつつも、離れたブロック間で接合する多くの例がみられた。南北68m、東西46mの範囲から38か所のブロックが検出され、石器1,393点は17石材151母岩に分けられたが、約70%を占めるガラス質黒色安山岩と縞状の青緑色で透明感のあるチャート（現在のところ奥多摩地方の海沢層のチャートが最も近似する）を除いて多変量解析をおこなったところ、個々のブロックは分節化・均質化されつつも密接な関係を持っていることが想定された。

最大級の大きさをもつ栃木県の上林遺跡⁽³⁷⁾では「定住性の萌芽」の発現、群馬県の下触牛伏遺跡⁽³⁸⁾では複数の単位集団が一時期に集合した痕跡としてとらえられている。群馬県で大型の環状ブロック群と中型の環状ブロック群を比較検討した津島秀章氏は、大規模環状ブロック群は複数の単位集団が、中型は單一の集団が形成したもので、近接する両者は活動領域を同じくする単位集団によって造されたと指摘している⁽³⁹⁾。

大規模な環状ブロック群と、当遺跡を含む多数の中・小規模の環状ブロック群とでは器種に多くの類似点がある一方、ブロックを構成する石材種に偏りが認められる。持ち込まれた石器の原産地が多岐にわたるものが大規模な環状ブロック群を構成し、限定的なものが中・小型の環状ブロック群を構成する傾向があり、大塚台遺跡では北方から仙台秋保、高原山の黒曜石、西方からは鍋川の透閃石岩がもたらされているが、千葉県北西部地区・北部地区での検出例が多い奥多摩地方の海沢産のチャートや信州、伊豆箱根産黒曜石はみられない。大塚台遺跡の環状ブロック群に残された特定の地域からの石材、石核として消費される複数の局部磨製石斧、端部が抉れた石器や磨痕などから、往時の人々の動線と特異な生業活動の痕跡がうかがい知れよう。

第2節 奈良・平安時代

大塚台遺跡の最大の特徴は、(3)調査区に見られる濃厚な仏教色である。SI006の「佛」、SI004の「馬闍寺」「寺口」の墨書き土器、SI007の鉄鉢形土器師器（＝瓦鉢）、SI004・SI007・204CZ-27グリッドから出土している奈良三彩の火舎、SX001・SX003・SX004の火葬墓群。これらは時期的には8世紀第2四半期から第4四半期にまたがっている。当該調査区内には残念ながら村落内寺院とみられる草堂のような建物跡は検出されていないが、これらの遺物・遺構群は、村落内寺院と私度僧の存在を匂わせるものである。

火葬墓のうち、SX001とSX003の藏骨器本体と蓋は、器形や胎土などから見てほぼ同一の特徴をもつものであることから、専用の藏骨器として同時に同じところで製作されたものである可能性が高いと考えられる。そして、同時に亡くなったことだけを意味するではないが、それぞれの藏骨器に骨片と炭化材が入れられていたことから、別々の人間が荼毘に付されてそれぞれの藏骨器に埋納されているものと考えられる。これらの火葬墓の被葬者像は、全体の状況から見て「馬闍寺」という村落内寺院を仏教活動の場としていた私度僧と考えるのが、最も無理のない解釈であろうと考えられる。千葉県内を見渡すだけでも奈良三彩は10を超える遺跡で出土してはいるが、どこにでもあるというようなものではなく、奈良三彩の陶器が当時において高価なものであったであろうことは容易に想像できる。さらに、本遺跡から出土している2個体の奈良三彩火舎獸脚のつくりに違いが見られることから、それぞれ別個体の獸脚であろうと考えられ、この遺跡には2個体以上の奈良三彩の火舎が存在していたと考えられる。村落内寺院を舞台とする私度僧の活動がどのようなものであったのかは想像の域を出るものではないが、高価な奈良三彩の火舎を2個体以上所有しているというその背景は注目すべきだろうと考える。

次に、個別資料に目を向けた場合に注目されるのが、同じく(3)調査区のSI004から出土した底部内面に「升杯」の墨書を持つ土師器杯である。遺物説明のところでも記したとおり、完形品ではないため実測図から復原計算したところ、容積はおよそ250mlであった。当時の度量衡では、大升が720ml、小升がその1/3の240mlであり、この土師器杯の容積はほぼ小升に相当する。養老令の記載では、塩、橡（とち）、麦、粟、稻、豆などに「升」の単位が使われていることから、集落内においてこれらのものを計量する際に用いられていたものと考えられる。

註1 アクチノ閃石は「緑閃石(actinolite)」とも呼ばれ、透閃石(tremolite)と同じくカルシウム角閃石の一種で單斜晶系、緑色で硬度5~6、比重3.0~3.4、長柱状結晶（地学団体研究会編、1996）、磁石に引き付けられる力は弱く（レベル1⁺~1⁻）、帶磁率は低い（5前後~数10×10⁻⁵×SI前後）。緑閃石は透閃石のMgの一部がFeに置き換わることで連続的な固溶体をなし、透閃石~緑閃石系列とされる。

$Mg/(Mg+Fe)=0.5\sim 0.9$ が緑閃石で、それ以上の0.9~1.0が透閃石とされる。両者は色が若干違うが、正確な判定には元素分析が必要である。フリー百科事典「ウィキペディア」ほか

透閃石岩のでき方：蛇紋岩帯の中での熱水を伴う交代作用により局部的に透閃石や緑閃石（アクチノ閃石）が形成されて透閃石岩ができる。透閃石岩は蛇紋岩帯中にごくわずかに脈状に産するものであり、その産地は極めて限定される。

註2 比重測定法：アルキメデス法 石器の比重=重量÷（水中重量-水だけの重量）

厳密には測定時の温度管理や岩石に入り込んだ空気の除去といった作業が必要であるが、諸事情により簡易な方法をとった。室温27度、空気抜きは水中に5分間留めた。計測には上皿天秤（最大620g）とベットボトルの下部を使用した。天秤の最大計測量が620gのため、より軽量の容器を必要としたためである。得られた本資料の比重は3.067027…である。比重は緑閃石の3.0~3.4（透緑閃石は3.05~3.22）の範囲内であり、顕微鏡による鉱物観察・磁石鑑定法においても「緑閃石岩」の範疇に収まる。

なお、蛇紋岩の比重は2.7前後で強い磁性がある（柴田氏は2.55~2.75⁽¹⁾）。透閃石の比重は2.99、針状結晶は透明である。

註3 蔵塚系ナイフ形石器：長さと幅がほぼ同じくらいの寸詰まりの剥片を使って、刃となる部分に素材剥片の鋭い縁を残し、基部に加工を施した石器。刃となる部分は、平坦なものと斜めのもの、尖るものなどがある。

註4 国立研究開発法人産業技術総合研究所の地質図では仙台秋保黒曜石原産地に火成岩の層が確認できる。秋保の地質は新生代新第三紀中新世のデイサイト・流紋岩溶岩、火碎岩で構成される。現在、見つけることが難しいといわれる秋保産の黒曜石だが、地質図に従って周辺を探索すれば近辺の河川や水田など、堆積物に埋もれていない場所で採集可能である。

参考文献

- 1 柴田 徹 2009「比重を加味した岩石種判定基準の提案」『松戸市立博物館紀要』16、1-19頁
- 2 柴田 徹 2010「比重から見た松戸市内の磨製石斧について」『松戸市立博物館紀要』17、1-14頁
- 3 中村由克 2010「野尻湖遺跡群における石斧石材の再検討-「蛇紋岩」とされた石材の正体をさぐる

- 』『日本考古学協会第76回総会研究発表要旨』126-127頁
- 4 中村由克 2011「旧石器時代における石斧の石材鑑定」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』19、31-54頁
- 5 中村由克 2013「富山県境A遺跡における縄文時代磨製石斧の石材利用」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』21、9-28頁
- 6 中村由克 2015「後期旧石器時代における透閃石岩製石斧のひろがり」『旧石器研究』11、65-78頁
- 7 中村由克 2019「石斧石材の獲得－磨製石斧石材の透閃石岩－」『ナイフ・石鎚・磨製石斧－石材資源とその流通－』明治大学黒曜石研究センター
- 8 高橋直樹 2015「全農教 観察と発見シリーズ 石ころ博士入門」全国農村教育協会
- 9 岩宿博物館 2005「環状ブロック群－3万年前の巨大集落を追う－」第40回企画展展示図録8頁
- 10 岩宿博物館 2006「岩宿時代はどこまで遡れるか」第42回企画展展示図録7-8頁
- 11 池谷信之 2019「海を渡る勇気」「ひととき」8月号 ウェッジ社
- 12 麻生敏隆ほか 2005「舞台遺跡(3) 北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第30集」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第345集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団121図159番
- *舞台遺跡は群馬県伊勢崎市三和町に所在し、大間々扇状地の西南端部にあたる。出土した石器群の平面形態は半環状ブロックで、器種は敲石・台形様石器・尖頭状石器・ナイフ形石器・搔器・石刃・彫刻刀形石器があり、石材はチャートと頁岩を主体とする。
- 13 新田浩三 2012「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X XV -印西市荒野前遺跡(下層)-」(公財)千葉県教育振興財團
- 14 赤星純平 2018「日本海城を南下する黒曜石」『ナイフ・石鎚・磨製石斧－石材資源とその流通－』明治大学黒曜石研究センター
- 15 村木 敬 2013「下嵐江I遺跡・下嵐江II遺跡発掘調査報告書 胆沢ダム建設事業関連発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第608集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 16 吉川耕太郎 2009「東北日本の小規模黒曜石原産地の利用と拡散」『黒曜石が開く人類社会の交流』公開シンポジウム予稿集 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤A)「黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容」グループ
- 17 井上真理子 1985「大木圓貝塚出土の黒曜石製石器の原石起源について」『北奥古代文化』第16号 北奥古代文化研究会 1-30頁
- 18 佐々木繁喜 1997「東北地方の黒曜石」『岩手考古学』第9号 岩手考古学会 45-83頁
※17・18は参考文献16 吉川2009より転載した
- 19 酒井弘志・村井大海ほか 2019「第5章第2節 日本列島環状ブロック群集成」『墨古沢遺跡総括報告書－下総台地に現存する日本最大級の旧石器時代環状ブロック群－』酒々井町教育委員会
- 20 永塚俊司 2001「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X V -天神峰最上遺跡(空港No64遺跡)-」(財)千葉県文化財センター
- 21 永塚俊司ほか 2000「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X II -十余三稻荷峰西遺跡(空港

- No68遺跡) -』(財)千葉県文化財センター
- 22 永塚俊司 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅢ－東峰御幸畑西遺跡(空港No61遺跡)－』(財)千葉県文化財センター
- 23 宇井義典 2004『南三里塚宮原第Ⅰ遺跡・南三里塚宮原第Ⅱ遺跡』(財)印旛都市文化財センター
- 24 三浦和信ほか 1986『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書－林小原子台・巣根・土持台・林中ノ台・吹入台－』(財)千葉県文化財センター
- 25 永塚俊司ほか 2004『建設センター・保全事務所地内埋蔵文化財調査報告書 芝町金沢台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 26 西口 徹ほか 2001『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書7－松尾町・横芝町四ツ塚遺跡・松尾町千神塚群－』(財)千葉県文化財センター
- 27 島立 桂 2007『四ツ塚遺跡・中島遺跡－国道126号線山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書VI－』(財)山武都市文化財センター
- 28 新田浩三 2020『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書36－成田市夜番Ⅰ遺跡・横芝光町遠山天ノ作遺跡・横芝光町四ツ塚遺跡・山武市四ツ塚遺跡－』(公財)千葉県教育振興財団
- 29 永塚俊司 2009『両総農業水利事業第3揚水機場建設工事埋蔵文化財調査報告書2－山武市八幡神社北(1)・(2)・(3)遺跡－』(財)千葉県教育振興財団
- 30 島立 桂 2006『寺方古墳群－国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書Ⅲ－』(財)山武都市文化財センター
- 31 島立 桂 2007『長倉鍛冶屋台遺跡－国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書V－』(財)山武都市文化財センター
- 32 島立 桂 2007『長倉宮ノ前遺跡－国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書IV－』(財)山武都市文化財センター
- 33 奥田正彦・高橋博文 1996『主要地方道成田松尾線Ⅲ－鯉ヶ淵遺跡・中台柿谷遺跡・遠山天ノ作遺跡－』(財)千葉県文化財センター
- 34 山岡磨由子 2011『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXⅢ－印西市泉北側第3遺跡(下層)－』(財)千葉県教育振興財団
- 35 山岡磨由子 2012『泉北側第3遺跡環状ブロック群の“場”－石のまとまりはなぜ“輪”を描くのか－』『研究連絡誌』73号 (財)千葉県教育振興財団
- 36 山岡磨由子・青山幸重 2013『環状ブロックの“場”その2・神山型彫器に類する資料について－泉北側第3遺跡・復山谷遺跡(6次～8次)補遺－』(公財)千葉県教育振興財団
- 37 出居 博 2004『上林遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書第30集 佐野市教育委員会
- 38 岩崎泰一・小島敦子 1986『下触牛伏遺跡－身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 39 津島秀章 2009『集合と分散－石器原産地分析からみた中型環状ブロック群の構造－』『研究紀要』27 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

写 真 図 版



大塙台遺跡周辺航空写真 (国土地理院CKT793-C19B-25 昭和54年12月撮影)



調査前風景



上層確認調査風景



下層確認調査風景



199CV-12下層土層断面



198CU-78下層土層断面



SK001全景



SK001土層断面

(1) 調査風景及び遺構



環状ブロック群全景 北東から



199CW-28東壁土層断面

(2) 旧石器時代遺物出土状況 1

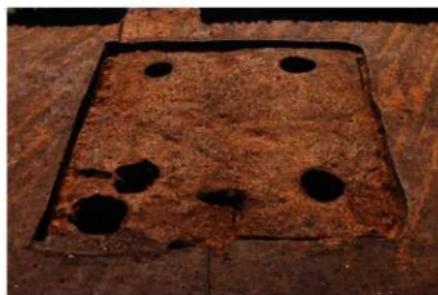
図版4



(2) 旧石器時代遺物出土状況 2



縄文時代遺物集中地点出土状況 北西から



SI001全景 北から



SI001遺物出土状況 北から



SI002全景 北東から



SI002遺物出土状況 北西から



SI002遺物出土状況 北西から



SI002カマド 南西から

(2) 遺構



上層航空写真 西から



上層航空写真 直上から

(3) 調査区全景



上層確認調査 SI002検出状況



上層確認調査 SI003検出状況



204CZ-27下層土層断面



204DA-21下層土層断面



SI001全景 南から



SI001土層断面 南西から



SI001カマド東脇遺物出土状況



SI001カマド内遺物出土状況

図版 8



SI002・SK001全景 南から



SI002土層断面 西から



SI003全景 南から



SI003土層断面 西から



SI003カマド 北西から



SI004全景 南東から



SI004遺物出土状況 南東から



SI004奈良三彩獸脚出土状況



SI004土層断面 南東から



SI004カマド土層断面 南東から



SI005全景 南東から



SI005土層断面 南西から



SI006全景 南から



SI006土層断面 南から



SI006遺物出土状況 南から



SI006遺物出土状況近景 1 東から



SI006遺物出土状況近景 2 東から



SI006調査風景



SI007全景 南から



SI007土層断面 西から



SI007カマド遺物出土状況 1 南から



SI007カマド遺物出土状況 2 南から



SI007遺物出土状況 南から



SI007カマド東脇遺物出土状況 南から



SI007カマド西脇遺物出土状況 南から



SI007奈良三彩獸脚等出土状況 南から



SI008全景 南から



SI008土層断面 南から



SI008遺物出土状況 南から



SI008遺物出土状況近景 南から



SI008カマド 南から



SI008調査風景



SX001・002・003、SK007全景 南から



SX001・002・003、SK007検出状況 南から



SX001検出状況 南から



SX001土層断面 南から



SX002検出状況 南から



SX003検出状況 南から



SX004検出状況 南から



SX004土層断面 南から





(2)環状ブロック群(第1~11ブロック)出土石器1 表面



(2)環状ブロック群(第1~11ブロック)出土石器1 裏面



(2)環状ブロック群(第1~11ブロック)出土石器2 表面

(2)環状ブロック群(第1~11ブロック)出土石器2 裏面
旧石器時代石器2



(2)環状ブロック群(第1~11ブロック)出土石器3・(2)第12ブロック出土石器・単独出土石器 表面



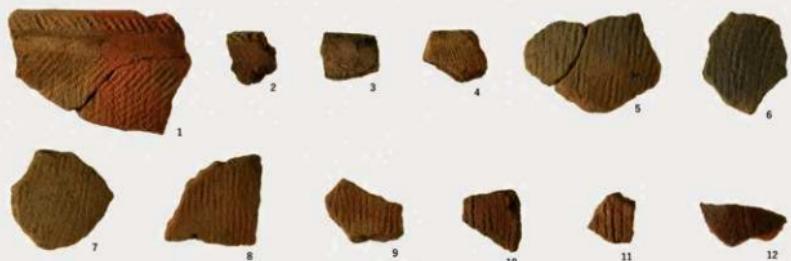
(2)環状ブロック群(第1~11ブロック)出土石器3・(2)第12ブロック出土石器・単独出土石器 裏面他



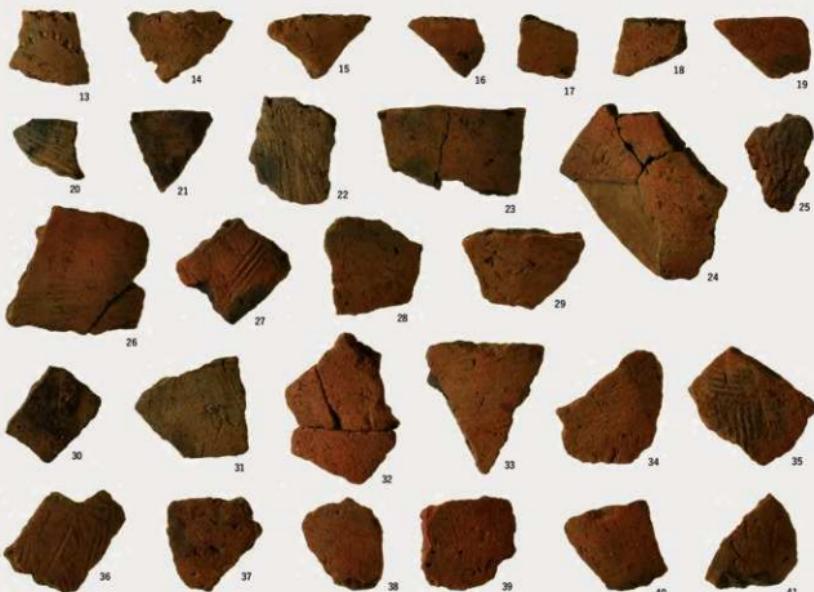
(1) 遗構外出土



(2) 遺物集中地点及び遺構外出土



(1) 遺構外出土縄文土器・(2) 遺物集中地点及び遺構外出土縄文土器 1



(2) 遺物集中地点及び遺構外出土縄文土器 2

縄文土器 1



(2)遺物集中地点及び遺構外出土縄文土器 3



(3)遺構外出土縄文土器 1



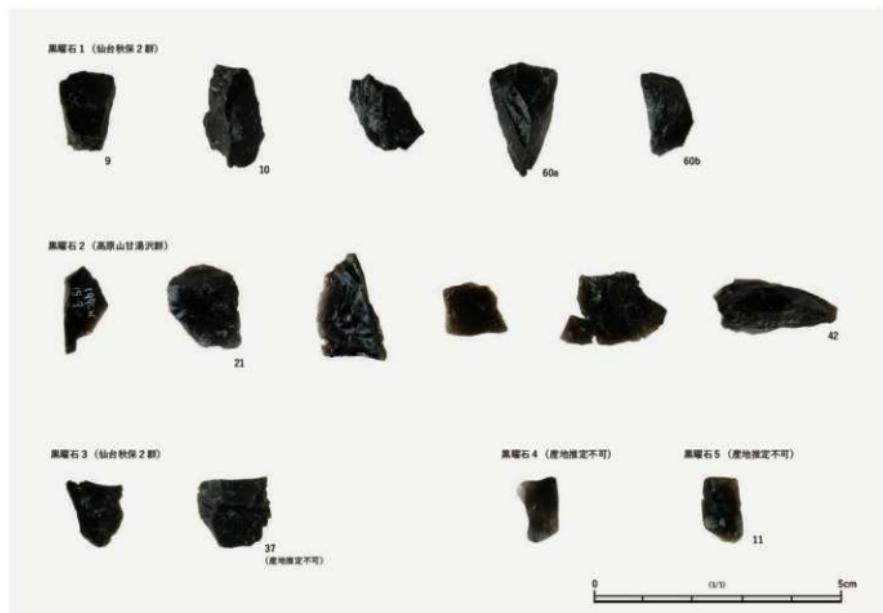
(3) 造橫外出土繩文土器 2



繩文土器 3



縄文時代石器



下層出土黒曜石



(2) 坚穴建物跡出土遺物



(3) 堪穴建物跡出土遺物 1



(3) 坚穴建物跡出土遺物 2



(3) 堪穴建物跡出土遺物 3



(3) 坚穴建物跡出土遺物 4



(3) 竪穴建物跡出土遺物 5



(3) SI007-15



(3) SI007-18



(3) SI007-16



(3) SI007-19



(3) SI007-20



(3) SI007-23



(3) SI007-17



(3) SI007-21



(3) SI007-26



(3) SI007-18



(3) SI007-22



(3) SI007-24



(3) SI007-21



(3) SI007-24

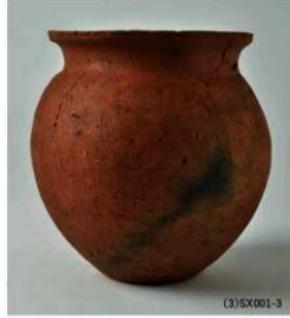


(3) SI008-1

(3) 坚穴建物跡出土遺物 6



(3) 堪穴建物跡出土遺物 7



(3) 火葬墓·遗構外出土遗物

報告書抄録

千葉県教育振興財団調査報告第784集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書38

—多古町大塚台遺跡(1)～(3)—

令和3年3月19日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 東日本高速道路株式会社
千葉市美浜区若葉2-9-3

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株 式 会 社 弘 文 社
市川市市川南2-7-2
